



和ヶ原聡司  
イラスト ■ 029  
Satoshi Waghara  
Illustration ■ Oniku

わ-6-4

はたらく魔王さま! 4

和ヶ原聡司



9784048863445



1920193005905

ISBN978-4-04-886344-5  
C0193 ¥590E



発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 590 円

※消費税が別に加算されます



**魔王さま、無職の  
家無き子になる!?**  
再就職先は海の家! 庶民派ファンタジー第4弾!!

第17回 <銀賞>受賞作 最新刊

電撃小説大賞

第18回電撃小説大賞 受賞作品好評発売中!!

大賞

エスケープ・スピキド  
九岡 望 イラスト/時

金賞

あなたの街の都市伝鬼!  
藤猫芝居 イラスト/うらび

銀賞

勇者には勝てない  
素田志郎 イラスト/refela

銀賞

ウィザード&ウォーリアー・  
ウィズ・マネー  
三河ごーすと イラスト/切符

【電撃文庫MAGAZINE賞】

明日から俺らがやってきた  
高樹 渾 イラスト/ざん

発行●アスキー・メディアワークス



和ヶ原聡司

イラスト 029

Satoshi Waghara  
Illustration Oniku

4



## はたらく魔王さま! 4

バイト先のファーストフード店の休業で、職を失った魔王。さらに住居であるアパート、ヴィラ・ローザ管塚も、ガブリエルとの戦いで壊れた壁を修理するため、一時退去しなくてはならなくなってしまった。

戦と魔王城を同時に失い失意の魔王は、大家・志波の勧めで“海の家”ではたらくことに。その店は、志波の姪だという女性・天祢が経営しているらしい。しかも、魔王に恋する女子高生・千穂や、魔王の命を狙う勇者・エミリアまでもが魔王を追って海の家に来てきて——!?

夏で海でも仕事です! な、庶民派ファンタジー第4弾!



9784048863445



1920193005905

ISBN978-4-04-886344-5  
C0193 ¥590E



ASCII  
MEDIA  
WORKS

発行 ● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 **590 円**

※消費税が別に加算されます



わ が はらりと し  
**和ヶ原聡司**

「執筆を始める和ヶ原に仕事部屋を用意する相棒」

和「今からカンヅメ確定!?!」

相「入りたくなければコンスタントに仕事しなさい」

【電撃文庫作品】

**はたらく魔王さま!**

**はたらく魔王さま! 2**

**はたらく魔王さま! 3**

**はたらく魔王さま! 4**

イラスト: **029**

鎌雨りの肉「お前の鎌雨りは住み心地がいいからしばらく住みついてやんよ」

正月太りって怖いです。

はたらく魔王さま! 4

和々原聡司

電撃文庫  
2281

はたらく魔王さま! 4

和々原聡司

電撃文庫2281

DENGEKI BUNKO

# はたらく まじない

4

和ヶ原聡司

イラスト 029

Satoshi Wajihara  
Illustration Oniku





## CONTENTS

序章

P010

魔王、家も仕事も失い途方に暮れる

P017

勇者、魔王の職場の大改造に協力する

P121

魔王、銚子と世界の広さを知る

P217

終章

P350

One  
Day  
of  
Summer



×画像はイメージです

# 鎌月鈴乃

(訂正部職員 クレティア・パール)

すずねーちゃ! きれーなふくの。すずねーちゃもごはんつくるの! だいすき!



# 漆原半蔵

(悪魔大元帥 ルシフェル)

るしふえる! にーとつてなあに? みんなるしふえるめつてしないで。だいすき!



# 芦屋四郎

(悪魔大元帥 アルシエル)

あるしえー! ごはんつくるの! おいしいの! おそうじもするの! だいすき!



# 佐々木千穂

(桜楓北高校 二年A組)

ちーねーちゃ! にこにこでふかふかのの! ばばもままもなかよしの。だいすき!



# 遊佐恵美

(勇者 エミリア・ユスティーナ)

まま! ばばとけんかしちゃめつなの。ずっといっしょなの! だいすき!



# 真奥貞夫

(魔王 サタン)

はばー! いつもおしごとが んばってるの! ずっといっしょなの! だいすき!



# 登場人物紹介

がたんぱの



# 和ヶ原聡司 4

イラスト ■ ONI6

Satoshi Waghara  
Illustration ■ Oniku



## 序章

エメラダ・エトウ・ヴァは、ストレスでタダでさえ低い身長が更に縮む思いだった。

神聖セント・アイレ帝国の宮廷法術士でありながら勇者の仲間としても名の知れた彼女は、現在西大陸で最も強い発言力を持つ人間の一人である。

元々宮廷法術士というのは学者、ご意見番という趣が強く、魔王軍侵攻以前の彼女はあまり政治や外交に口を出す立場になかった。

だが勇者の仲間として世界中を旅した彼女の知見は、世界を復興させる役目を負う五大大陸連合騎士団でも耳目を集めていた。

そのため連合騎士団の中でも中枢に近い場所で見聞を出す立場になった彼女の責務は、魔王軍討滅前に比して飛躍的に重いものになっていたのだ。

そのことでセント・アイレの重鎮からはやつかまれ、オルバの事件で関係が一気に悪くなった教会からは水面下で徹底的に敵視され、

「中央大陸が復興したら亡命したいです」

と、旅の仲間のアルバートに本気で愚痴るほど、彼女のストレスは危機的状況にあった。

救いと言えば彼女の出向先である五大陸連合騎士団での管理担当が、悪魔の残党討滅司令部であることくらい。

もちろんよほど強力な残党相手でなければエメラダ自身の出番は無い。

それでも中央大陸に残った悪魔を掃討するに当たっては、各国の戦士達が一致団結し、弱いものを守る純粋な正義が執行されている。それを見ると、世の中まだまだ捨てたものではないと実感できるからだ。

だが、エメラダと、アルバートだけは知っている。

勇者と魔王の戦いは、遠い異世界で今も続いていることを。

そして人々はそのことを知らず、魔王軍壊滅から二年も経ないうちに勇者エミリアの名を伝説という忘却に追いやりうとしていることを。

オルバの工作により失われようとしていたエミリアの名声を取り戻そうと、当初はエメラダもアルバートも必死になっていた。

だが、既に世界の状況は、救世の勇者エミリアの名を必要としていなかったのだ。

生きていようが死んでいようが、世界に生きる多くの人々にとって、エミリア・ユスティーナの名は『世界のどこかにいた勇者様』というだけの存在でしかない。

現実味を持ってその名に接することができるのは、エミリア個人を知るほんの一握りの人間だけ。

そしてエミリアの名声を復活させるということは、彼女を伝説に封じ込めようとした教会の不正を暴くことになり、教会の權威を失墜させてしまう。

権力者の義憤により執行される正義は、時として民を傷つける。西大陸の二大勢力であるセント・アイレと大法神教会の対立が決定的になれば、大陸全土が二つに割れて、総合的な国力は衰退を始めるだろう。

エメラダは、迷つてしまった。

他の四大大陸が復興に力を向けているのに、西大陸だけが内紛で無駄な労力を消費してしまうことだけは、避けねばならない事態だった。

そして政治家としてのエメラダ・エトウーヴァは、友の名誉より、国の未来を選んだ。

それはエメラダが冷酷であるという意味ではなく、その決心を後押しする状況が生まれたからだ。

訂教審議官クレステイア・ベル。

死の鎌。デスサイズ・ベルの異名で恐れられた元筆頭異端審問官が、今、エミリアの心強い仲間になっているというのだ。

大神官聖壇に直接意見を具申できる立場にある聖職者が、エミリアの名誉回復と教会正義の立て直しに動いたことは、エメラダにとって素晴らしいニュースだった。

彼女がオルバ直下の組織にいた、ということも大きい。

クレスティアがエメラダに代わり教会の不正を正せば、六人の大神官が背教行為を行ったことは民に動揺を生むだろうが、当の教会が自浄作用を働かせたことになり、信仰に基づく安定は大きく揺らぐことはないだろう。無駄な政争も、民の混乱も最小限で済む。

元から俗世で名を高めていたエメラダが表だって教会と事を構えれば、どうしても事態は荒事に発展し、民の動揺も大きい。

エミリアの第一の友としては少し癪だが、友の名誉と民の安寧を両立するには、自分が動くよりクレスティアが動いたほうが良いと、エメラダは判断した。

いずれクレスティアと直接まみえて、同じ友のために戦ったことを讀え合える日は来るのだろうか。

「来てほしいようならそうでないようなら」

五大陸連合騎士団本部に与えられた執務室で報告書を読み返しながら、エメラダは独りごちる。

「でもエミリアはもう戻ってこないほうがいいのかもしれない」

あの平和で豊かな世界、日本という異世界。

彼女は、あの国を第二の故郷にして、静かに暮らすのが良いのではないかとも思う。

エメラダは、執務机の隅に置いてある法術道具・ケータイデンワをちらりと見た。

「ねえちょっと聞いてよエメ！」

ぶりぶりと怒りながら、どこか元気な声。

「魔王のくせに、悪魔のくせにあいつら、地域清掃とかやってるのよ、笑っちゃうわ」

あの、父の仇を討つだけが人生の全てと思っていた教会騎士が、

「ねえエメー！ 私負けたの！ 魔王なんかに負けたの！ なんでオムツの取り換えってこんなに難しいの？」

年相応の少女のように、怒り、泣き、笑っている。

先日相談された『果実から生まれた少女』の正体についてはさすがのエメラダも度肝を抜かれたが、どうも向こう側では出自よりもその子がエミリアと魔王を両親と認めていることの方が重要で、天界とかセフィラとかもつと考えるべきところはあまり問題視されていない。

「お父さんの小麦畑を生き返らせない」

それがエミリアの夢だった。

だが、彼女はエンテ・イスラに戻れば、エミリア・ユステイーナであり、世界を救った英雄である。その名譽が回復されれば、人は偽り無き正義を標榜する資格を得る代わりに彼女のささやかな夢を奪うだろう。

自分も、エミリアの友という一個人として彼女に接することは、不可能ではないにしろ困難を極めるだろう。

既にエミリア本人の意思に関わりなく、彼女は政治の単位なのだ。

「ままなりませんね、人の世は」

ますます身長が縮みそうなので、エメラダはわざとため息を大きく一つついて気持ちを切り替える。エミリアが本懐を遂げた後のことは、エミリア自身が決めればいい。

彼女がエンテ・イスラに戻るにしろ戻らないにしろ、自分はただ、最善の世界を用意できるように働くのみだ。それが一人の少女を勇者に祭り上げてしまった、人としての責務だと思われるから。

そしてふとエメラダは、魔王サタンももうエンテ・イスラには戻ってこないと勝手に決めつけている自分に気がついた。

理由は明白。魔王もまた、エメラダやエンテ・イスラの人々が知る魔王ではなくなっているからだ。

魔王サタンは人間の下で勤勉に働き、人間と共に実直に生き、人間の親のように「果実から生まれた少女」の親代わりをしようとしていると、他ならぬ勇者エミリアがそう認めているのだ。「うやむやのままなし崩しに平和になるか、新たな犠牲を生んでもすべてをはつきりさせるか、悩みどころですね」

エミリアの友エメラダ・エトウ・ヴァと、神聖セント・アイレ帝国宮廷法術士の二人が、自分の中でせめぎあつた。

「あれ……？」

複雑な思いに囚<sup>とら</sup>われて、ついルーチンワーク的に判を押そうとした書類の内容に、思わずエメラダの動きは止まった。

ここ半月ほどで、悪魔の討滅数が妙に増えていることに気がついた。一度の出動で目撃された悪魔が、緩やかだが確実に数を増しているのだ。

「……なんかういやあな感じですよ」

先月などは、討伐数ゼロ、という日すらあったのだ。一日一日の推移は微増だが、この半月程はその微増が積み重なって、しかも減ることがない。

もちろん討伐対象数が増えたことで犠牲者も少なからず出ており、エメラダは顔を曇<sup>くも</sup>める。あまり続くようなら、自分も出張って本格的に調査をした方が良くかもしれない。

そう考えて、自分の所感を別紙に書きとめようとしたときだった。

「エメラダ様っ!!」

執務室にけたたましく駆け込んできた者があった。北大陸から派遣された従騎士だった。

「どうしましたか?」

若い従騎士の顔面は蒼白で、息を切らしながら、瞳は不安に揺れていた。

聞く前から、絶対にいい知らせではないと分かる顔だった。

魔王、家も仕事も無い遠方に暮れる



流れる銀の髪は、夜空の天の川の如く美しい輝きを放っていた。

銀河に揺蕩う一對の瞳は静かな華やかさと威厳を備え、宇宙に君臨する太陽と月の光に勝るとも劣らぬ莊嚴さを醸し出している。

「美しい……」

彼の魂を抜かれてしまったかのような眩しさは、聞く者の耳に届く前に空気の中に霧散した。視線を別の場所に移せば、そこは一転、力に溢れた躍動する四肢が描く、生命力の活動が見て取れた。

発展途上どころか、まさに発展の出発点である無垢なる姿は、無限の可能性を秘めているという点に於いて、この世のあらゆる芸術品をも凌駕する美しさの極みに達しているようだ。

カモシカのようにしなやかで、それでいて百合の花のようにたおやかな足。

天使の翼のように軽やかで美しいのに、豹のように無惑的で鋭く閃く腕。

何よりも、めまぐるしい変化をこの世のどんな万華鏡よりも美しく、薔薇よりも華やかに、牡丹よりもたおやかに、桜のようにはかなげに映し出すその表情たるや、千の音楽と万の詩編を用いても、到底表すことなどできはしまい。

「くふふふふ」

彼がそのすべてに心奪われ、周囲が見えなくなつたとて誰が責めることができるか。

「あの……真奥さん」

「くははははは」

何故なら目覚めてから眠りにつくまで、心はずっと囚われたままなのだから。

「真奥さん、もうちょつと声落として……」

「ふははははは」

心どころか、命までも囚われているのかもしれない。

「真奥さんってばっ！」

「ふはっ！ ど、どうしたちーちゃん!？」

肩を強く揺さぶられ、真奥貞夫は気持ち悪い笑みを浮かべた顔からようやく我に返った。

振り返ると、戦場の後輩にして己の正体を知り、日本で唯一全幅の信頼を置ける少女が頬を膨らませて、腰に手を当てている。

マグロナルド・幡ヶ谷駅前店のスタッフルームにて、世界征服を目指す魔王は、女子高生に諷言された。

「私でも正直ちよつと不気味に思っちゃう笑い声が、キッチンまで聞こえてきます！」

「お、あ？ ああ、すまん、またちよつと我を忘れてたみたいだ」

上背のある真奥を見上げて顔をぶりぶりさせている佐々木千穂は、真奥の手にある写真屋で無料配布しているような簡易アルバムを見て、困ったように眉根を寄せる。

「もう……また、アラス・ラムスちゃんの写真見てたんですね」

「そーなんだよっ！ なあなあこれちよつと見てくれよ」

千穂に話題を振られた真奥は、三秒前に何を言われていたのかも忘れて、アルバムを突きつける。

「……また新しい写真ですね」

見せられた写真には、銀髪の快活そうな童女が、両手を広げて、どこかの芝生らしき場所を走りまわっている姿が写し出されていた。

「や、実はこれ写真じゃねえの。動画の一部分をキャプチャーつての？ くり抜いてプリントしたもんなんだよー」

「……」

「恵美の野郎がなっかなか連れてきてくれねえからさ、もう待つしかないこつちとしてはじりじりすんじやん？ これ、こないだ幡ヶ谷のスポーツセンターにアラス・ラムスと出かけたときのなんだが、もう一日走り回って大変だったぜ！」

「……良かったですねー」

千穂としては、他に返事のしようもない。

「なあ、いる？ アラス・ラムスの新しい写真いる？」

「……しばらくいいです。結構いっぱいもらいましたから」

真奥に好意を持ち、アラス・ラムスのことも大好きな千穂をして、さすがについていけずに

差し出される写真をやんわりと返す。

この二週間あまり、一度はいなくなってしまったと思ったアラス・ラムスが恵美に連れられて戻ってきてから、真奥のアラス・ラムスへの接し方は大事にすることを通り越して完全に過保護の域に達していた。

その溺愛<sup>どくあい</sup>ぶりは、未だかつて生活必需品以外のものを購入したためしのない真奥がアラス・ラムスの全てを記録するため、型落ちのデジタルカメラと写真印刷用のプリンターを購入したほどだから、いかに重症か分かるうというものだ。

デジカメで撮影した写真や動画を、パソコンと過去の栄光しか取り柄<sup>いかり</sup>の無いノート墮天使<sup>でてんし</sup>漆原<sup>うるは</sup>平蔵<sup>へいぞう</sup>に保存させて、アラス・ラムスがいないときにそれを見て心を癒<sup>いやす</sup>しているのだが、当然そんな生活必需品の購入に、魔王城の金庫番たる芦屋<sup>あしや</sup>四郎<sup>しろう</sup>はいい顔をしながらった。

インクのランニングコストが意外とバカにならず、加えて漆原がいつもパソコン作業を終えてもプリンターの電源を切らず無駄な待機電力を使うので、質素節約を魔界の国是<sup>こくぜ</sup>としたい芦屋にとってはストレスの種が増加したことになる。

「休憩時間<sup>きゅうけいじかん</sup>だから何しててもいいんですけどね……もうすぐ木崎<sup>きさき</sup>さん帰ってくるんですから、ちょっとシヤンとしてくださいよ？」

「大丈夫！ オンオフの切り替えはきちんとできてるから！」

女子高生に綱紀<sup>きょうぎ</sup>の緩みを指摘される時間帯責任者兼魔王が崩壊<sup>くわくわい</sup>しまった相好<sup>さうごう</sup>で言ったところ

で、なんの説得力も威厳も無い。

月に何度か、アラス・ラムスのもう一人の「親」である宿敵にして勇者、遊佐恵美に連れられてやってくる子供を溺愛する真奥の姿は、離婚調停の末に親権争いに敗れた父親のそれである。真奥の本来の姿や目的を知っているだけに、千穂は呆れるより前に色々心配になってくる。「真奥さん、家に帰ったらアラス・ラムスちゃんのことばかりで、大丈夫なのかな。それとも、デジカメやプリンター買うくらいだし、少しは貯金あったりするのかな。でも、他に仕事してらって聞いたことないし……」

とりあえず言うことは言ったのでスタッフルームを後にした千穂は店に掲げられたカレンダーを見て、不安げに呟く。

「明日からお店閉まっちゃうのに……」

# ※

異世界エンテ・イスラを征服せんとした魔王サタンこと真奥貞夫と、エンテ・イスラを魔の手から救わんとした勇者エミリアの仮の姿・遊佐恵美。

二人を「ばば」と「ママ」だと言う赤ん坊、アラス・ラムスを巡り、魔王と勇者は不承不承協力して慣れぬ育児に奮闘することになった。

そのアラス・ラムスを狙う大天使ガブリエルとの直接対決は、様々な予期せぬ事態の積み重ねの末、辛くも『両親』に軍配が上がった。

勝利というよりも、ガブリエルの目的が達成不可能になったことによる、ノーゲーム扱いのようなものののだが、危ういところでアラス・ラムスは自身の望む場所にいられることになったのだ。

問題はそのアラス・ラムスが、恵美の持つ進化聖剣・片翼と融合してしまったことだ。恵美の聖剣とアラス・ラムスは、セフィロトの樹に生る世界を支える木の実の一つ、イエソドのセフィラの欠片から生まれた存在だった。

ガブリエルの目的は、アラス・ラムスと聖剣を奪還し、イエソドの欠片を繋ぎ合わせて本来のセフィラの形状に戻すことだった。

普通の人間には想像もできないほど長い時間放置していたにも関わらず、何故今になって慌てたようにイエソド修復に躍起になるのかは分からない。

しかし恵美の肉体から分離が不可能な聖剣と、アラス・ラムスが融合してしまったことでガブリエルの目的は当面達成不可能になる。

そのためアラス・ラムスは、それまで暮らしていた東京都渋谷区笹塚の築六十年のアパート、ヴィラ・ローザ笹塚二〇一号室に入居する魔王城から、恵美の暮らす杉並区永福町のマンションに強制的に引っ越しとなった。

そこで発生した問題。

アラス・ラムスが、「ばば」である真奥を恋しがるのである。

勇者たる恵美は、本来なら心を鬼にして、教育どころか人間の歴史に対して悪影響しか及ばさない魔王のそばになどアラス・ラムスをやるべきではないのだ。

だが、人格を有する聖剣となったアラス・ラムスは、困ったことにさびになると恵美の頭の中で泣き出してしまふのである。

赤ん坊の号泣とは、なまじの猛獣の咆哮よりよほど強い破壊力を持つ。

融合当初、恵美はアラス・ラムスを極力真奥の所にやらないようにしようと決心したのだが、その決心はたった三日で脆くも崩れ去った。

アラス・ラムスの精神的なありようは聖剣状態でも赤ん坊状態でも変わらないらしく、仕事中だろうが睡眠中だろうが恵美の都合などお構いなしに「ばばにいたい！」と大騒ぎになつてしまふ。

恵美にだけ聞こえる夜泣き、という誰にも理解されない悲惨な事態を避けるために、結局以前にも増したベースで、恵美は魔王城に通わざるを得なくなってしまったのだ。

そうでなくても、食事にはみがき、おむつの交換等、先日まで魔王城の住人達が四苦八苦した艱難辛苦極まる育児道を恵美も通っており、簡単に解決できることは簡単に解決してしまおう、という弱い心を止めることはできなかった。

基本的には恵美の言うことを聞いてくれるので、不満があっても癪癪を起こして暴れることではないのだが、恵美と融合していても、アラス・ラムスの生命活動は主観的に進行しているらしい。恵美が帰宅して具現化したところ、オムツがこんもりしていたという事態も一度や二度ではなかった。

だからといって、例えばアラス・ラムスを魔王城に預けてしまえばいいかというところでもない。赤ん坊状態で独立して活動できるとはいえ、アラス・ラムスが恵美と融合状態であることに変わりはない。

ある程度離れると、アラス・ラムスの具現化が解除されて強制的に恵美の中に戻ってきてしまうという現象が確認されたのだ。

恵美が独立してアラス・ラムスと取れる距離は、京王線でおおよそ一駅分。

その時の恵美の絶望を理解してくれたのは、魔王城の隣に住む、エンテ・イスラ大法神教会の訂教審議官クレスティア・ペルこと鎌月鈴乃だけだった。

ちなみに佐々木千穂はその事実を知ったとき、

「ま、迷子の心配がなくていいじゃないですかー」

と、隣の射手的の的を射たような意見を述べたものだ

結局魔王城に通い詰める形になってしまい、恵美としては忤怛たる思いでいっばいなのだが、真奥はアラス・ラムスと頻繁に会えるので機嫌が良く、恵美は彼の悪事への関心を薄れさせる

ためと自分を納得させることで、感情の平静を保とうとしている。

こうしてアラス・ラムスと惠美が魔王城に通う生活をしはじめてから二週間と少し、まさしく盛夏の七月の末のことだった……。

### ※

マグロナルド帽ヶ谷駅前店の敏腕店長木崎真弓は、決して笑えない冗談は言わないと日々豪語している。

アルバイトクルーの間では、売り上げの鬼などの異名で恐れられているが、顧客に対して常に誠実であり、部下への評価も公明正大である。

それ故に全く裏表の無い人物なのだが、真奥貞夫は、その木崎の口から放たれた言葉を頭で理解できなかった。

木崎は笑えない冗談も、嘘も言わない。だからこそ、信じられない。

「明日、この店は閉まる」

午後四時、レイトタイムの比較的空いた時間に、木崎は勤務を上げる真奥や千穂を含めた昼のクルーに向かってそう告げたのだ。

その瞬間、真奥の周囲から全ての音が消えた。

真奥にとって木崎が空間凍結の術を、魔力も聖法氣も無しに発動させたに等しい。あまりにも長く、まるで宇宙が始まる瞬間のような、一瞬の無限。

「ま、真奥さん？」

「んはっ！」

千穂が小声で呼びかけて、手に触れてくれなければ、真奥は時の永劫の彼方に旅立ったまま帰還できなくなっていたかもしれない。

謎のSF映像の幻から立ち直った真奥の脳裏には、一瞬にして様々な情報が錯綜した。

同一エリア内では、幡ヶ谷駅前店の売り上げは、常に前年比百パーセント越えの超優良店のはずである。

決して店舗の規模は大きくないが、柔軟なサービスと誠実な応対、行き届いたクリンネス管理は三か月に一度のエリア内コンテストで毎回表彰されるほどである。

その幡ヶ谷駅前店が、無くなる!?

にわかには信じがたい話である。

だが、どうも驚いているのは真奥だけで、千穂も他のクルーも特段動揺した気配が無い。強いて言うなら、動揺している真奥を千穂が心配するような瞳で見返してきたくらいだ。

「皆とは、しばしの別れとなるが、新しい職場でもこの店で学んだことを忘れず、職務に励んでほしい。私からは以上だ」

「あ、あ、あ、あの木崎さん!」

「ん? 質問か? まーくん」

「し、質問というか、なんというかですね……」

真奥の思考は、空転してうまく回らない。一体何から尋ねればよいのだろう。いや、それ以前に新しい職場とはどういうことか。

何故、こんな事態に誰にも動揺が無いのか。真奥は不思議でならなかった。

「店が無くなるって……」

ようやく絞り出した一言に、木崎は首を傾げて眉根を寄せた。

「二週間ほど前に、君にも話したはずだが?」

「えっ……」

そう言われても、真奥に思い当たることは全く無かった。二週間前といえば、丁度アラス・ラムスを巡る事件が一応の解決を見た頃だ。

「あの……真奥さんもしかして」

後ろから千穂が、そっと耳打ちしてくる。

「アラス・ラムスちゃんがいなくなったと思ってた間のことなんじゃ……」

「えっ……」

またも間抜けなうめき声を上げて、真奥は必死になって二週間前の出来事を記憶の底から引

きずり出す。

アラス・ラムスを育てるために、木崎にシフトの増加を申し出てからすぐ、ガブリエルが現れてあの<sup>おまじふ</sup>大騒ぎになった。

その後二日間、アラス・ラムスがガブリエルに連れていかれてしまったと思い込み、気落ちしたことは確かにあった。普段なら絶対にやらないような新人レベルの凡<sup>ばん</sup>ミスを繰り返す、マダロナルドの勤務歴の中では最低極まる二日間であったが、なんだかんだで木崎が、体調を心配してくれて……。

「あっ……あのとき……」

「まさか……聞いていなかったのか」

木崎の厳しい声色に、クルーの間に緊張が走る。

木崎は仕事の評価が正当な分、気の緩みや怠慢<sup>たいまん</sup>に対して非常に厳しい。

「……他の者は、この件に関して特に問題は無いな？」

真奥以外の全員が、鍛えられた軍隊のような、統率された動きで、

「『三』はいっ—」

と唱和した。

「聞いての通りだ、まーくん。事務室に來なさい」

真奥は血の氣を失った顔で、木崎の後に着いてゆく。

真夏たというのに氷点下まで下がったような空気の中、千穂やクルーたちはそれを、蒼白になりながら見送った。

木崎は真奥を立たせたままデスクに着くと、何も言わずにパソコンを操作しはじめた。

真奥は立ち尽くしたまま、その背中を見つめることしかできない。

やがて、事務室の隅にある、魔王城のアラス・ラムス画像出力専用プリンターより更に旧型のプリンターが唸りを上げて用紙を吐き出しはじめた。

それを一枚取ると、木崎はようやく振り返って真奥にそれを突きつける。

「これで無理なら、もう今から私が助けてやることはできません」

「……あ、あの……？　これは？」

「今すぐ君がシフトに入ることができる、マグロナルドのリストだ」

「マググのリスト……じゃあ本当に、この店無くなっちゃうんですか？」

真つ青になっていいる真奥の問いに、木崎は顔をしかめて指をこめかみに当てた。

「本当に何も聞いていなかったんだ……。随分呆けたツラで生返事をしているとは思ったが、

カレンダーや店内掲示板にもずっと知らせが貼ってあっただろう。表のドアにも、お客様に向けた張り紙が出ていたのに、最近の君は少し気が抜けすぎだ。大体シフト表を見ればおかしいと気づきそうなものだかな」

気が抜けすぎという木崎の評は半分間違っており、半分は正しい。

アラス・ラムスが現れてからの真奥は、前にもましてシフトに入るようになっていた。恒<sup>こゝろ</sup>常的に時間帯責任者としてシフトに毎日入ることにより安定した収入を目指した結果、出勤退勤時間が固定されてしまい、結果、あまりシフト表を見なくなってしまったのである。

アラス・ラムスが恵美<sup>あづみ</sup>の家で暮らしているとはいえず、最終的な養育責任は自分にあると公言する真奥は、恵美に養育費を渡す機会を虎視眈眈<sup>こしたんたん</sup>と窺<sup>うかが</sup>い続けているのだ。

今のところ恵美に全力で拒否されているので実現はしていないが、最悪自分たちの軍資金になるので、真奥は今日まで全力で働き続けてきたのだ。

この二週間のそんな諸々の行動を思い起こしながら、真奥は本崎が差し出してきたコピー用紙の文面に目を落とした。

「渋谷西エリアで一、二を争う超優良店のうちが、何故閉店しなければならぬ。業態変更に伴う店舗の改装による一時的な閉店だ。営業再開は八月半ばのお盆休み明けになる。近隣の会社も、大体その辺が夏休みだからな」

「業態変更？」

その言葉で、真奥の中の不穏な疑問は半分は払拭<sup>はらいつく</sup>された。少なくとも、完全閉店ではないというだけで、心はずっと楽になった。

一口にマグロナルドと言っても郊外型の遊具併設大型店舗や、ショッピングセンター内にある「ミニマッグ」と呼ばれる簡易店舗、幹線道路沿いのドライブスルーなどその業態は様々である。

そんな中で、今回幡ヶ谷駅前店に求められた業態は、通常メニューの他に素材にこだわったカフェメニューを置く。マッダカフェ。と呼ばれる形式の店舗だった。

マッダカフェで取り扱う商品は素材の質と種類が豊富なため、通常メニューに比べて若干割高になる。

その分、ホール内装に高級感を持たせて居心地を良くするなどの工夫を凝らしているのだが、総合的な店舗の改造が必要なため、どうしても業態の変更までに時間がかかる。

照明や天井、壁や床に至るまで従来店舗とは全く異なる内装の上、新メニューを出す都合上キッチンにも大幅に手が加えられる。

「え、でも……うちの店の広さで、マッダカフェですか？」

払拭されないもう半分の疑問はこれだ。

現在、マッダカフェのみの店舗、というのは日本国内には存在しない。従来型店舗の一部分がマッダカフェとして機能しているのだが、それ故にマッダカフェ業態の店舗は、都市部でも店舗床面積が広いところばかりである。

幡ヶ谷駅前店は商店街の通りに面する商業ビルの一階に店子として入居しているのだが、総席数は五十にも満たない小さな店舗なのだ。

そこに従来のマグロナルドとマッダカフェが併設されては客席が窮屈になりはしないかと危惧する真奥だったが、木崎は何でもないような顔で天井を指差した。

「このビルの二階が、うちの店のものになる」

「えええっ!？」

「それでもなければこの狭い店にそんな計画は持ち上がらん。二階に入っていた会社が七月一杯で撤退することが決まって、後をかすめ取ったというわけだ。急なことだったから業態変更計画もかなり慌ただしく進んだわけだが、一階を従来店舗のフロア。二階をマッグカフェのフロアにして、総席数九十になる予定だ」

それなら二階だけ改装して一階は縮小営業でもすれば良さそうなものだと真奥は思う。

「工事規模を考えるとそうもいかん。店の外観や品揃えは、言うなればビジネスマンの身だしなみだ。よれたシャツとすすけたスーツで客前に出て客に不快感や物足りなさを与えて得た金など、まさしくあぶく銭にしかならん」

木崎曰く、上下階共用の水道設備の導入や、POSレジシステムを新しい規格に総入れ替えするなど、急ごしらえの計画のわりには本格的な全面改装になるらしく、そんな状態で営業しても、お客の迷惑になるとの判断から改装閉店が決定されたというのだ。

「その間クルーたちは、一時的に近隣店舗に「応援」という形で異動してもらうことになったのだが……君も、もう少し気づくのが早ければ比較的近い店舗を紹介できたのに」

木崎は困ったように肩を竦める。

木崎に手渡された即時応援受け入れ可能な店舗は笹塚から距離があったり、シフトに多くは

入れない店舗ばかりである。夏休みということもあり、どこも新規や短期の学生バイトで人員が飽和状態になっているのだ。

時間帯責任者の任を恒常的に任せられるまでになっていた真奥は、その分店舗責任者である木崎と顔を合わせる機会が以前より少なくなっていた。

それもまた、今回の悲劇の遠因だろう。

「会社側の都合による店舗の一時閉鎖だから、君たちクルーの雇用は守られる。だが、今回のことは、重要連絡事項を確認しなかった君のミスでもある。私も目をかけている君により良い環境で働いてもらいたいのはやまやまだが、今はこれ以上手だてが無い」

立ち上がって真奥の肩に手を乗せる木崎。

「これらの店舗に応援に行くつもりがあるなら、明日夕方までに連絡を寄越せ」

真奥は、目の前が真つ暗になる思いがした。

幽鬼の足取りでスタッフルームから出た真奥を出迎えたのは、心配顔の千穂だった。

「やっぱり、気づいてなかったんですね？」

「あ、ああ。ち、ちーちゃんもどつか別店舗に行くのか？」

「私は新装開店までお休みすることに……でも、ごめんなさい」

突然千穂が頭を下げてきて、真奥は面食らう。

「私、部活の合宿とかであんまりシフト入ってなくて……真奥さん、アラス・ラムスちゃんの

ことで忙しいから、ちょっとお話すれば気づけたかもしれないのに……」

どうやら千穂は、真奥のミスに妙な責任を感じているらしく、今にも泣き出しそうな顔で真奥を見上げてくる。

「いやいやいや、ちーちゃんのせいじゃないよ。忙しいってアラス・ラムスは今恵美のところにいるんだし、俺がぼんやりしてたのがいけないんだ。はは、オンオフの区別はついてるとか威張って言えないな、これじゃ」

千穂には一点の非も無いので、真奥は慌てて首を振った。

「条件は悪いけど働けなくなったわけじゃないし、今日帰ったら、芦屋と相談してみるよ。悪いな、変な氣遣わせて」

「真奥さん……」

真奥はふと思いついて、場の空氣を变えるためにも千穂に尋ねる。

「そうだちーちゃん。今日うち来ないか？」

「え？」

唐突な申し出に、千穂は眉を上げた。

「今朝鈴乃が言ってたんだけど、今日夜に恵美が晩飯食いに来るらしいんだよ。恵美はどうでもいいけど、アラス・ラムスに顔見せてやってくれよ。アラス・ラムスもちーちゃんに会いたがつてたからさ。恵美はどうでもいいが飯は大勢で食ったほうが美味しいし、まあ、だからその……」

真奥は千穂の肩を軽く叩いた。

「まあその、俺は大丈夫だから、元氣出してくれ、な？」

「は、はい……」

千穂は顔を少しだけ赤くして、小さく頷いた。

「おーう、帰ったー」

「お、お邪魔しまーす」

早朝から出勤していたおかげでこの日の帰宅は夜七時。空はまだ明るいが町は夕食の支度をする家の明かりが灯りはじめる頃。

「ばばー！」

魔王城が入居する築六十年の賃貸アパート「ヴィラ・ローザ笹塚」に帰宅した真奥と千穂を出迎えたのは、仕事上のミスで疲労した真奥の心と体を癒すアラス・ラムスの天使のような笑顔だった。

「ちーねーちゃだー!!」

卓袱台の向こうから真奥に走り寄っていたはずのアラス・ラムスは、途中絶妙なコーナリングで進行方向を変えて、千穂へと突撃する。

「アラス・ラムスちゃん！ 元氣ねー！」

全力で突撃してくるアラス・ラムスを器用に拘い上げて抱きしめる千穂、アラス・ラムスを受け止める格好のまま残念そうに項垂れる真奥。そしてそんな様子を見て、アラス・ラムスの「まま」であり魔王城一番の敵である、仕事帰り姿の遊佐惠美は苦笑した。

「アラス・ラムスは正しい選択をしたわね」

「うっせえ黙れ凹む。なあアラス・ラムス、俺もいるんだぞー？」

「ちーねーちゃー！」

聞いちゃいない。

「お帰りなさいませ魔王様。まずはこちらのおしぼりを」

そんな魔王を遠く役目は我にありと、気の利く芦屋が電子レンジで熱したおしぼりを差し出してきて、真奥は帰宅でかいた大汗を拭い、目を押さえて疲れをほぐそうとする。

「あ~~~~~きもちいー」

「佐々木さんもうこそいらつしやいました。どうぞこちらに座ってください」

気遣い紳士の芦屋は千穂にもおしぼりを差し出すと、アラス・ラムスを抱きかかえたままの千穂を卓袱台の一角に座らせる。

「すいません突然お邪魔して」

千穂が芦屋と惠美に目礼すると、

「私が言うことじゃないけどいいのよ。アラス・ラムスも喜んでるし」

「もちろん千穂殿ならいつでも歓迎する。だがな」

芦屋の向こう側から、凛とした女性の声が響く。

千穂の分の箸と茶碗を卓袱台に置きながら、彼女は自分よりずっと上背のある真奥と芦屋を忌々しげに睨み上げた。

「当たり前のように出てくるおしぼりについてはもう何も言わん。だが唸りながら顔や首筋を試うのはやめろ。少しは考えたらどうだ。魔王としての威厳とか」

そう苦言を呈する割烹着に三角巾姿の彼女は鎌月鈴乃。魔王城の隣に住むエンテ・イスラ大法神教会の聖職者であり、れっきとした真奥の敵である。

「今さらお前らの前で威厳とか取り繕ってどうするんだよ」

真奥は気の無い風に応えておしぼりを芦屋に返すが、鈴乃はため息をつきながらキッチンに戻り、味噌汁の鍋をかき回す。

「そういうことを言っていると、アラス・ラムスが真似をするぞ？」

鈴乃が呆れて言うが早いが、

「あ、ダメだよアラス・ラムスちゃん、それはお手てを拭くの」

千穂の慌てたような声。見るとアラス・ラムスが、芦屋が千穂に手渡したおしぼりを奪い取って真奥の真似をしようとしているではないか。



「あー、きもち」

「アラス・ラムス！ ダメよおっさん臭いことマネしちゃー！ それは千穂お姉ちゃんのよ」  
したり顔でマネするアラス・ラムスから恵美がおしほりを取り上げる。

「ほら、アラス・ラムスちゃん、お手で綺麗綺麗しようねー」

恵美からおしほりを返してもらった千穂は、膝の上に座るアラス・ラムスの手を柔らかい手つきで拭いてやった。

「ふん」

それ見たことかと言わんばかりの顔で皮肉げな笑みを浮かべる鈴乃。真奥は決まりが悪くなつて、洗った顔をしてそっぽを向き、全く関係ないことを芦屋に尋ねてごまかす。

「あー、その、漆原はどうした」

「まだパソコンで遊んでいるのでしよう。ベルが、この部屋でのパソコンの使用を認めていませんから、魔王城にいるのではないですか？」

魔王とは違う理由で洗った顔をする芦屋。

「当たり前だ。あの愚か者は、放っておけば一日中パソコンの前に座りっぱなしじゃないか。電気代云々以上に、目障りだ」

鈴乃はお盆を小脇に抱えて口を尖らせる。

そう、真奥が帰ってきたヴィラ・ローザ笹塚の部屋は、二〇一号室の魔王城ではない。

隣の二〇二号室。鎌月鈴乃の部屋なのだ。

ガブリエルとの戦いで、魔王城には、警察消防に通報されないのが不思議なほどの巨大な穴が開いてしまっていた。

応急処置としてホームンセンターで購入した自転車用の防水カバーを複数枚繋ぎ合わせて、無理やり塞いでいるのだが、いつまでもそのまま放置しておくわけにいかない。

仕方なく、例のエアコンをつけてくれない不動産屋に駆け込めば、大家の志波に連絡を取ってみる、と簡単な返事の後、今日までずっと穴は開いたままだ。

電気ガス水道のライフラインに目立った損傷は無かったが、築六十年を誇る建物である。

穴が開いたときの衝撃で、目に見えないところに危険が潜んでいるかもしれない、どんな行動が二次被害を引き起こさないとも限らない。

これ以上事故を起こしたら始末に負えないので、真奥達異世界の大悪魔はこうして電気と火を大量に使う食事時だけ、隣人の聖職者の部屋に厄介になっっているのだ。

そういう意味ではパソコンを延々使っている漆原は、現在魔王城と鈴乃にとって最大の不安要因と言えるだろう。

穴開き魔王城の住人達の不幸中の幸いは、今まで一度も雨が降っていないことだろうか。

だが、延々このままにしておいていいはずがない。明日あたりもう一度不動産屋に問い合わせてみようか、などと考えながら、真奥は千穂の隣に腰を下ろした。

「ばばー！」

すると千穂の膝の上のアラス・ラムスが小さな手を真奥に向けて精一杯伸ばしてくる。この笑顔と仕草を見るだけで今日一日の疲れや悩みが全て吹き飛ぶ。

「はい、じゃあ、ばばの所行こうね……いいですよね」

千穂は真奥がうずうずしているのを察して、アラス・ラムスを膝の上に乗せてくれた。一応恵美に確認を取ることも忘れないが、恵美は不承不承という感じで頷く。

基本的に、恵美もアラス・ラムスには甘い。

アラス・ラムスは真奥の膝の上に収まると、目の前の箸を両手に掴んでお行儀悪くテーブルを叩きはじめる。

「こら、アラス・ラムス、だめだぞそういうことしちゃ。お行儀良くするんだ」

「うー」

アラス・ラムスは真奥や恵美が注意したことは、洪々ではあるがきちんと言うことを聞いて守るのだ。

口を尖らせながらも箸を元あった場所に置き直した（それでも左右反対になっているのだ）アラス・ラムスの頭を、真奥は笑顔で撫でてやる。

「よしよし、いい子だ。鈴乃お姉ちゃんがご飯よそってくれるまで待ってられるな？」

「あい！」

「……何故だろうか、貴様に『鈴乃お姉ちゃん』などと呼ばれると、鳥肌が立つ」

割烹着姿で各々の茶碗にご飯をよそう鈴乃が、手を止めて顔を顰めながら真奥に聞こえるようにそう言い放った。

「へいへい、そりや失礼しました」

「えいえい！」

アラス・ラムスが面白がつて真奥の口調を真似し、また真奥が恵美と鈴乃に睨まれる。

アラス・ラムスのことに關しては素直な真奥は黙り込むと、逆向きに置かれた箸を元の形に戻しながら、今後の身の振り方をぼんやりと考える。

芦屋と家計について相談した上で木崎の紹介してくれた店舗に行くのか、他の方策を考えるかしなければならぬが、いずれ知られるにしろ、わざわざ恵美の目の前で弱みをさらけ出す必要はない。

そんなことをすれば喜々としてアラス・ラムスに「ばばは無職なのよ」くらいのことを言いかねないし、アラス・ラムスに無職扱いされてしまったら、今の真奥は生きていけない。

「おいアルシエル。後からうるさいのも面倒だからルシフェルを呼んでこい。即座に来なければ夕食は抜きだと言ってな」

あらかた夕食の準備を終えた鈴乃が、割烹着を解きながら言う。

「……いいだろう」

悪魔の芦屋と人間の鈴乃は基本的には敵同士なのだが、二人で同じ台所に立つことが多くなつた最近では、家事と漆原のことに關してだけは相互理解が進んでいる氣配がある。

鈴乃の言いつけに無表情に応えた芦屋は、エプロンを解いて綺麗に畳んでから一度部屋を出ていく。

「大変ね、あんな奴の夕食まで作らなきゃいけないなんて」

「金は魔王に出させている。それに、一人分を毎日毎食作るよりは、なんだかんだで食費は浮くし献立も考えやすいからな」

三角巾を解きながら言う鈴乃に、恵美は淡い顔で言い添える。

「そんなこと言つてるとずるずる引き込まれちゃうから、氣をつけなさいよね……」

「？」

首を傾げる鈴乃だが、あえてそれ以上はその話題には乗らずに、折り目正しく背筋を伸ばした正座で真奥とは反対側の恵美の隣に座つた。

「ばーば。まだ？ ごはんまだ？」

「ん、いい子だからもうちよつと我慢できるな？ みんなでいただきますだぞ？」

「るしふえるはやくー！」

アラス・ラムスはちゃんと誰が原因か理解している。

恵美は、視界に真奥を入れないようにアラス・ラムスを見ながら、鈴乃に問いかける。

「ところで、見たところ大きな荷物残っちゃってるけど、どうするの？」

「ああ、事情が事情だから、貸倉庫のようなものを不動産屋に無料で紹介してもらった。明日、全部そっちに送る予定だ」

「冷蔵庫の中のものとかは？」

「今日、一氣に使ってしまった」

「おお、そういや今日は何か食卓豪華だな。買ったばかりで冷蔵庫の掃除でもすんのか？」

二人の会話を聞くとともになしに聞いていた真奥は、改めて卓袱台の上に目をやる。

大盛りの野菜炒めに、玉ねぎとナスと豆腐とワカメの味噌汁。鶏肉の唐揚げに合いびき肉のメンチカツ、シウウマイに練り物、カットサラダまである。

冷蔵庫の中身を一掃したかのような献立は、日頃食卓の見た目の彩りを重視する鈴乃主導のメニューの中では珍しい。

千穂一人飛び入りで参加したところで、食べきれるかどうかわからないほどの量だ。

そんな真奥の疑問に、恵美と鈴乃は眉根を寄せて答えた。

「あなた、何言ってるの？」

「何を他人事のように。お前たちの方こそ大丈夫なのか。家具の整理は済んだのだろうか？」

「へ？ なんの話だ？」

疑問に疑問で返す真奥。

だが、恵美と鈴乃が不審げな顔を見合わせた次の瞬間、背筋をゾワリと冷たいものが走る。

「うおっ！ つめてっ！」

それは錯覚ではなく、いつの間にか膝から下りていたアラス・ラムスが、冷えて結露したミネラルウォーターのペットボトルを抱えて真奥の背中にくっつけたことによるものだった。

「アラス・ラムスちゃん、濡れちやうからそれちやうだい？」

「あん、やーの！」

ペットボトルを取られまいと頑張るアラス・ラムスと穏やかに格闘を始める千穂の耳に、鈴乃の声が届いた。

「明日から私も貴様らも、しばらくアバートを引き払わなければならないんだぞ」

「こら、アラス・ラムス、ちーちゃんの言うこと聞きなさい！ アバートを引き払うなんて……」

今、なんつった？」

真奥は一瞬で我に返って、我に返った途端に血の気がスツと下がって、スツと下がった血の気のせいで能面のように白くなった顔で鈴乃を見た。

「アバートを、引き払う？」

「……おい、魔王貴様まさか」

鈴乃がおもむろに懐から取り出したのは、なんだか見慣れた封筒だった。

豪奢な金の刺繍をほどこした、絹のような肌触りの、あの封筒。

「貴様が不動産屋に駆け込んでからすぐに来ただろう！ 大家殿からの通知が入った封書が」

「はあっ!?」

真奥は額が外れるほど驚き、その声でアラス・ラムスは、抱えていたペットボトルを取り落としてしまう。

「ばばー、びっくりするのやーの！ もー！」

だが、アラス・ラムスの声すら今の真奥には届いていなかった。

鈴乃が持つ封筒をほとんどひったくるようにして奪い取ると、恐怖写真の封入を警戒しつつゆっくりと中身を引き出す。

そこには、大家にしては珍しくプリントされたコピー用紙にしたためられた通知が一枚と、やたら細かい字がびっしり印刷されている契約書類のようなものが入っていた。

「ウィラ・ローザ笹塚入居者様各位」

その文言で始まっていた、約二週間前の日付の通知を読み進めた真奥は、

「冗談、よせよ……」

今度こそ天地がひっくり返った錯覚に陥り、昏倒してしまった。

「ま、真奥さん!?」

「ちよっと、頭打つわよ危ないじゃない!」

「ばば!?」

「今のはなんの音……ま、魔王様!?」

「お腹空いたー。あ、佐々木千穂来てたんだ。わー、豪華じゃん今日」

戻ってきた途端に昏倒する主の姿に目を刺き駆け寄る芦屋と、あくまでマイペースの漆原。

「あるしえーる、ばばこれでねちやったのー」

アラス・ラムスが拾い上げた紙を芦屋に差し出す。

「ありがとうアラス・ラムス。うん? ペル宛ての、大家さんからの通知か……」

恵美と鈴乃が止める間もなく、

「……………ふうっ」

書面に目を走らせた芦屋もまた、息絶えるように足元から崩れ落ちた。

「ん? 真奥と芦屋、どうしたの?」

何も手伝わず一番遅れて来たくせに、いただきますも言わずに早くも唐揚げを頬張っている漆原に冷たい視線を浴びせる恵美と千穂と鈴乃。

鈴乃は芦屋の手から書類をもぎ取ると、それを漆原の鼻づらの前に広げて見せた。

「よく読め。この、歩く不良債権」

「むぐっ……な、なんだよ……え? 入居者様各位?」

漆原は口をもしやもしやと動かしながら、目で文章を追いかけてゆく。

「アパート本棟改修工事に伴う入居者様の一時退去とその間の補償について……入居者の一時

退去!? 何これ!」

さすがの漆原も目を剥いて、箸を放り出して書類を読み進める。

要するに、二週間前に真奥が不動産屋に出した要望は、きちんと大家に届いていた、ということだった。

二〇一号室に開いた穴はかなり大ぶりなもので、単純にそこを塞ぐだけでは建物自体の強度に不安が残る。

経年劣化も手伝ってガスや水道、電気系統の異常も懸念されるため、建物全体に修繕のメスを入れることにしたというのだ。

「……え、僕、何も知らないんだけど……」

「だろうな。魔王やアルシエルがこのザマでは、お前が知っている方がおかしい」

「ベルは改修が終わるまで私のうちに来ることになってるけど、あなた達、何も対策してないわけ?」

鈴乃と恵美の間に、漆原は力なく首を振り、そしてしばし呆然と恵美を見る。

「私が広大な二世帯住宅に住んでたって、あなた達を快く招き入れると思う?」

「だよね……」

さすがの漆原も、そこをゴリ押しするつもりはない。

ため息をつく漆原を尻目に、大人たちの会話が分からないアラス・ラムスはよちよちと倒れ

る男二人に歩み寄る。

「ばばとあるしえーるどうしたの？」

「え、えつとね、きつと眠いんじゃないかな。ほ、ほら、アラス・ラムスちゃん、起こしてあげて」

この場の中で唯一、真奥が職場で見舞われた事態を知っている千穂は、まさか住む家まで無くなるかもしれないという事態を前に我がことのように動揺してしまう。

「ん、ばば、あるしえーる、おきるの、ごはんなの」

アラス・ラムスの小さな手に揺すられて、やがて真奥と芦屋は夢から覚めたような茫洋とした顔で起き上った。

「……なんか白昼夢を見た気がする」

「……私もです。いえ……あれは、悪夢、でしょうか」

勇者との最終決戦で敗走するときですらしなかった現実逃避を、こんなところで駆使する異世界の魔王と悪魔大元帥。

「ああそうだ、芦屋……」

「はい、なんでしょう」

寝ぼけたような顔の真奥は、ぼんやりした顔で言い放った。

「明日から俺、失業しそうなんだけど、どうすりゃいいかな」

「……」

「ひつぎよー？」

息詰まるような沈黙と、アラス・ラムスの発展途上の言葉の反復。

「ふうっ……」

再び芦屋は、しばみかけの風船に穴が開いたような吐息と共に意識を失ってしまった。

「わー！！ 芦屋さん！ 芦屋さんの顔色が！！」

「ちょっとこの顔色シヤレにならないわよー ベル！ 水！ 水持ってきてー」

「ままー、みねあうおーたー！ー」

「いい子ねアラス・ラムス！ 貸して！ー」

「む、気付く薬はこれかー いやその前に、心臓マッサージか!?」

「……芦屋どーしたー？」

真奥一人だけが、自分の撒いたダイナマイトの威力が分かっていないのだった。

※

「……」

「……」

「……………」

隙間風しか吹かない魔王城の中で、三人の大悪魔はある小包を囲んで車座になり、決面を浮かべながらお互いの顔を見合っている。

大きな目の封筒ほどのサイズのその包みは、なぜかガムテープとビニールテープで厳重に封印されており、殴り書きの文字で『開封厳禁』と大書されていた。

「何やってるのよ、さっさと開けなさいよ」

固まっている男たちに、恵美が呆れたように肩を練めた。

「い、今さら見たって……………なあ」

「ええ……………」

「だよね……………」

元来あまり気の長い方ではない恵美は、煮え切らない悪魔達を押し分けると、小箱のようなサイズのその小包をむんずと掘って引きはがしてしまう。

「わああああああ!! 何しやがるてめえ!!」

「うるさい! 面倒事後回しにしないでさっさと開けなさい!」

「き、貴様っ! 後悔するぞっ!!」

「嫌だあああ!!」

大げさに騒ぐ真奥達を無視して引っぺがした包みから出てきたのは、

「……なに、これ？ ビデオ？」

ラベルも貼られていない、一本のVHSビデオテープだった。

「お、お前、それはきつと呪いのビデオだぞ！」

真奥が頭を抱えながら叫ぶ。

「きつと、お、お、恐ろしい映像が収録されているに違いない！」

声屋も壁にびつたりと身を寄せて青い顔をしている。

「写真だけでもあれだけ破壊力凄いの、動画なんてありえないよっ!!」

「……何言ってるのあなた達……」って言うか、大家さんから送られてきたものでしょ？ なん  
でここまで嚴重に封印してるのよ」

「お、お前、大家からのビデオレターだぞ!? お前だって大家に会ったことあんだろ!?」

「それが何よ？ ワケわかんないこと言ってるで、さっさと中見ればいいのに」

魔王城にも、真奥が不動産屋に問い合わせてからすぐに大家から届いた送付物はあった。

だが、それがいつもの豪奢な封筒の手紙ではなく小包だったことで、重要なお知らせではないだろうという予測と、謎のお土産や「アノシャシン」に匹敵するナニモノカが封入されているのではないかという警戒感を強めてしまった。

それでも以前に、大事な知らせだったらどうすると鈴乃に諭されたこともあり、包みを解くところまでは行ったのだ。

だが中には手紙も説明もラベル書きも無く、ただ真っ黒なビデオテープが一本入っていただけ。大家の水着グラビア事件で大いなる犠牲を払った魔王城の住人が、この禍々しい予感しかないビデオテープを再生しなかったとして一体どうして責めることができるか。

大体ビデオなんか送られたって、魔王城にはそれを再生・視聴するための設備が無いのだ。結局見ずに封印するのが得策と判断され、部屋の隅のカラーボックスの最奥に堅く封印されたのだが、今の魔王城の住人にとってはこのビデオだけが、現状に変化をもたらす唯一の可能性になるかもしれないのだ。

だが、「アノシヤシン」によるトラウマは、未だ大悪魔達の心を恐怖で縛りつけている。

「仕方ない、かくなる上は、『アノシヤシン』を解放し、勇者に目にも物を見せてやる!!」

「い、いけません魔王様! 『アノシヤシン』は決して呼び起こしてはならない魔王城の禁忌! 神すら触れることかなわぬ絶対の封印です!」

「黙れ! 今使わんでいつ使う!」

「あああ! き、記憶が、『アノシヤシン』の記憶が僕を蝕む! この世の終わりだ!」

「魔王城が崩壊してしまう!! 魔王様! おやめください!!」

部外者には意味の分からない『アノシヤシン』で盛り上がっている真奥達のことなど完全に無視して、漆原のノートパソコンに目を留める。

「安いビデオデッキでも買ってくれば、これでビデオ見られたりするかしら」

時代は今やDVDとBD全盛だが、家電量販店でも古いメディア媒体の情報をデジタルデータ化できる機械がいくらでも売っている。

真奥も芦屋も漆原もそんなことは知っている。だが、禍々しい封印を解くただけに、何故わざわざ金をドブに捨てるようなマネをしなければならないのか。

「な、恵美、今時ビデオとか無理だって、ほら、俺達の問題は俺達で解決すつから、もうそのビデオは忘れようぜー」

恵美が引きつった笑いを浮かべて縋りついてくる真奥を足蹴にしたとき、

「エミリア、随分騒がしいが、話は解決したのか」

アラス・ラムスを抱っこしながら鈴乃が隣から様子を覗きに来て、恵美は首を振る。

恐慌を来している大悪魔三人を親指で示して肩を練めてから、ビデオテープを見せて事情を説明する。

すると、

「あの……それなら」

鈴乃の傍らの千穂が、遠慮がちに声を上げた。

「私の家、ビデオ再生できるデッキありますけど……うちで見ませんか？」

「た、ただいまー、お母わっー」

「あらあらまあいらいっしやい！ まーあなたが真奥さんよねー」

千穂が玄関のドアを開けるなり、彼女を吹き飛ばすような音圧のある甲高い声が飛び出してきた。

真奥もかつて一度だけ、電話越しに会話したことのある声。四十代半ばと思しき千穂の母、佐々木里穂は、ぼつちりとよそ行きの化粧と衣装で真奥達を待ち受けていた。

「お、邪魔します。この度は遅い時間に申し訳ありません」

真奥は背中に緊張で汗をかきながらも、そつなく一礼。

「初めまして、遊佐恵美です」

恵美は余計なことは言わずに、真奥の後ろで簡単に自己紹介した。

「えっと……つまらないんですけどこれ……日頃千穂さんにはお世話になってますので」  
 ももごとく慣れない社交辞令を必死で繰り広げる真奥は、苜屋に持たされた挨拶用のケーキを里穂に差し出した。

「まーお氣遣いいただいてありがとうございます。ささ、上がってくださいなー、この度は大変でしたねえ、あ、お茶入れますからリビングにいらしてくださいなー、千穂、ご案内して！」  
 なんだか今しもミュージカルでも始めそうな勢いの母に急かされて、千穂は固い顔で頷く。

「じゃ、じゃああの、真奥さん、遊佐さん、こちらへどうぞ」

「お、お邪魔します」

「失礼します」

笹塚駅から甲州街道を挟み、魔王城とは丁度反対側あたりの住宅街にあるごく当たり前の一軒家が、佐々木邸である。

早速にビデオの内容を確認しなければならない真奥達にとって、他に取り得る選択肢は無かったのだが、何せ日頃魔王城の住人は、佐々木家のお裾分けにおんぶに抱っこ状態。

芦屋がデュラハン式号を駆って何とか上等なケーキを購入してきたものの、ご家族に失礼があったら、今までの千穂からの信頼すら裏切ることになりかねないので、真奥としては必死である。しかも今回は、お目付け役として恵美がついてきている。

本来なら芦屋が来るべきところだが、二人で出してしまうとビデオを秘密裏に処分しかねないと思念されたためだ。

大勢で押しかけても佐々木家の迷惑になるので、真奥と恵美以外は全員ヴィラ・ローザ笹塚でアラス・ラムスをあやしつつ吉報を待っている状態である。

だが普段は魔王一派など野垂れ死ねばいいくらいのことを平気で言いそうな恵美が、今回に限ってやたらと真奥達の状況打聞に熱心なのは何故だろう。

「お母さん……気合い入れすぎ」

リビングに入った途端、千穂ががっくりと項垂れる。

埃の一片も無く掃き清められたリビングには、真新しいクロスをかけたテーブルが鎮座し、その真ん中には色とりどりの花を乗せた花瓶。

仄かにフローラルな香りがするのは、アロマキャンドルを焚いたか芳香剤を全力投入したか。椅子のクッションも明らかに普段使いでない分厚いものに差し替えられており、本来の住人である千穂は困るだろうが、真奥と恵美は歓迎されているということだけは理解できた。

「あ、あの、すいません、あの、座っててください。あ、真奥さんビデオ……」

どこか言葉に力の無い千穂は真奥から件のビデオを受け取ると、リビングの片隅の薄型液晶テレビが鎮座するテレビ台へとかがみ込む。

真奥と恵美は、顔を見合わせつつ、恐る恐る椅子に腰かけた。尻の下で新品のクッション生地が軋む音がする。

「はいはい、よく冷えた紅茶が入りましたよー」

そこにまたハイテンションで入ってきた里穂。真奥と恵美は驚いてかすかに身を竦ませるが、里穂は構わず、仄かに柑橘系の香りがするアイステイヤーを手際良く真奥達の前に並べてゆく。

「頂戴します……いい香り、ハーブティーですね、ローズヒップですか？」

恵美が一口喉を潤して言うのと、里穂は目を輝かせた。

「さすが、社会人ともなると、御分かりになるのねー！ 千穂がいつもお世話になっています。色々、お話は何ってますよ。もー千穂も主人も、紅茶に關してはとんと反応悪くて」

「は、はあ……」

「お、お母さん！ もうそれくらいでいいから！」

ビデオとテレビのセットを終えたらしい千穂が、顔を赤くしながら母を追い立てようとするが、里穂は取り合わない。

「私を追い出す前に、早くそのビデオ再生しちゃいなさい！ 真奥さんのおうちの明日がかかっているのかもしれないでしょ！」

そう言つて、真奥と恵美の対面に自分も座つてしまう。佐々木家のビデオデッキを使わせてもらうに当たり、千穂から最低限の説明だけはしてもらっているのだが、大家が妙なことを言つていないだろうか、大家を見て千穂や里穂は平常な精神を保つていられるだろうかと色々な不安が真奥の頭をよぎる。

「もー……！ すいません真奥さん、いいですが、再生して」

「あ、うん、お願い」

かと言つて、里穂を追い出すわけにもいかず、様々な不安を抱えて、真奥は再生ボタンを押す千穂を見守つた。

居心地悪そうに母の隣に腰かけた千穂が画面に視線を移すと、一瞬の真つ黒な画面の後に、その映像は現れる。

青い空、黄金の大地、屹立する四角錐の建造物。同じ映像を見た百人が百人、エジプトと答

える背景である。

「あー、あー、ごほん」

マイクのテストをするような大家の声。真奥は思わず恐怖で拳を固く握ってしまふ。

「えー、お久しぶりですわね、真奥さん、芦屋さん。私志波は、今日はエジプトのギザ三大ピラミッドの前からお送りしておりますわ」

快晴の砂漠のド真ん中である。

内側から破裂して、複数ピースになってしまいそうな半袖に生足刺き出しのワンピースを纏い、日よけにもならないドレスハットを被った、四肢の露出度が大変に高い大家の志波美輝の姿を見ただけで、真奥は血の気が引き動悸が激しくなる。

それでも、やはり水着グラビアに比べればまだまだ破壊力は控えめで、なんとか目をそらさずにいることができた。真奥も、いつまでも弱いままではないのだ。

そして更に意外なことに、緊張で冷や汗をかいている真奥以外の三人は、特になんの反応もなく、画面の殺人的な大家を平然と眺め続けているではないか。

「旅先で連絡を受けまして、真奥さん方が災難に遭われましたこと、大家として深くお詫び申し上げますわ」

部屋に穴が開いたこと自体は大家にはなんの非も無いのだが、深々とお辞儀をした大家の豊かな胸の王家の谷間を見せつけられて心に呪いの烙印が刻まれたことに関しては、全力でお詫

びを要求したい真奥。

「真奥さん芦屋さんにお怪我が無くて、それだけが救いです。アパートの修理に関しては、大家の責任で全てまかなわせていただきますのでご安心くださいね。お家賃等に影響させることも決して致しません。つきましては修理の日程と工程ですが、大がかりな修繕になろうかと思いますので、おそらくお部屋を一時的に空けていただくことになるかと……」

大家が事務的に述べた内容は、鈴乃が書面で受け取った通知とほぼ同様のものだった。というか、何故魔王城にはこんな手の込んだやり方で通知をしてきたのだ。鈴乃と同じく書面で通知してくれば、もっと早く確認できたのに。

杜絶な絵面すたつ けつめんにようやく心が慣れてきた真奥が胸の中でそう不満を漏らしたときだった。

「ときに真奥さん、芦屋さん、一つ、お願いがございますの」

アパート修理期間中の話を終えた大家が、そんなことを言い出した。

「実は、私には姪めいがおりましてね」

真奥と恵美は、思わず顔を見合わせる。

大家の、姪!? この大家に、親とか兄弟姉妹とか甥ねいとか姪めいとかいう当たり前の係けい果こがあるということを想像もしていなかった二人には、衝撃の大きい言葉だ。

「その姪は、今、千葉の海水浴場で海の家を経営しておりますの」

大家と海水浴場とくれば、やはり脳裏のうりにフラッシュバックするのは水着グラビア事件。つい

に、このビデオが本格的に牙を剥きはじめのかと真奥が思わずデッキに飛びついて停止ボタンを押す衝動にかられたとき、

「もしよろしければ、姪の経営する店を手伝ってはいただけませんかでしょうか」

真奥は動きを止めた。

「場所は千葉の北東部の海水浴場ですの。場所が場所ですし、アパートの修繕もありますので、通勤ではなく住み込み、という形になろうかと思えます。姪の家の事情もありまして、八月の頭からお盆休み過ぎくらいまで、いかがでしょうか」

住み込みで、八月の頭からお盆休み過ぎまで、仕事？

このタイミングでこれは何かの冗談だろうか。上げて落とす、ドッキリか何かか？

「千葉の北東……銚子、かな？」

千穂が自分の記憶を確認するように、小さく呟いた。

「男手があればいざというときも安心ですし。もちろんお仕事都合がございますでしょうか。無理は申し上げませんが、よろしければご検討なさってくださいな。お引き受けいただけるときは、この電話番号に……」

手の込んだ編集で、大家が指差した画面下部に、携帯電話と思しき番号がテロップで表示された。真奥は、その番号をしばらくぼんやりと見つめていたが、

「魔……真奥、良かったじゃない！ 早速電話しなさいよー」

突然後ろから思い切り背中を叩かれて、真奥は思い切り咳き込んだ。

「げ、げほっ!! な、何すんだよ恵美!」

「もう随分前でしょう、これが送られてきたの。今すぐに電話しなさい。他の人に取られたら元も子もなくなるわよ!」

「え、で、でも遊佐さん、千葉の海の家ってことはここから遠い……」

恵美の反応をいぶかしんだ千穂はそう声を上げるが、それは隣の母親の音量に遮られた。

「そうですよ真奥さん! いいお話じゃないですか! おうちとお仕事と、一度に問題が解決するんでしょう! ここでいいから電話なさいな!」

里穂の反応は年長者としてごく自然のことだが、恵美の方は本当に珍しく、真奥の状況が良くなることを喜んでいる風にも見える。

真奥は事態の成り行きと恵美の態度に違和感を全力で感じながらも、表示されていた電話番号を携帯電話に打ち込みながら、周囲に静かにするようジェスチャーで指示。

この場で電話をすることについて里穂に軽く目礼してから一つ深呼吸をして発信。

真奥は恵美や里穂ほど事態を楽観していなかった。いくらなんでもタイミングが良すぎると思ったのだ。

大体にして、あの大家の親戚が経営する海の家である。一体どのような魔窟なのか、鬼か蛇が出るかしれず、場合によっては遠方のマグロナルドの方がずっと精神的負担が少ないかもし

れないのだ。

千穂はその様子を不安げに見守りながらも、真奥と同じく恵美に対する違和感を拭えないように、どちらちらと彼女の様子を窺っていた。

緊張の面持ちで待つこと数コール、やがて、

「もしもし？」

非常に簡素な応答があった。女性の声だ。

姪なのだから当たり前なのだが、妖怪物の怪が現れても大丈夫のように心の準備をしていた真奥だったので、普通の人間と思しき声に少々拍子抜けしてしまった。

「も、もしもし。夜分恐れ入ります」

「はあ」

「あの、志波さんに、海の家での仕事を紹介いただいて、こちらに電話をしたんですが……」

真奥がそう言うのと、思わず電話を耳から離したくなるような大声が応えた。

「シバさん……ああーもしかして東京のミキティ伯母さんのアパートに住んでる人!?」

「ミキティ……あ、はいそうです。真奥と申します」

そう言えば以前、大家が自分をミキティと呼べと、恵美に迫っていたことを思い出した。

「はいはいはいはい、聞いてる聞いてる！ 七月終わりそうなのに連絡無いから、都合つかなかったんだらうって半分諦めてたのよ！」

電話口の向こうの女性には、とにかく底抜けに明るい声をしている。

口調から恵美や鈴乃よりは年上であろうと推測できたが、あの大家が発する得度も底も索性も知れぬ謎めいた気配は感じられない。

「あの、少し連絡の行き違いがありまして……」

まさか見るのが怖くて今日までビデオレター封印してましたとは口が裂けても言えない。

「あー、分かるわー。伯母さんしょっちゅう海外飛び回ってるかんねー。年賀状が二月に来るとかよくあるのよー」

「そ、そうなんですか」

親戚相手ですらこの調子では、真奥や鈴乃の所に通知が即時来ていたというのは逆に奇跡ではなからうか。

真奥がそんなことを考えていると、相手は唐突に切り出してきた。

「で、真奥さんだっけ？ 来れんの？」

随分と性急に物事を進めるくらいがある人物のようだ。反射的に承諾しそうになり、真奥は慌てて押し留まる。

個人経営の海の家、という仕事場は、真奥にとっては未知の世界だ。

まず諸々の労働条件を確認せねば仕事を受けるも受けないも決められず、そもそも大家の姪であるという電話の相手の名すら、まだ判明しないのだ。

「敵を知り己おのれを知らば百戦危あやうからず」は、魔界統一を目指し始めた頃から真奥の哲学である。

「その『千葉にある海の家』ということ以外、何も聞いていないもので……」

言葉を選んで、向こうから条件を出すように促すと、しきりに頷く気配の後に相手が切り出す。

「あー、伯母さんそういうとこアバウトだかなー」

あまり繊細そうではない声でそう言ってから続ける大家の姪。

「場所は千葉の銚子の端っこだけど……君ヶ浜きみぎはまって言って分かる？」

「いえ……」

その時、里穂が傍らからメモとボールペンを差し出してきた。真奥は目だけで感謝を伝えて、それを受け取る。

真奥が平仮名で走り書いた「ちようし」の文字を見て、千穂が息を呑む気配がした。

「だよー。地名で言うなら大吠おほいけか外山とやまの方が有名かねえ。君ヶ浜は離島や高い山を除けば、

関東地方で一番最初にご来光を拝める海岸なんだ」

「えつと……」

いずれにしろ、真奥には馴染みのない地名である。声色からそれを察したらしい相手は、

「まあ千葉の東の端だと思ってくださいな。都心からはちよーつとばかり遠いけどね」

詳細の解説をするのではなく、そんな無造作な表現で勤務地に関わる話を終わらせた。

しかし文句を言っても仕方ないので、真奥は知らない単語はとりあえず平仮名でメモし、先

を聞く。

「あとここは正直に言っとくけど給料はそんなに高くは出せないんだわ。一人につき時給千円でどうだろ」

「一人千円、ですか?」

予想外に高い数字だったので、真奥は少し驚いた。しかも一人につき、ということば複数人数で行っても良いということか。

真奥と芦屋が二人で働けば、魔王城全体では一時間で二千円稼げる計算になる。

「やー、親父が半分道楽でやってた店だからさ。商売っ気無くてねー。それなのにこの時期は忙しいから参っちゃってね。あとは家賃無しで住み込み、ご飯付き。仕事終わったら暗くなるまで海で泳ぎ放題がオプションでつくぜ!」

住み込みで食事付き、時給千円。泳ぎ放題はどうでもいいが、今の真奥達にとってはこれ以上望むべくもない理想的な条件である。

「何人まで大丈夫ですか?」

この質問はある意味賭けだった。今は魔王城の住人は二人でなく三人である。

しかもその三人目はニート根性の染みついた漆原だ。

大家や先方の話しぶりからして、入居当初からの同居人である芦屋も行くことは織り込み済みのようだが、三人となると、「商売っ気が無い」店の経営を人件費で圧迫してしまうかもしれ

れない。

何よりこちらから申し出ておいて、その三人目が真面目に働かない恐れすらあるのだ。  
ところが相手の返答は、こちらの手想を上回っていた。

「何、大勢で来れんの？」

「え？ あ、そ、その、自分と同居人含め、男三人です」

「え？ 三人？」

「え？ 三人？」

千穂と恵美が同じタイミングで意外そうな声を上げたが、それには取り合わない真奥。

「人の手はいくらあったってありすぎることないから、来てもらっていいよ！ なんだかんだで結構ハードらしいから、常にフルタイムじゃなくても、交代しながらやってもらうって手もあるしね」

こちらの状況を見透かしたかのような言葉である。

どのような仕事があるかは未知数だが、漆原には簡単な仕事を短時間やらせておけばいいだろう。あとは真奥と荻屋が、全力でフルタイムを働けばいい。それで漆原がミジンコのまっ毛の先端程度に勤労意欲に目覚めてくれれば、望外の収穫というものだ。

「……三人、お世話になっていいですか」

真奥がそう言うとき、電話の向こうの相手は笑い、テーブルの向こうの千穂は顔を強張らせた。

「ん。それで、いつから来られる？」

「明日色々片づけてからになるので、明後日あさっての八月一日からお伺いうかがしたいんですが」

「わお、こりや急いで下宿部屋準備しなきゃ。でも、早ければ早いほど助かるわー。やつぱ親父おやぢ曰く、本格的に混むのは八月からだって言うから、本当ありがたいわー！」

先ほどから少し気になるのだが、仕事ハード「らしい」とか、混雑が八月からだって「言う」など、どういうわけか伝聞形式の解説が目立つ。

そのことについて尋ねると、

「いやね、聞いているかもしれないけど、もともと私の親父がやってて、私も手伝いくらいはしてただけけど、夏休みはこれからーってときに旅行に行きたいとか言って押しつけられちゃってさ。まあそれで私が後継ぎみたいな形になったはいけど、私は私で仕事あったし、女手一つだと色々面倒もあるわけよ。商売っ気無いから商売のイロハの伝授とかも全く無くてねー。一応これでもまだピッチピチな年齢ですから、そういった危険とかもねー」

具体的にピッチピチの年齢っていくつなんだとかどういった危険なんだとか、それで商売大丈夫なのかとか、喉のどまで出かかった言葉を危あやうく吞み込む真奥。

「その点ミキティ伯母おばさんの紹介だったら安心だしさ。一つ、よろしくお願い」

「こ、こちらこそ……そ、それでその、俺達はどこに行けばいいんでしょうか」

「ああ、場所言わなきゃどうしようもないやねえ。車で来る？ 電車で来る？ 飛んで来る？」

「と、飛んで？ い、いや電車でいきます」

どこに行くにしろ、真奥達（まおく）に利用可能な移動手段は公共交通に限られる。

「結構長旅だぜ？ 都心からだ、総武線の終点の千葉から出てるＪＲの総武本線を終点まで行くと、銚子（ちうし）なの。そこから銚子電鉄（ちうしでんてつ）つてのが出てるからそれに乗って、終点から一個前の犬吠（いぬばい）って駅で降りて。手前に君ヶ浜（きみがはま）って名前の駅があるけど、うちの店は犬吠の方が近いんだ。都心からだ、と三時間くらいかかっちゃうけど、まあ旅行するような気分だし」

真奥に全く馴染（なじ）みの無い三つの鉄道、しかも終点駅が二つも出てきた。これは想像した以上に遠（とほ）そうだ。

真奥も芦屋（あしや）も日本に流れ着いてから、経済的な事情も相まって東京二十三区から出たことがほとんどない。他県（ほかけん）進出はこれが初になるのだが、初遠征（はつえん）は向こうの言う通り、結構な旅行になりそうな気配である。

世界を股（また）にかけて征服活動（せいふくどう）を行う魔王（まおう）だって、片道三時間は遠いと感じることもある。

「犬吠まで来たたら私が車で迎えに行くから。着いたら電話してちょうだいな」

「分かりました。で、その、今さらなんですけど、店の名前と、その、あなたの……」

全ての用件（ようけん）が済んでから尋ねることでもないが、こればかりは確認しないわけにはいかない。真奥（まおく）が恐る恐る尋ねると、はじけるような笑い声（わらこゑ）がして、携帯（けいたい）を耳（みみ）から離（はな）しそうになる。

「あーっはっはっは、ごめーんそうだよ。名乗らずに何やってんだろうね私は！」

そんなのこつちが聞きたい。

「申し遅れました。私、ミキティ伯母さんの姪で、大黒天称と言います。来てもらうお店は大黒屋くろくやっていううちっちゃいとこよ」

「大黒さん……分かりました。それじゃあ明後日、何時頃までに行けば……」

アルバイトとして当然の質問をする真奥だったが、それに対する大黒天称の返答は、今まで真奥が聞いたことのない内容だった。

「ああ、別に何時でもいいよ？」

「へ？」

「来られる時間に来てくれれば、何時でも迎えに行くから」

「そ、そうですか……何か仕事に必要なものはありますか？」

「体力？」

非常に簡潔な答え。真奥が聞きたいのはそういうことではないのだが。

「まー着替えとタオルと歯ブラシとかだけ持ってくればいいんじゃない？ 足りないものはこつちで揃えればいいしさ」

親戚の家に遊びに行くわけじゃないのだ。もうちょつと現場作業の必需品的なものはないのだろうか。

「そだ、ビーチサンダルは必須。つっかけるだけじゃない、きちんと足首とかマジックテープ

で止めるタイプのやつね。そうじゃないと砂に足取られてスッ転んだり、サンダルを波にさらわれたりするからさ。働くときの裸足は、砂の下のごみとか小石とか貝殻で足切っちゃって危ないからNGね」

「ビーチサンダル。分かりました。足に合いそうなの買っていきます」

そうそう、こういうことが聞きたかったのだ。だがアルバイトの注意事項に関わる真面目な話はここの一瞬で終了した。

「ビーチサンダルじゃなくて、折角だから水着とかゴーグル持ってきたね。花火とかやるならこっちにいいの揃ってるよ！ 打ち上げ系は禁止だけど、海風に吹かれながらの線香花火サドンデスとかめっちゃ燃えるぜ!」

「……そーですか」

どうも、都市部でのアルバイトとは全く違う思考で臨んだ方がよさそうだ。途中から完全に遊びに行く話に切り替わっている。

それとも件の大黒屋だけがこういうノリなのだろうか。

「あ、でもこれだけは言っておかないとね」

「はい、なんでしょう」

今までの流れで一番真面目な声色になった大黒天祐。真奥も真面目な顔になり、次の言葉を待つ。

「あまり派手な土地柄じゃないんで、人は来るけどお客さんは大人しめなんだ。浮ついてない分、まあ、ちよつと地味な浜なのよ」

「はい」

「それに、なんだかんだ忙しい仕事だし、泳ぎ放題とは言ったけど、實際海で遊べるのは早朝か夕方以降だけだと思ふんだ。だから……」

少し間を取つて、とても重要なことを告げる口ぶりで、言った。

「水着のおねーさんとの素敵な出会いとか、あんまり期待すんなよ！　そもそもナンパは迷惑行為で禁止だかんね！」

「なんの話をしてたんですか今まで!!」

「え？　そういうのって男なら重要じゃないの？」

「ないです！　あの、俺達仕事しに行くんですよね!」

そう問いかけてしまうのも無理からぬものがあつた。

「あ、そうか、真奥さん決まつた人いたりするの？」

「いませんよっ……!」

今までで一番の大声に、千穂も恵美も里穂も何事かと目を見張るのが視界の端に見える。

普通、アルバイトに行くための電話というのは、もつと緊張感のある、事務的なものではないのだろうか。もちろんハードなだけで金銭以外得るものが無い、情け客救の欠片も無い職場

というのも困るが、全く緊張感の無いのもそれはそれで問題な気がする。

マグロナルド幡ヶ谷駅前店は、店長の木崎の人徳もあってそれほど堅苦しくはないが、やはり大型チェーン特有のマニュアルや仕事上のマナー、不文律が多く存在する。

そんな環境で仕事をしてきた真奥にとって、大黒屋の空気はまるで予想がつかなかった。

真奥は荒く息を吐いていたが、向こう側で少しだけ、何か考え込むような気配が伝わってきた。

「まあ硬派の草食系ならそれはそれで安心だからいいけどね。なんか調子狂うなあ。ミキティ伯母さんから聞いてたイメージだと、もうちょつとワイルドな人達かと思ってたからさ」

一体あの大家は真奥と菅屋のイメージをどのように伝え、大黒天祿はそこから何を想像したというのか。

これほど勤勉で、誠実で、実直に世界征服もアルバイトも日々の生活も臈々と進める悪魔なぞ空前絶後であろうと自負しているのに。

この電話で色々生まれてしまった齟齬は、仕事の現場で正さねばなるまい。

「とにかく明後日、できるだけ早く伺います！」

「はいよー、待ってるねー」

まるで緊張感の無い通話を終えた真奥は、何もしていないのに妙に疲れていた。

「一体なんの話してたのよ」

最初に疑問の声を上げたのは惠美である。傍から聞いていれば、とてもアルバイト面接を兼

ねた電話とは思えまい。

「俺もよく分からん」

真奥としても、見知らぬ土地の見知らぬ人物のもとでの見知らぬ仕事である。他に応えようもない。

「それで、どうだったの？ お仕事、できそうなんですか？」

里穂がグラスの水をくゆらせながら尋ねてきたので、真奥は携帯電話をしまつて深く頭を下げる。

「ビデオデッキ、貸していただいてありがとうございます。おかげ様で、路頭に迷わないで済みそうです。明後日から、皆で千葉の海の家で働くことになりました」

「そ、よかった」

里穂は笑顔で頷いた。

千穂もほっとしたように緊張を緩めるがふと気づいて、確認を取る。

「三人でつて、漆原さんもつてことですよ？ 大丈夫なんですか？ 外に出られるんですか？ まともに人と話せるんですか？」

やはり千穂も真奥と同じ想像にたどり着いたのか、漆原が先方に悪い印象を与える前提で話をして不安げな表情を浮かべる。

「何？ 漆原さんって、ヒッキーって感じの人なの？」

里穗が千穂の不安な声色を、やや時代がかった受け取り方をして尋ねる。

「恥ずかしながら……でも、そこは俺ともう一人で全力でカバーします」

真奥もあつきり認めてしまう。

「ふうん……」

里穗はあまり気の無い様子で頷きながら、ちらりと娘の横顔を見た。少し思いつめた様子で真奥を見る、千穂の横顔を。

「あ、メモとペン、ありがとうございました」

真奥が里穗に筆記具を返すと、恵美が真奥のメモを見ながら言う。

「もうこれに懲りて、次からは大家さんから来たもの、ちゃんと開封しなさいよ」

「う……まあ、その、善処する」

恵美は「アノシヤシン」を見ていないからそんなことが言えるのだ。だが、今回大家が自分を救ってくれたのは確かなので、そこは素直に感謝する。

そこでふと、ビデオをつけっぱなしだったことに気づいて停止しようと顔を画面に向けた。

その時だった。

「ところで、エジプトで私、ペリーダンスを学ぶ機会に恵まれましたね」

今までずっとフリートークをしていたらしい大家が、画面の中でそんなことを言い出した。目を離した隙に、大家の背景が砂漠の中のピラミッドから、どこかの豪華な宮殿のダンスホ

ールのような場所に變化している。

「音楽と踊りを生業とする部族の方に、一流と認めていただけましたの。今度こちらで開催されるダンス大会に出場しますのよ。是非、私の踊りをご覧あそばせ」

「あらー、素敵なお衣装」

里穂の発言は、真奥にとっては狂気の沙汰としか思えなかった。

画面の中から流し目を送ってくる大家は、いつの間にか、肩を大胆にさらけ出し、腹との境目が不明な腰を覆うトップスに目もくらむような宝石や銀貨を無数あしらひ、薄布のペールとサテンの真つ赤なスカートを広げた、巨大食虫植物ラフレシアの化物に變化していた。

真奥の動きは、まさしく電光石火であった。

これ以上ビデオを流し続けてはいけない。流せば、皆が不幸になる!!

だが、真奥の指がビデオの停止ボタンに触れるよりも早く、オリエンタルな雰囲気(きふき)の音色と共に、無情にも画面の中の大家は、二の腕、腹、首と全身のありとあらゆる場所を波打たせながら、かつて欧州全土を官能の渦に巻き込んだオリエンタの神秘「ベリーダンス」を披露(ひろう)すべく腰を振りはじめた。

それ以降真奥は、翌朝までの記憶が一切無い。

「もう……はしやぎすぎだよ」

真奥と恵美、そして気絶した真奥を迎えに来た芦屋を送り出して玄關のドアを閉めた千穂は、母に文句を言う。

母の気持ちは分からなくもないが、あのテンションで通されてしまうと子としては次回なるとなく友人と顔を合わせづらくなってしまうものだ。

「あら、いいじゃない。真奥さんのお仕事ぶりが真面目なのは知ってたけど、人柄までこういうときでもない判断できませんからね」

リビングのティーセットを片づける母の言葉に、千穂は目を見開く。

「知ってたって……お母さん、お店行ったことあるの?」

「何驚いてるのよ。当たり前でしょ?」

「恥ずかしいからやめてって言ってるのに……」

「だから自重して、ご挨拶とかは誰にもしてませんよ。でもまあ」

里穂は、真奥が使ったメモ帳に視線を落とす。

「いい人じゃない。真奥さん」

「へ?」

「うん、あれなら、千穂が憶れてもまあ許しましょう」

「お母さんっ!!」

千穂が珍しく声を荒げるが、母は強し、そしらぬ顔。

「仕事は真面目、礼儀はちゃんとしてるし、字は男性にしては綺麗。遊んでいる風にも見えな  
いしタバコの臭いも無い。携帯電話の古さを見るに随分質素な暮らしをなさってるんじゃない  
の？ 迎えにいらっしやった芦屋さん？ あの方も今時珍しいくらい質朴な方ね」

質朴というよりは芦屋の場合、清貧と言った方が良かったろう。

「お父さんも昔は苦学生で結構貧乏してたし、遺伝かしらねえ」

男性の好みが遺伝するかどうかはさておき、しみじみ言われる娘としては大変に居心地が悪い。

「今時珍しいくらい真面目な人じゃない。そう心配することもないんじゃないの？」

「……し、心配って？」

千穂は、ギクリとして母の目を見る。

「母の目をごまかせると思いましたか？ 真奥さんの仕事場が千葉だって分かったときとか、  
漆原さんとやらの話になったときとか、露骨におでこに皺寄ってたわよ」

千穂は思わず顔を赤らめて、今さら自分の額に手をやる。

「だ、だって」

千穂は右手で額、左手でスカートの裾を握りながら、もじもじして言う。

「なんていうか、真奥さんも芦屋さんもすごく真面目でお仕事できる人だけど、漆原さんは  
色々いい加減で不真面目で怠け者でネットばっかりしてて、真奥さん達が慣れない所で漆原さ

んカバーしてたら体調崩さないかどうか本当心配で、最悪漆原さんの勤務態度が悪くてクビとかになったらどうするんだろうとか、そしたら笹塚にいられなくなっちゃう……かも……」  
 淀みない早口で漆原への低評価を言い連ねる千穂は、ふと口を噤む。

今までは、單純に真奥達の仕事が無くなると、彼らの食事や居住環境が悪くなるだけだと思つていたが、事はそれだけでは済まないと思ついたのである。

半月分の収入が無いだけで、真奥達は地代のせいで家賃が高い笹塚からいなくなってしまう可能性もあるのである。

そうなれば彼らを追っている恵美や鈴乃も、自然とそれを追いかける形になるだろう。

それだけならまだいい。最悪、真奥達が行き場を失いエンテ・イスラに帰ってしまったら、

『勇者と魔王の決着』をつけないければならなくなるかもしれないのだ。

「……そんなの、嫌だな」

「千穂？」

千穂は、背中を家の壁に預けて、ため息をつく。

「お仕事がうまくいかなかったら、真奥さん達、どこか遠い所に行っちゃうかもしれないんだ

……遊佐さんも、鈴乃さんも……」

恵美や鈴乃やアラス・ラムスのように戦うことはできなくても、仕事でなら自分だけが真奥の力になることができる。だが、それはあくまで笹塚周辺に彼らの戦場があればの話だ。

自分は、親の庇護を受けて生きるただの女子高生。彼らのように、自分一人の力で生きているわけではないのだ。

暗い表情でうつむいてしまった千穂。

里穂の食器を洗う音が、しばらく場を支配する。

「言っておくけど、真奥さん達についていきたいって言っても、さすがに許しませんからね」  
「……うん、分かってる」

母の言うことは当然だ。如何な信用に足る相手とはいえ、女子高生の身で男性の住み込みバイトについていくことを許す親がいるはずがない。

自分は、真奥の力にはなれない。

千穂が暗澹たる思いで顔を上げたその時。

「ところで……」

「え？」

「真奥さんもそうだけど、遊佐さんもしっかりした方のようなね。まだお若いのに、とても堂々とした受け答えで、なんだかあの方も、今時の若い人には無い雰囲気をお持ちね」

母が突然、恵美のことを話題にしはじめた。

エンテ・イスラの住人でない千穂にも、それは恵美のかつての過酷な体験がそうさせているのだろうという予測はつく。

だが真奥が氣絶するまでの間、母と惠美はそれほど会話をしていなかったように思えるが、帰りしなの惠美と何か込み入った話でもしていたのだろうか。

母の言わんとするところが分からずきよんとしている千穂。

「あなたは自分でお金を稼いでるんだから、通すべき筋を通して、世間様に恥ずかしいことさえしなければ、別に私は何も言いませんよ」

「お母さん……?」

里穂は食器を洗い終わった手を拭うと、悪戯っぽくウィンクして、娘の頭を撫でた。

※

「ちょっと！ 何があつたのさ！ 出ていったときより顔色悪くなってるよ!」

「ばば、どうしたの?」

「帰ったか。一体何をどうすれば、千穂殿のお宅で氣絶するような事態が起こるんだ」

漆原とアラス・ラムスと鈴乃が、それぞれに帰宅した惠美と芹屋と真奥を迎える。

惠美は、漆原がアラス・ラムスをおんぶしながらあやして、しかもアラス・ラムスが結構な機嫌である様子に仰天した。

何か、アラス・ラムスが漆原にシンパシーを覚えるものがあつたのだろうか。

「……よく分からないけど、魔王には色々刺激が強かったようよ」

「やっぱり呪いのビデオだったわけ!?」

真っ白な真奥に比べて平然としている恵美の答えに、負けず劣らず蒼白になる漆原。

佐々木家で気絶してしまった真奥を自分の手で運びなくなかった恵美は、鈴乃に電話して芦屋を寄越してもらった。

芦屋に担がせて、自分が失礼を詫びて佐々木邸を辞し、また魔王城に戻ってきたのだ。幽鬼のような足取りで玄関をくぐり、魔王城の間に身を落とす真奥の背中を見ながら、

「何が呪いのビデオよ。別に大したことじゃなかったわよ」

恵美は平気な顔で、真っ白な真奥を見る。

「女性が踊ってるの見て気絶するなんて、失礼にもほどがあるわ」

「おどっ……」

それだけで漆原には何かを想像させたらしく、顔を引きつらせてしまっている。

「だから大げさよ。千穂ちゃんも、千穂ちゃんのお母様も別に普通に見てたわよ」

「えええ!? うっそだああ!?」

「るしふえるー、ままはうそつきませんー」

漆原は全く信じようとせず、そのおかげでおんぶしていたアラス・ラムスにてしてしと後頭部に抗議の平手を食らう。

しかし、惠美の証言は事実だった。

里穂は大家の衣装を素直に褒めていたし、千穂も大家が大柄な女性である、ということに驚いた以外の反応は見せなかった。

「とにかく、明後日からあなたも、魔王と一緒に千葉に行くのよ。大家さんの親戚の海の家に、八月の旧盆明けまでですって」

「ほう？　ということとは住み込みの仕事か。願ったりかなったりではないか」

鈴乃が感心したように手を打った。

「ままもちばいくの？」

漆原の後ろから願を出したアラス・ラムスの問いに、惠美は苦笑して首を横に振り、漆原の背からアラス・ラムスを受け取る。

「ままはアラス・ラムスと一緒によー」

「ん！」

ばばといっしょにちばにいきたい！　とゴネられても困るので、アラス・ラムスを抱き上げながら大人のズルさでごまかしつつ、漆原を見る惠美。

「もう体重そこそこあんのな。あー重かった。で、千葉？　ふーん。まあいいんじゃない？」

アラス・ラムスを背負っていた手首をほぐす漆原の眩きを、惠美は聞き逃さない。

この墮天使は、自分が労働単位の勘定に入っているとは思っていないのだ。

「アラス・ラムスの面倒見てくれたことは感謝するけど、でもこの程度でそんなこと言つててどうするのよ。海の家、結構ハードワークらしいわよ？ いい機会だと思つてその二ト根性直してきなさい」

「え、何、僕も働くことになつてんの？」

恵美が自分に礼を言つたことと、続けざまに放たれた言葉の内容に、漆原は二度、二種類の驚き方をする。

「少なくともあいつらはそのつもりみたいよ。ていうか、住み込みさせてもらうのに、一人だけ働かないでいる氣？」

「いや、その、だつて、ええ？」

漆原は前髪をいじりながらぶつぶつと呟く。

「何それ海の家とかかないよ。このクソ暑いのに何を好き好んでそんな暑そうなところ行かないやなんないんだよ……てか、僕に一言も相談無しかよ……」

「貴様は本当に立場を弁えないな」

勝手なことを言う漆原に、鈴乃が横から厳しい声をかける。

「貴様に相談して得られる建設的な意見など何も無かろう。エミリアの言う通り、いい機会だ。更生施設に入つたつもりで行つてこい！」

「やだよ！ なんだよその例えは！ そ、それにほら、僕ほとんど働いたことないから迷惑に

なるかもしれないしき、あと、一応まだオルバがこっちで警察に捕まってるうちはあんまり人前に顔出すのもほら、良くないじゃん？」

見苦しい言い訳を重ねる漆原を、女性二人はとことん冷たい視線で射抜く。

「そうやって言い訳を重ねて、一体いつまで働かないつもり？」

「人前に顔を出せないと言いながら、ネット通販ジャングルの買い物で佐助急便のドライバ―と平気で顔を合わせているのはどういうわけだ？ ん？」

「オルバのことがあってから三か月近く、何かあったわけ？ 銭湯にも行ってるんでしょ？」

それとも一度でも、警察が来たりして身に危険が迫ったことがあったの？」

「で、でもそれは平和ボケってやつだろ！ 今日何もないからって明日も無事とは限らないし、言うなればこれはこっちで犯した罪を認めて謹慎してるってことで……」

「引き籠って罪を償うために節制しているならまだしも、怠惰に時間を浪費し、主や同僚の脛を齧るばかりの貴様が偉そうに何か言えた義理か。まだ魔王の手伝いで世界征服の計画でも練っていた方が可愛げがある」

「う……ううう!!」

女性二人に理路整然と正論で説教され、若干涙目になりはじめる漆原。

「働かないなら働かないでどうするつもり？ 住む場所も無いのに、どうやって引き籠るの？ オルバとやってたようなことをまたやるっていうなら、今度こそ容赦しないわよ」

「先方にお邪魔して、貴様だけ働かない、という選択肢もあるにはあるだろうが、さぞ肩身が狭いだろうなあ。貴様の事情を何も知らぬ赤の他人相手に、働きもせずに食事を要求する度胸があればの話だが」

「まあ、すずねーちゃ、るしふえるいじめないで、ね？」

漆原が責め立てられていることだけは分かるアラス・ラムスが、困ったような顔を浮かべて漆原をかばうが、そのことがまた漆原のプライドを傷つける。

「ま、所詮は魔王城のことだし、私が心配してやる義理は無いんだけどね」

「そうだな。所詮は天から落ちこぼれた悪魔だ。恥も勤勞精神も、天使資格と一緒に落としてきたに違いない」

「お、お前らあ！ 泣くぞー！ いい加減泣くぞそれ以上言うて！ 大体ベルだって無職じゃなかー！ 偉そうなこと言うなよー」

もうほとんど泣いているような声で、漆原は顔を真っ赤にして叫ぶ。

「ベルは確かに日本では無職だけど、エンテ・イスラに帰れば正式な聖職者だし彼女なりの目的があつて動いてる。何より掃除洗濯炊事全てを一人でこなしてるわ。あなたとベルの間にはね、同じ無職でも、天と地ほどの差があるのよ」

「いの……っ！ このっ！ バカにしやがって！」

「るしふえる、おとこのこはないちゃめっなの、いたいのいたいのとんでくの。とんでけー」

「嬉しいけど嬉しくないやいっ!!」

どうやらたった一人、味方になってくれるらしいアラス・ラムスがわたたと伸ばしてくる手を涙目で拒否した漆原は、恵美と鈴乃を睨む。

「いーよ分かったよ! 僕が本気になったら、それこそ真奥なんかメジやないくらい働いてやるんだからな! 絶対今のお前らの言葉撤回させてやる!!」

憤然と肩を怒らせて喚きながら、返事も聞かずに勢いよく二〇一号室の扉を閉めてしまう漆原。その様子を見ながら、恵美と鈴乃はほっと顔を見合わせた。

「うまく、いったのか?」

「一応……つてとこかしら」

「まあ、すずねーちゃ、るしふえるめってしないで、ね?」

アラス・ラムスの抗議をいなしながら、恵美は疲れた顔で閉じられた魔王城のドアを見る。

「失業した上にホームレスになってヤケ起こされたら大変だしね。魔王とアルシエルはともかく、ルシフェルは本当に日本の人に危害を加えたことがあるから心配だったの!」

恵美が妙に真奥の失業対策に協力的だったのは、こういうことだったのだ。

あまり我慢強い方ではない漆原が今の安定を失ったとき、どのような行動に出るか分からないことを危惧していたので、三人の大悪魔がなんとか職住の安定を得たことに、恵美は心の底から安堵しているのである。

「しかし、銚子という町は、笹塚からはかなり離れているだろう。」

一口に千葉と言っても広いし、君ヶ浜という場所がどのあたりなのか、恵美も詳しくは知らない。だが今回に限っては、恵美はあまり真奥達の動向を心配していなかった。

「ベルは、この大家さんに直接会ったことはないのよね？」

「ああ。手紙のやりとりだけだが……」

恵美は、初めてヴィラ・ローザ笹塚の大家、志波美輝に出会ったときのことを思い出す。

「うまく言えないけど……多分、大家さんに関わるところにいる限り、あいつらは悪いことをしたくても、できない気がするの。放置するつもりはないけど、そうべったり張りついてなくてもいいはずよ」

「どういうことだ？」

漆原がオルバと共に、千穂を人質に取って挑んできたあの日。

ほんの数か月前なのに、なんだか随分と遠い昔のことに感じられる。

「私達はエンテ・イスラの人間として、この世界、地球の人には無い力や不思議を沢山持っている。でも……」

——思念や意思が大いなる力を持つのはあなた方が一番よくご存知なのではなくて？——

「地球にも私達の知らない力や不思議が、沢山あるのよ。きつとね」

鈴乃は訳が分からない様子で、首を傾げた。

「それに、千穂ちゃんのこともあるわ」

「千穂殿？」

「あの子はもう、好むと好まざるとにかかわらず、私達と深く関わってしまったっている。魔王達を追いかけるにしても、あの子の安全を確保してからじゃないと管塚を離れられないわ」

千穂は、既にエンテ・イスラや天界の住人からも、勇者と魔王の戦いにおける関係者と認識されてしまっている。今さら千穂の記憶を操作したところで、既に彼女が恵美や真奥にとって大切な人間であるという事実だけは変えようがないのだ。

万が一サリエルやガブリエルに人質に取られるような事態が起こっては、後悔してもしきれない。

恵美は腕を組んで考え込んだ。

「千穂ちゃんのお母さんに許可をもらって一緒に連れていければ一番いいんだけど……難しいでしょうね……ご両親が都合良く海外出張とか行ってくれないかしら」

「現実を見ろ」

女子高生を大人の都合で振り回すのは、斯くも悩ましいことなのである。

真奥が大家の志波の姪、大黒天袴に住み込みアルバイトの約束を取りつけた翌日。真奥達はこれからの二週間を過ごす準備に追われていた。

魔王と悪魔大元帥は隣人の聖職者に全力で頭を下げて、冷蔵庫や洗濯機などの家電製品を一緒の倉庫に預かってもらう約束を取りつける。

「この情景を写真撮影して、教会が魔王を調伏したということにしてしまいたい」と、呆れながら鈴乃が言うほどに見事な土下座であった。

家具家電の保管先のめどがついたら、次は翌日からの住み込みの準備である。

「如何な天運に恵まれたとはいえ、準備を怠っては運を逃がしてしまいかねません」と奮起するのはもちろん、魔王城の主夫たる芦屋である。

必要なものはビーチサンダルくらい、と言われたものの、本当にそれだけで行くわけにはいかない。足掛け二週間滞在することになるわけだから、着替えなども十分な量用意しなければならないのだ。

「シャツとパンツと一応靴下を、四日分も持っていけば事足りるでしょう。洗濯の頻度を調節してやりくりすれば大丈夫です」

「ユニフォームは無いみてえだから、Tシャツとかは仕事で使うことも考えないとだぜ？」

「すると、仕事のシャツは別に持っていていった方が良いでしょうね……ズボンは、ハーフパンツのような物の方がいいのでしょうか」

「まあジーンズの裾たくし上げてもいいとは思いますが……なんつーか、いつも皆で揃いの制服着て仕事してると、そういうラフな仕事着って感覚がよく分かん」

「そうですね。魔王軍ですら、東西南北の四軍にはそれぞれ共通の紋章があったのに」

「あれかな、ユニシロとかで揃いのTシャツでも買ってたか？」

「制服は持ち出し、のバターンですか。日本に來た当初やった、短期派遣の仕事思い出しますね」

「あー、あの会社のロゴ入りのシャツ買われたヤツな。でもあれ長袖だったろ？」

「さすがにこの猛暑であれを着る気にはなれませんね」

仕舞われた衣類をひっくり返して荷物の相談を交わす真奥と芦屋の傍らで、漆原は一切なんの手出しもせずにその様子を眺めている。

どういふ風の吹き回しか、漆原は今回妙に気を張って、真奥と芦屋を手伝おうとした。

だが、昼食の食器を洗わせれば油がこびりついたまま残っており、シャツを畳ませれば平行四辺形になり、干したタオルケットはうっかり裏庭に落とすなど、役立たずを通り越してもの見事に邪魔になったので、部屋の隅で謹慎しているのである。

「誰でも最初はそんなもんだろ。なんだよなんだよ」

珍しくやる気を出したかと思えばあつという間に不貞腐れる漆原。

真奥や芦屋とて一軍の長、他人をまとめる立場にあるものである。

やってみせ、言つて聞かせて、させてみて、褒めてやらねば人は動かじの精神は常に心に留めてゐるのだが、相手は墮天使にして西大陸攻略軍司令官悪魔大元帥ルシフェルである。

勇者エミリアの台頭は西大陸が出发点だったが、漆原が西方攻略軍を真面目に統率してゐなかつたせいではないかとすら疑いたくなつてくる。

食器がともに洗えないことと勇者の侵攻を止められないことの因果関係はさておき、もし最初に日本と一緒に飛ばされたのが家事万能の芦屋でなく自宅警備以外取り柄の無い漆原だつたらと思うと、真奥は背筋がうすら寒くなる。

「……芦屋……お前が俺の側近で、本当に良かった」

真奥はしみじみとそう言つて、芦屋の肩に手を置く。

その言葉に芦屋はしばらく置かれた手を見てぼかんとしていたが、やがて脳が意味を理解したらしく、唐突に動揺して真奥の前に跪く。

「そ、その、ありがたきお言葉ですが、と、突然何を仰つてゐるのですか!? あ、いえ、決して褒められたのが嫌だということでは……」

芦屋は、照れ隠しをするように部屋の中を見回しある一点に目を留める。

「う、漆原、あそこの広告紙の東で食器を包んで箱に詰める。それくらいはできるだろう」

「バカにすんなよ!」

照れ隠しのとぼつちりで怒鳴られた漆原は本気でむくれるが、さりとてそれ以上言い返すこ

ともできない。渋谷腰を上げて広告紙と段ボールを引き寄せると、漆原は古チラシや古新聞をとって割れ物の食器を包んでゆく。

「でも、あれだな、漆原を甘やかすわけじゃねえが、本当に大丈夫かな」

「僕のお尋ね者疑惑？ ……まーあの頃は監視カメラとかそういうの意識してなかったけど」日本で強盗を働いたという過去を悪びれるところなく語るあたり、やはり悪魔である。

「お前、悪魔型と外見がほとんど変わらないもんなあ。ちつとは考えて行動しろよ」

「だってあのときは、こんなことになるなんて思わなかったし」

漆原が不貞腐れたようにそっぽを向き、真奥が魔王時代に纏っていたマントを、こてこてとした飾りに苦勞しながら畳もうとしたとき

「あ、魔王様。魔王様のマントですが、厚手なので湿気が籠って虫に食われるかもしれませんから、防虫剤を入れておいてください」

などと芦屋が言うものだから困ってしまう。

「……俺だって、二年前までは自分のマントに防虫剤挟むことになるとは思わなかった。確かに過ぎたこと言っても始まんわな」

声を潜めて笑う漆原に苦い顔をしながら、芦屋に言われた通り防虫剤の紙パックを段ボールの隙間に仕込む真奥。

「あの後オルバの野郎は、そもそも警察に逮捕されたのか？」

オルバと漆原が共謀して起こした騒動を魔力を取り戻した真奥が鎮めた後、オルバが警察に保護されたところまでは真奥達も知っていた。

「逮捕はされたみたいだよ、一応、銃刀法違反で」

「そうなのか？」

「うん。大分前だけど、ネットでニュースになった。テレビとか新聞に出るような性質のものじゃなかったみたいけどね」

「おいおい、それじゃやっぱマズいんじゃないか？」

「いえ、おそらく問題は無いと思います」

口を挟んだのは芦屋だ。

「私もその記事は読みました。不法入国の外国人が所持していた銃で器物損壊事件を起こした。背後に密入国エージェントや暴力団がいるのではないか、という体裁でした。もちろんそれ以前の強盗事件と関連は疑われているようですが……」

「被害額はそれほどでもないはずだし、人は殺してないからニュース性も低いしね」

「やった本人が言ってるや世話ねえぞ。というか、芦屋お前、そんなのどこで見たんだよ」

「うちのパソコンですよ。今は漆原の、ですが」

芦屋は完全に漆原のネット閲覧道具と化しているノートパソコンを見た。

ちなみにノートパソコンを携帯することを漆原が強硬に主張したために、無線ネット回線と

もども千葉へ持っていくことになっている。

「今では単なるゴクツブシですが、あの当時は裏切り者ですからね。万が一のときには警察に突き出す気満々でおりました」

「うわ、お前僕のことそんなに信用してないわけ？　ちよつと酷くない？　その言いようは」

「あの目から今日までの生活で、何か一つでも私がお前を信用できる要素があったか？」  
芦屋の冷たい言葉に、漆原はぐうの音も出ない。

「とにかくそれ以降、オルバに関わる一連の出来事と関係するような報道は一切ありませんでした」

「報道は無かった、か」

真奥が手を止めて何かを考え込む顔になる。

「おい漆原。オルバは、聖法氣を使い切ったとかいうわけではないよな？」

「ないと思うよ。真奥やエミリアと戦ったときに全力出してたのは間違いないから、今ゲートを開けるかどうかってのは分からないけど。何？　残った聖法氣を使って日本で悪いことしたりとか心配してる？」

「まあ、そういうことだが」

「うーん……ないと思うけど」

漆原は肩を竦める。

「オルバは僕がこうなつたって知らないわけだし、大体今じゃエミリアだってあいつの敵だろ？ 聖法気も回復せずに監獄して復讐なんて戦力的に不可能だし、あとは僕を共犯者として告発するか、法術使つて逃げるかしかができないよ。よしんばエンテ・イスラに帰つたって、ベルが教会の不正を暴こうとしてるんだろ？ 何事もなかったように、教会勢力を自由に操るようなことはもうできないと思うんだけどなあ」

「お前を告発つてのが、正直一番こええよ。身内に犯罪者出たら、俺本当に仕事を解雇されちゃうかもしれない」

「もし魔王城に司直の手が伸びたら漆原、魔王様の雇用継続のために、貴様を警察に差し出して一切知らぬ存ぜぬで通すからな」

「どーぞご自由に！ でも、前に一回警察来たけど、何もなかったじゃん」

「ああ……鈴乃に自転車潰されたときな」

真奥は都庁の前に初代デュラハン号の残骸を放置したカドで警察に散々怒られたのだが、最初は漆原関係で乗り込んだものとはばかり思っていたのだ。

「大丈夫だって、夏の間千葉に行くくらいなら。公開指名手配されてるわけでもないのに、気にしすぎだって」

「お前は気にしなさすぎだ……でも、ヒマができたらず少探り入れたほうがいいのかもな」

オルバ・メイヤーの存在は、ある意味、平和に日本で暮らす魔王城の住人にとって、喉に刺

さった魚の小骨。奥歯に挟まったニラ、前歯の隙間に張りついた黒ゴマのように、ふとした瞬間に不安の影を落とす要素だった。

「それより漆原、食器の包装は終わったのか」

「終わったよ。大体ほとんどプラスチックじゃないか。こんなことしなくたって割れないんじゃないの？」

手伝う意思は見たものの、いちいち余計なことを言う漆原を、芦屋は窘める。

「プラスチックの食器でも、コーティングが剥げて傷がつけば雑菌の温床になるんだ！」

「あーもう、すいません分かりました分かりました！」

漆原は耳を塞いで聞こえないのポーズ。

「まったくー……そうだ魔王様。木崎店長に連絡は済ませたのですか？」

「いや、これから。直接行ってこようかと思つて。店も今日から色々工事の人が入るらしいけど、夕方までは店にいるって言つてたから」

「なら、早い方が良いのではありませんか。もうあらかた荷物は片付きましたので、あとは必用なものの買い出しだけです」

「店の帰りに俺が買ってくるか？」

「トランクも購入しなければなりませんし、荷物の総量を把握している私が行つて参ります。特にこだわりが無ければサンダル等も買つて参ります。それに私も個人的に挨拶をしなければ

ならない相手がありました……」

「あ、そう？」

これまで、芦屋の個人的な知り合いや勤め先など聞いたことがなかった真奥。つい疑問を發するが、考えてみれば真奥も芦屋の全てのプライベートを把握してはいない。

本人から聞いたわけではないが、時折短期派遣のようなアルバイトを入れて、その報酬を家計の足しにしたり、最近真奥が忘れがちな魔力文明の搜索費用などに当てているらしいことは知っていた。

そんな忠臣の言葉は、素直に聞き入れるに限る。全員分の足のサイズを知っていることなど今さら疑問にも思わない。

「そっか、んじやまあ、頼むわ」

「かしこまりました。木崎店長との会談の成功を祈っております。我らの明日のために」

「明日以降の飯のために、な」

そう言いながらそれぞれの目的で笹塚の町へと出ていった二人を見送りながら、漆原はガラにもなく疑問を抱いた。

「あいつら、本当に世界征服する気あんのかな？ 最近目的と手段が入れ替わってないか？」

鈴乃も千穂も、そして恵美でさえ、一度は抱いた疑問であるが、今頃になってそんなことを考えている漆原に真奥の真意など測れようはずもなかった。

早くも工事用の足場が組まれ、防塵カバーに覆われている幡ヶ谷駅前店の入ったビルの前にたどり着いた真奥に声をかけてくる者がいた。

「真奥さん！ 体調大丈夫なんですか？」

千穂は改装後の八月後半のシフトを提出しに来たところだと言うが、それよりも早く昨晚白目を刺いて気絶してしまった真奥の体調を気遣う。

「あー、昨日はありがとな、うん、ちよつとアレだったけど大丈夫大丈夫……うん」

脳裏に昨夜の大家のベリーダンスの映像がフラッシュバックして、一瞬めまいがした。

千穂はそんな真奥をどこか思いつめた様子で心配そうに見上げるが、それ以上は何も言えずに黙ってしまう。どれほど気遣ったところで、明日以降の真奥は自分についていけない未知の戦場に旅立ってしまうのだ。

「ど、どうしたちーちゃん」

その空気を敏感に感じ取る真奥だったが、千穂は力なく首を振っただけ。

微妙な空気になってしまった二人はとりあえず連れだって店に入り、木崎に挨拶してそのもやもやを振り払った。

「そうか、いい勤め先が見つかったか」

真奥が改装期間中はアパートの大家の紹介で、千葉の海の家で働くことを告げると、木崎は魔揚に頷いた。

「それで、戻ってくるのだろうか？」

「え？」

木崎の思わぬ問いに、真奥は一瞬首を傾げる。

「まさか笹塚から銚子に毎日通勤するわけじゃないだろうか？　住み込みの当てがあるのか、そうでなければ引越してしまうのかと思つてな」

木崎は千穂の手書きのシフト提出用のメモに目を落とし、真奥の顔を見ずに言った。

「君の人生を縛るつもりはないが、折角手塩にかけてようやく最近片腕と呼べる程度に育ってきたのだ。手放すのは、少々惜しい」

笑いながらも平坦な声。だが、木崎は笑えない冗談も、嘘も言わない。今の言葉は、木崎が真実そう思っている、真奥への評価だ。

「一時的に住み込みするだけです。必ず、戻ってきます」

真奥の声は、その評価に励まされ覇氣に満ちていた。

その確信を秘めた一言に、千穂もほんの少しだけ心が軽くなるのを感じる。

木崎も満足そうに微笑んでようやく真奥を見た。

「結構。面接のとき、一廉の正社員として大成したいと言つた君の言葉は忘れていない。これ

までの勤務態度からも、それが嘘でないことは分かっているつもりだ」

「今回は、色々ダメダメでしたけどね……」

「なあに、君は初めからなんだかんた言って小器用すぎたからな。たまにはそういった普通の人間らしい失敗をした方が可愛げがある。取り返しのつく失敗なら、取り返せるうちに沢山しておけ。後でその経験が役立つときが必ず来る」

真奥としては「普通の人間らしい」などと言われると複雑な気分になるのだが、そんなことを知る由もない木崎はニヤリと笑った。

「重要な連絡事項を確認し忘れ、業務に支障を来すかもしれない事態を招いた罰だ。新装開店後は、今まで以上に働いてもらうぞ」

そう言つて肩を叩かれた真奥は、思わず目に熱いものがこみ上げてきそうになった。

「ちーちゃんは、完全にお休みするとはいえ、後半あまり無理はしないように。まーくんと一緒に働きたいのは分かるが、許された若いうちは仕事以外のこともたくさん学ぶ夏にしないさ」

「き、木崎さん!!」

大変珍しい木崎の軽口に、千穂は真奥についていくことを諦めきれない自分の心中を見抜かれたのかと思つた。

真奥も居心地が悪くなり、目だけ余所を向いてしまう。

そんな若者の様子を微笑ましく見た木崎に、

「ところでちーちゃんが異動願いを出さなかったのは、まさか銚子に行くわけではなからうな？ まーくんの銚子行きのこと、知っていたのか？」

突然話題を振られて、千穂は目を白黒させる。

「え、あ、その、あの、えっと」

至極分かりやすい反応をした後、ちらりと千穂は真奥を横目で見てから答えた。

「真奥さんどうこうに<sup>まが</sup>関わりなく、前々から行ってみたい場所ではありますけど……」

「ほう？」

「木崎さん、真奥さん、銚子電鉄って聞いたことありますか？」

真奥は、昨夜電話で聞いた名前なのでもちろん知っている。木崎は少し考え込むような仕草をしてから、記憶を引っ張り出して言った。

「銚子電鉄……あれか？ 資金難に陥<sup>おと</sup>つたローカル鉄道を、社員が地元名物のお菓子を売って存続させたとかいう」

「それですそれです。その名物の開発に地元の銚子の高校生が関わってるって新聞に載ってて、私と同じ歳で鉄道会社や地域を助けちゃうような人がいるんだって驚いて、どんな所か見てみたいんですよ」

熱く語る千穂を見て、木崎と真奥は思わず顔を見合わせ、

「ちーちゃんは、なんというか根本的に真面目なんだな」

木崎は苦笑ともとれるため息を漏らした。

「え？」

「なんでもない。そういう知的好奇心を持つのは素晴らしいことだ。ま、行くならきちんとご両親の許可を取りなさい。結構遠いから」

木崎としては常識的な発想で一応の釘を刺したただけだったろうが、親の許可、という言葉は、少しだけ軽くなった千穂の心をまた重くした。

「はい、そうします」

なんとか明るい調子を保って返事をしたつもりだが、木崎にそう聞こえていたかどうかは分からない。

その後、少しだけとりとめのない雑談をした後、真奥と千穂は連れだって店を出たところ、

「……」  
 呆然、という単語の見本のような立ち尽くし方をして、今にも薔薇の花束を取り落としそうになっているサリエルと出くわした。

「あ、サリエルさんだ……」

最近、ようやくサリエルへの生理的嫌悪感が解けてきた千穂の声に我に返ったらしいサリエルは、天界でも彼だけが持つ特殊能力「墮天の邪眼光」を全力で光らせながら真奥に突然食ってかかってきた。

「まあああううおおおおおおうううううええあああああ……！！！！！！」

「うわああっ!!」

小柄なサリエルが全力で胸ぐらを掴んできて、真奥は思わずつんのめりそうになる。

「一体これはどういうことだ貴様どんな奸計を巡らせた我が永遠の女神の店が何故閉まっているのだこの卑怯な悪魔めが吐ききりきりと吐け我が女神の居所をそうでなければこの溢れ出る僕の愛のバトスの気焰が貴様を焼き尽くすぞ!!」

どうやらサリエルは、真奥と違った意味で視野が狭かったらしい。木崎はずっとお客様向けの新装開店告知を出していたというから、サリエルは単純にそれを見逃したのだろう。

「いてゐいてゐバラの棘がいてゐ!!」

薔薇の花束が真奥の鼻づらに突きつけられて棘がちくちくと肌に刺さる。

「僕の寛大なる心でガブリエルへの協力を拒んでやった恩を忘れやがって閉店するならすると何故一言僕に言わない言えば僕はあらん限りの勇氣と資産を振り絞って我が女神に一生を捧げる告白をしたのにいいいいいいっ!!!」

資産でなんだとかその告白の効果の程とか、普通だったらそんなところを突っ込みたくなる。ところだが、薔薇の棘にやられて痛がる真奥よりも先に反応したのは千穂だった。

「ちょ、サリエルさん! ガブリエルさんへの協力って、どういうことですか!？」

「おっ?」

千穂が真奥の胸ぐらを揺らすサリエルの手に触れた途端、

「ふつ、僕は美人の誘いは断らないことにしている。どうだい、これから僕と一緒にセンタッキーの新メニュー、タンドリーチキンツイスターをつまみながらお茶でも」

真奥から手を離させようとしただけなのに突然千穂の手を掴んで手の甲に口づけせんばかりの姿勢になったサリエル。

「木崎さんに言いつけますよ」

だが千穂も既に何度も修羅場やら命の危機やらなんやら訳の分からない状況を潜り抜けてきているのだ。今さらこの程度のセクハラで動じるヤワな女ではない。

真奥についていけないことで気落ちしていたこともあり、千穂は殊更冷たく言い放つ。それを聞いたサリエルは希望と絶望を同居させる器用な表情を浮かべた。

「むっ……そ、それは勘弁願おう……が、我が女神はまだこの店にいろのか!？」

サリエル殺すにや刃物はいらぬ。「木崎」の一言あれば良い。

「教えてはしかつたら答えてください。ガブリエルさんへの協力を拒んだって、何の話ですか」

「む、あ、その、それは……」

サリエルは言葉に詰まった。明らかに口を滑らせたことを後悔する様子だ。そしてそんなサリエルを手玉に取ろうとする千穂に対し、真奥はちよつぱり畏怖を覚える。

「強くなったなちーちゃん……」

真奥は複雑な気持ちで、自分が一人の人間の人生を色々な意味で変えてしまったことを胸に深く刻む。

「話してくれたらお店のこと教えてあげます。話してくれなかったら、木崎さんに電話で「猿江さんにセクハラされそうになった」って報告します」

「この間ガブリエルが僕の店に来てな。エミリアの聖剣とイエソドの欠片を回収する手伝いをしてくれと頼まれて色々話を聞いた」

千穂の言葉を聞いたサリエルは、さも当然のように、言い淀んでいたことを素直に喋った。  
掌を返す、とはサリエルのような態度のことを言うのだ。

「お前はそれでいいのか」

一人の天使の人生を変えたことは、二秒でどうでも良くなった。

ここに至るまでサリエルは、ずっと千穂の手を握って蹠いたまま。道行く人々の不審の目もなんのそので、彼は元からこういう人生を歩む定めだったのだろう。

「僕がエミリアの聖剣を回収しに来たのも、元々はガブリエルの失策を補うためだ。ただ最初は、イエソドがそこまで細かく分裂してること、その中の一つがあの子の形を取っていることも聞いていなかったし、正直今は女神のことで頭がいっぱいで聖剣のことなんかどうでも良かったしな。そういやあいつ、あれから店来ないな」

女神という単語がややこしいが、要するに木崎に入れ込みすぎて天界の任務なんかどうでも

いい、と言っているのだ。本当にそれでいいのか大天使。

サリエルらしい、と言って言えなくもないが、真奥は今の言葉に違和感を感じ取った。

「ちよつと待て、そこまで細かく、つつつたなお前。てことは、分裂していること自体は知ってたのか？」

「……おあ」

サリエルはうめく。要するにまた口を滑らせたのだ。そして、ちらりと千穂を見上げる。

「知ってたんですね？」

「……はい、知ってました」

交渉の余地を与えない千穂。サリエルはがつくりと項垂れる。

「分裂したもののうち、間違ひなく場所が分かっているエミリアの聖剣を回収する任務が、僕に下ったのだ」

サリエルは当初、アラス・ラムスを直接見ても彼女がイエソドの欠片の一部であるとは気づいていなかった。

そのアラス・ラムスとの融合で進化した、破邪の衣もイエソドの欠片と関わりがあると推測できるが、要するに天界側も、イエソドの欠片がどのような変化をしているか、正確に把握していないということになる。

「ガブリエルもエミリアの聖剣奪還には失敗したらしいな。先にこっちに来ていた僕に、改め

てイエソドの欠片の回収に協力するよう要請してきたのだ。忙しいから断ったけどな。貴様らにとつては邪魔な戦力が増えなかったわけだから、恩に着ていいんだぞ」

そんな知らないところで起こったことを愚著せがましく語られても困る。

だが、要するにガブリエルはやはり大人しく泣いて逃げ帰ったわけでもなければ、アラス・ラムスを諦めたわけでもなかったのだ。

サリエルとガブリエルという押しも押されぬ大天使をこちらが次々と退けたことで、とりあえず天界側が攻め手を欠いている状態、というだけのことだろう。

こちらとしては常に守勢に回るしかないため、相手がいつ、どうやって動くか分からないのはやはり不安ではある。

「……？」

「な、なんだその目は佐々木千穂。ぼ、僕は全部正直に話しているぞ」

「あ、はい、それはいいんですけど」

千穂は先ほどの真奥と同じく、何かが腑に落ちないような顔でサリエルを見返していた。

「サリエルさん、間違いない場所が分かってたってどうして……」

千穂がそう尋ねようとしたとき、

「なんだ、まだ帰っていなかったのか二人と……も……う？」

真奥と千穂の背後からした声に、サリエルの顔が一気に千ワットくらい明るくなる。

だが真奥も千穂も、その声の語尾に込められた不穏な空気に硬直し、顔を青ざめさせて振り返った。

そこにはいつもの社員用ユニフォームではなく、明るいグレーのパンツスーツを纏い、髪を下ろして大きめのビジネスバッグを肩から提げた木崎の姿があった。

そして木崎は真奥でも千穂でもなく、千穂の手を取ったまま跪いているサリエルを見ていた。魔界の王すら一睨みで凍りつかせる憤怒の視線で。

「……うちのクルーに、何をしているのかな狼江三月」

明らかに睨まれているのに、なぜか笑顔のサリエル。

北欧のとある少年は、悪魔の鏡の欠片を心臓と目に打ち込まれ、雪の女王の甘言に惑わされてしまったという。

北欧の少年とサリエルの大きな違いは、彼が雪の女王に愛されているか否かという点だ。

「い、いえこれは、言うなれば交渉と言うか、我が女神の居所を知るために仕方なく……」

「売上に貢献するからと大目に見てはいたが、未成年のクルーにまで見境なく手を出すような性根の腐った奴は客ではない。貴様は私の目の届く限り、当分出入り禁止だ！」

「おおおっ!?」

エミリアの聖剣すら封じて見せた大天使サリエルは、人間の女が放った一言でその場に凍りつき、碎けてガラガラと崩れ落ちた。

「二人共さつさと帰りなさい。まーくん、君が一緒にいたのに、ちーちゃんを守ってやらんでどうする！」

「あ、はい、その、すいません」

真奥はとりあえず謝り、千穂は、粉々に粉砕されて今にも夏の暑気に溶かされて道路脇の側溝に流れていってしまいそうなサリエルをあたふたしながら見ている。

「ち、ちーちゃん帰るぞ」

「え？ あ、はい、その、はい、お、お疲れ様です木崎さん」

慌ただしく店を後にした真奥と千穂は、甲州街道の歩道を複雑な顔で並んで歩く。

「わ、私ちよつとサリエルさんにかわいそうなことしたかも……」

「まあ、ちーちゃんは鈴乃んときのお返しってことでいいんじゃないの？ あとはあいつの自業自得さ。あんなテンションの野郎を今まで許容してきた木崎さんが凄いなだよ」

散々な言われようのサリエルである。

「それよりも真奥さん……」

「ああ、分かっているよ」

今はこれ以上サリエルから話を聞くのは不可能だろう。だが、千穂に言われるまでもなく、真奥だってやはり引かかっているのだ。

「間違いない場所が分かっているエミリアのイエソドの欠片」とサリエルは言った。

天界は、日本にやってきた恵美と聖剣を一年以上放置していたはずなのである。それなのに、一体どうやって今になって聖剣の在り処、ひいては恵美の居所を捕捉したのだろうか。

「……ま、どーでもいいけどな。俺を追ってきたんでなければ、あとは恵美の問題だし……」

冷静に考えれば、これは天界と恵美との間の話であり、最初の漆原の襲撃を除けば真奥はほとんど部外者なのだ。だからこれ以上何か考える必要も無い、と言おうとした瞬間、

「アラス・ラムスちゃんがどうなってもいいんですか？」

その思考を先回りしたように千穂が半目になって問いかけてくる。

「遊佐さんの聖剣ってことは、今となってはアラス・ラムスちゃんってことですよね」

「そ、それは……で、でも日本じゃろくに戦えない俺より恵美の方がずっと強いから、別に俺が何もしなくなたって……」

「そういう問題じゃないんです。ばばなら守ってあげないとダメじゃないですか。アラス・ラムスちゃん泣いちゃいますよ？」

「ち、ちーちゃんはどっちの味方なんだよ」

そこに真奥は、色々と複雑な意味を込めて尋ねたつもりだった。

「私は、私が好きな人達皆が仲良くなって、ずっと一緒にいられたらいいなって思ってるだけですから」

少しだけ悲しげな顔でそう返してきた。

「……ど、どうした？ 何があった？」

かつては恵美が真奥の元カノだなどと勘違いをしておおいにジェラシーを発揮した千穂なのに、ここ最近妙に大人げがあるというか、何かと真奥と恵美とアラス・ラムスの行く末を気遣う気配があるのだ。

「んー、お話ししてもいいんですけれど……聞いてくれます？ 結構重いこと言うかもです」

「は？ あ、ああ」

「真奥さん、この前、私のこと信じて頼りにしてくれるって、言ってくれましたよね？ でも私……今のままじゃダメなんです」

「な、何が？」

「私は遊佐さんや鈴乃さんみたいに戦う力は持っていないし、芦屋さんみたいに昔から真奥さんと一緒にいるわけでもないです。たまたま、真奥さん達の近くにいて、本当のこと知ってるだけで、漆原さんがきちんと働かないんじゃないかって心配になっても、一緒に千葉に行くことだってできません」

街路樹で騒ぐ蟬時雨の下でも、不思議と千穂の声はすんなりと耳に入ってくる。

「だから私、もつといっぱい勉強して、もつといっぱいいろんなこと知って、大人になって、真奥さんを助けられるようにならなきゃって思ったんです。折角頼りにしてもらえらなら、全部応えたいじゃないですか」

「……おお」

「まだ返事ももらってないですしね。でも、折角せつかくもらうならいいお返事欲しいですから、そうなるようにもって頑張がんぢやうらなきゃって思ってたんです。それでいつか……」

と、千穂ちほは突然腕組みをして胸を反らして顎あごを上げ、わざとらしい低い声で不敵な笑いを浮かべてみせる。

「私が新しい魔王軍の筆頭悪魔大元帥だいにげんすいになって、真奥まおくさんを賭けて遊佐さんと決闘します」  
「ぶっ」

掛け値なしに真奥は吹き出した。

「い、今の話をどこをどうすると、いきなりちーちゃんが大元帥とかゆーことになる!?」

「少し前に芦屋あしやさんに推薦すいせんしてもらったんです。その時は断つちゃいましたけど、そうなたらやっぱり立候補しようかなって」

クラス委員にでも立候補するような気軽さで、そんなことを言う千穂。

「それは冗談になっちゃうかもしれないけど、でも遊佐さんに勝つならもっと大人になって、遊佐さんと戦えるだけの、遊佐さんとは違った武器が必要なんです。大学に行って、色々学んで視野を広げて、日本でもエンテ・イスラでも、真奥さんに頼ってもらえる女性になりたいんです」

真夏の熱に浮かされたかのような、ある意味今まで以上の情熱的な言葉に真奥は驚く。

「大学ねえ……でも、ちーちゃんは今まで俺達のこと、十二分に助けてくれてるぜ?」



すると千穂は、不満そうに真奥を見返す。

「真奥さん」には頼りにしてもらえました。「魔王サタン」には守られてばかりです」  
今度こそ真奥は呆氣にとられた。

「私、いつだって『真奥さんが全面的に何かを任せられる人間』でいたいですから」

真奥自身にその自覚は無かったのだが、どうやら先日木崎に説教を食らった後の真奥の一言は、まるで魔術のように千穂の心に力を与えてしまっていたらしい。

「……俺は……」

一人の人間からのあまりに献身的な気持ちに、どう答えればいいのかのさう。真奥がなんら回答を用意できないままあいまいな声を出そうとした瞬間、

「あ、芦屋さんだ」

千穂が全く別の方向に意識を向けた。

見ると笹塚駅の構内から、丁度芦屋が出てくるところだった。見慣れないキャスター付きのトランクを持っているが、それは今後使うものだからいいとしても、何故それを持って駅から出てくるかが謎だ。

千穂の声で芦屋もこちらに気づいたようで、軽く手を挙げて駆け寄ってくる。

「お帰りなさいませ魔王様。佐々木さんも一緒にでしたか」

「……おう」

「お店で会ったんです。それ、銚子ちやうしに持ってくんですか？ 結構いいの買いましたね」  
千穂は芦屋あしやが引いているトランクを見て言う。

「住み込みのための物資はこちらの持ち出しですから、少し悩んだのですが……」

芦屋は苦悩をにじませた顔で、真新しく大きい、悪魔三人分の着替や下着、タオル他生活物資を詰め込めるだけの大容量キャスター付きトランクに手を置いた。

「アパートに物を置けない以上通帳や印鑑など貴重品も持ち歩くことになりますし、先方のセキュリティ事情が分からない以上、施錠せじようができて頑丈なものが良いかと思ひまして」

「そっか。それはそうかもしれないですね」

「電車で買いに行ったのか？」

「はい。やはり都心の方が品が揃そろっていますし、明日は長距離移動をしようと思うと、今日は体力を温存せねばと思ひまして。後は駅の公衆電話を使いたかったのです」

日頃は新宿しんじゅくまでの徒歩三十分弱の道を、片道百二十円の運賃をケチって歩く芦屋である。だが、盛夏の太陽の下、延々キャスター付きトランクを引きずるのは地味に体力を削られる。

それ以外にも、ビーチサンダルや予備の衣類などの買い物も多かったようで、さすがに往復一駅分の交通費を咎とがめるような真奥ではない。

やはりなんとなく芦屋の連絡相手が気になる真奥ではあったが、そこは如何いかに魔王とはいえ、部下のプライバシーまで詮索する権利は無いのだ。

芦屋は基本的に隠し事をする性格ではないので、本当に彼にとっては必要だが、大勢には影響の無い電話なのだろう。

真奥はそう自己完結して、真新しいトランクに目をやる。タグも付きつばなしたが、見ると空港の荷物検査でオート開錠できる形式のものらしい。

「本当に良さそうなの買ったな」

「いずれは魔力を取り戻すために海外に渡ることも無いとも限りません。その時のための投資と思うことにしました」

「ああ、世界征服のためですね」

一つ大陸を制覇した大悪魔に対して、これほど気軽に世界征服という熟語を使う人間もそうはいないだろう。芦屋は芦屋で、

「そういうことです。そうだ、佐々木さんには目頃お世話になっていますから、お土産は是非期待しててください。銃子は日本でも有数の漁港だということですから」

などと女子高生相手にいい顔をするものだから、「世界征服」の持つ重みがヘリウムガスより軽くなる。

「ありがとう……ございます」

世界征服の言葉の重みとは裏腹に、千穂の心は重く沈む。当たり前のことなのだが芦屋の中では、千穂は銃子行きの勘定には入っていない。

だがふとその時、真奥達が銚子に行くなら、絶対に後を追うような人物のことを思い出して、芦屋に質問してみる。

「……そう言えば世界征服で思い出しましたけど、遊佐さんと鈴乃さんは今回の銚子行き、なんて言ってるんですか？」

スッ飛んで行つた『世界征服』の重みを確かめるように、真奥と芦屋は軽く目を合わせる。

「そう言えば珍しくうるさいことを言つてきませんね。逃げると思ひ違ひされて地の果てまで追いかけるなどと、世迷い言を吐くとばかり思つていましたか」

「恵美は大家にも会つたことあんだから、俺らも大家の関係者ンとこなら大人しくしてると思つたんじゃないの？ でも漆原は昨夜、ニート根性を責め立てられて泣かされたとか言つてたしな。今回妙に、俺達の職場確保に協力的というか、好意的だったんだよなあ」

「で、ですよね……私も、遊佐さんが妙に真奥さんに優しいとは思つてましたけど……」

恵美に限って、まさか真奥達がみすみす遠くに行くのを放置するはずはないが、それにしては随分悠長に構えている気がする。

先ほどのサリエルの不穏な情報も、千穂にとつては不安の種だ。真奥と恵美がお互いの状況を把握していないと、アラス・ラムスに危険が及ぶことになりかねない。

かと言つてその情報を伝えたところで、恵美が積極的に真奥と協力体制を取るなどということとは、残念ながら全く想像ができない。

——ま、行くならきちんとご両親の許可を取りなさい。結構遠いから——

——通すべき筋を通して、世間様に恥ずかしいことさえしなければ、別に私は何も言いませんよ——

二人の大人の声が、頭の中でこだまする。

千穂は、意を決して携帯電話を取り出した。

おそらくこれは、人生初のわがままだ。親に対し、嘘をつかずに詭弁を弄するという不誠実を働くことになる。

それでも。

大切な人達が遠くに行ってしまう危険を、少しでも減らしたい。

千穂は真奥達に目礼して少し距離を取ると、家の電話をコールする。

『もしもし千穂？ どうしたのー？』

ナンバーディスプレイがついている固定電話なので、母はすぐに千穂だと分かったらしい。

千穂は、はやる心臓を抑えて大きく息を吸った。

『お母さん……』

『何？』

『銚子電鉄を見に行きたいの。遊佐さんと鈴乃さんと、一緒に日帰りで行っていい？』

勇者、魔王の職場の大改造に協力する



「わあっ！ 可愛い電車！」

JR総武本線の終点、銚子駅で、千穂は快哉を上げた。

笹塚から新宿、錦糸町、千葉と慣れぬ乗り換えをこなし、千葉から更に総武本線で各駅停車で東征すること三時間と少し。

銚子駅のJR線ホームの端にひっそりと設えられている銚子電気鉄道のホームにやってきた電車は、真奥と青屋と漆原が見たことのない形状をしていた。

日本にやってきて二年と経たない悪魔達にとって、ステンレス製ボディの四ドアロングシートの車両が連なるものこそ電車である、という固定観念があった。

だが、今日の前にやってきた「電車」は悪魔達の都市型固定観念を一発で吹き飛ばしてしまつた。

流体力学など全く考慮されていない完全直方体のボディは下半分がくすんだ赤。上半分がすすけた黒で染められ、ヘッドライトよろしく、車体の上部中央に一つだけ、丸いライトが付いている。一両編成なのに、線路を渡るその音がやたらと重い。

今まで乗ってきた総武本線のステンレス車両が未来の鉄道に見えるほどだ。

有体に言つて、古いのである。やがてゆっくりとホームに進入してきたのだが、ブレーキ音も聞いたことのない重々しい金属音だ。

「これ本当に電車なの？」

漆原は開口一番そんな失礼なことを言い出して、千穂から白い目で見られる。

今までの常識が全く通用しない鉄道の登場に真奥は一瞬思考が停止しかけたが、ふと、周囲が妙に盛り上がっていることに気づいて周りを見回した。

真奥にすら分かる、その尋常でない旧型車両を、誰もが笑顔で見ているのである。

洗い、懐かしい、レトロだ、来た甲斐があった。聞こえてくるのはそんな感嘆と快哉。皆それぞれにデジカメや携帯電話を構えて、その電車を撮影しはじめる。

「まあ、あなたたちには分からないでしょうね。こういうノスタルジーは」

「……俺達と日本生活歴が大して変わらないクセに何を言い出してんだデメエは」

後ろからかけられた嘲笑の言葉に、真奥は苦々しい顔で振り返った。

そこにはアラス・ラムスを抱っこした恵美と、日傘を差した鈴乃がいた。

「ふむ、銚子電鉄デハー〇〇一型。一九五〇年から運行しているようだ。最も私が最初に調べた資料では、このような電車は当時日本中を走っていたのだから」

鈴乃は駅で無料配布しているパンフレットを見ながら言う。

いつも思うが、鈴乃は一体どこでどんな資料をどのようにして調べたのだろうか。

「ところで、切符はどこで買うんだ？」

銚子電鉄のホームはJ R線ホームの延長上にあり、乗り換え改札のような場所もなく、途中に小さなICカード読み取り機があるだけだ。

だが新宿から来た真奥達は、全員緑の窓口で購入した切符しか持っていない。

「ふむ、車両内かホームにいる乗務員から購入するようだ。あの御仁ではないか？ 検札鉄のようなものを持っているぞ」

「じ、人力？」

「何を驚いている。ほんの数十年前まで、新宿や池袋や品川ですら有人改札だったのだぞ」かつての日本、特に昭和を語る鈴乃は、妙にイキイキとしている。

最初に彼女が調べた世相というのがおそらく、ターミナル駅が全て有人改札だった時代あたりなのだろうが、残念ながらいつものメンバーで唯一の日本人である千穂は平成生まれ。

知識でしかその頃のことを知りはいまい。もちろん真奥や惠美など言わずもがなである。

「しかし、そこにだってICカード読み取り機があるんだし、なんだってそんな不便で手間のかかること……」

「バカね。その不便さと手間がかかるのが売りなんじゃない」

「はあ？」

首を傾げる真奥を差し置いて、惠美はアラス・ラムスと一緒に駅員に近づいていく。

「大人一枚、子供一枚を犬吠まで……あ、でも切符欲しがっちゃうんで……」

どうやら赤ん坊は無料と説明を受けているらしいのだが、アラス・ラムスはもう期待で瞳をいっぱいにして、駅員が提げている使い込まれた鞆を凝視している。

そして檢札スタンプを押されて手渡された切符を、アラス・ラムスは満面の笑みで受け取ると思ひ切り手の中で握りしめてしまう。

「ありあとこじやます！」

思はず駅員も顔をほころばせるほどの喜びようのアラス・ラムス。それを見て、

「つまり、ああいうことだ。自動改札では、ああはいかないだろう？」

「……ん、まあな」

鈴乃に言われて黙然としないながらも納得する真奥。

芦屋が恵美に做うようにして切符を購入し、千穂はデジカメでの電車の撮影に余念がない。

漆原は暑さでノックダウンして駅舎のベンチでぐったりしている。

「にしたって……本当にここまでついてくるとは思わなかったぞ」

真奥は肩を煉めて、鈴乃を見下ろす。日傘の下から見返してくる顔は、余裕の笑みだ。

「何度も言っているだろう。私達は別に貴様についてきたわけではない。旅行の方角がたまたま一緒だったただけだ」

白々しいにも程がある。

笹塚を出発した数時間前のこと。

朝の八時の笹塚駅に、息を弾ませた千穂が現れた。

最初は見送りに来てくれたのかと思った真奥。だが千穂はかなり大きなドラムバッグを抱え

ていたため、たまたま彼女もどこか遠出する用事があるのだろうと考え直した。

いくら千穂の両親が真奥のことを信用しているからといって、高校二年生の娘が男所帯の住み込みバイトに帯同するのを許可するはずはないという常識的観点から、真奥はこの期に及んで、千穂が銚子を目的地にしているなどとは全く考えなかった。

「ちーちゃんもどつか行くのか？ 新宿までは一緒かな」

「いえ、もうちょつと先まで一緒です」

一緒に自動改札を通り駅に入った千穂は、朗らかに答える。

そして三十秒もしないうちに、真奥は千穂の態度の理由に気づくことになる。

「おはよう千穂ちゃん。なに、その後ろの三人は」

「待ちかねたぞ千穂殿。魔王達と行き会ったか、偶然だな」

「ばばー！ ちーねーちゃー」

笹塚駅新宿方面行のホームのベンチに、恵美と鈴乃とアラス・ラムスが、並んで腰かけていたのである。

これには真奥も芦屋も漆原も驚いて、言葉がうまく出てこない。

真奥達は早朝に出たということもあって、隣の部屋の鈴乃に挨拶などはしてこなかった。

これは恵美と鈴乃が示し合わせて待ち伏せていたとは思えない。千穂だけに挨拶をして、さも意外そうに真奥達を見る顔は、嫌がらせを楽しんでいるようにしか見えなかった。

二人の前には、中サイズのキャリー付きトランク。間違いない。絶対ついてくる気だ。

「新宿までじゃなくて、銚子まで一緒です。でも、大丈夫ですよ。きちんとお母さんの許可は取ってますから」

千穂は、それが先ほどの答え、と言わんばかりに堂々と宣言する。

三人の悪魔は開いた口が塞がらない。どこの世界にそんなことを許す親がいると言うのだ。

「あなた、何か勘違いしてない？」

答えが見つからない真奥達を、ベンチの恵美がにやにやしながら見上げる。

「銚子って言っても、千穂ちゃんはおなた達についていくわけじゃないわ。私達と出かけるだけよ」

「……なんじやそりや」

詭弁にも程がある。

「大体お前、仕事はどうしたんだよ。二週間も銚子にいる気か？」

恵美に尋ねる真奥に、恵美は余裕の表情で返事をする。

「ベルが引っ越してくるから、前からお休み取ってたのよ。でも、二週間って何かしら？ 私達は女の子三人でローカル鉄道の見学に行くだけよ？ どうしてそんな長い間いると思ったわけ？ 何か後ろめたいことでもあるの？」

真奥は底意地の悪い言い方をする恵美を忌々しげに睨みつけるが、

「あのねあのねばば！」

はしゃいだ様子のアラス・ラムスが視界を塞ぎ、結局強く出られない。

「ちばのざぶーんいくの！」

全てが確定した瞬間だった。真奥はがつくり項垂れる。

それから約一時間の後……。

笹塚を出発した真奥と千穂達が錦糸町駅で東京スカイツリーの威容を見上げつつ総武快速線に乗り換え、終点千葉駅に到着し、総武本線銚子行の到着を待つ間ホームで駅弁を食べ、銚子行き列車に乗り込んで、終点近くの旭市を通り過ぎる頃。

「ちーねーちゃ、ふーしゃー！ ふーしゃー！」

千穂の膝の上に、アラス・ラムスがいた。

当然、恵美も鈴乃もいて四人でボックス席を占領し、何食わね顔で千穂とお菓子などを分け合っている。通路を挟んだ反対側のボックス席では三人の悪魔が、四人目の席に大柄なサラリーマンに遠慮なく座られていて、物理的にも精神的にも居心地悪そうにしていた。

外を眺めていたアラス・ラムスは、銚子も近くなった頃に突如現れた、巨大な風力発電施設の風車を見て大はしゃぎである。

「アラス・ラムスちゃんすごいねー。風車分かるんだー」

「にひ、わかるー」

アラス・ラムスの目に風車が見えなくなった頃、電車は終点銚子に間もなく到着するアナウンスを流しはじめ、乗客が下車準備を始め出した。

真奥は銚子電鉄のホームで睨み上げてくる鈴乃に弁解じみたことを言う。

「ちーちゃんは元からこの鉄道に興味があるってのは本當みたいだからまあいいとして、お前らはいいい加減グロしろよ。どうせちーちゃんにかこつけて俺達に付きまとう気だろうが」  
対する鈴乃の返事は、まるでこちらの話を聞いておらず完全に決め打ちだった。

「ああ、そうだな。貴様が我らの目の届かぬ所に行けば、何をするか分かったものではない。常に我らの目があると考えろ。笹塚を離れたこの地でも、良識ある行動を期待する」

「お前、日本の俺は良識と誠意が服を着て歩いているような魔王だぞ」

「だが魔王だ」

おっしやる通り。グウの音も出ない。

「その魔王に良識のある判断を期待とか、お前色々間違ってるねえ？」

「ふん。まあこちらでも再三言っている通り、たまたま旅行先がこちらだったというだけの話だ。さあ、私達には構わず動め先に向かうと良い」

「あのな……」

どう考えたって、これは海の家まで追跡してくるとしか思えない。

「魔王様、切符を買って参りました」

と、そこに芦屋が切符を持って帰ってくる。漆原はと言えば、ノロノロとした動作で電車に乗り込んで、車内のシートで再びぐったりしている。どうやら先ほどから、暑さが相当こたえているらしい。

芦屋も漆原も、既に恵美達がついてくることは覚悟しているようで、殊更に聞いたはずもりはないようだった。元々予想していたことではあるし、一番恐ろしい恵美も、仕事の都合上そう長くはいないだろう。

勇者に見張られる日常を、勇者の仕事のスケジュールまで勘案して受け入れてしまっている悪魔達に、悪魔らしい未来はあるのだろうか。

「……なんか、切符って感じがしねえな」

芦屋から手渡されたのは、銚子電鉄の全ての駅名が表記された、手でもぎられた薄い紙の切符だった。その時、

「お兄ちゃん達、銚電初めて？」

「えっ！」

突然声をかけられて、真奥はびっくりと身を震わせる。

いつの間にか傍らに、日よけの帽子をかぶり、買い物袋を提げた老婆が立っていたのだ。

「びっくりしたでしょー古くて。若い人にはねー、馴染みないわよねー」

「あ、いや、その……」

全く見ず知らずの相手なのだが、思い切りフランクに話しかけてくるので対応に困る真奥。  
「でもね、この色が一番人気あるのよ。いろんなところからいろんな車両もらってるから、いろんな形があるのよー。でもこの黒赤が一番人気なのよー。懐かしいって言ってねー」

「懐かしい……ですか」

「私らなんかも毎日見てるからあれだけど、こんな古い車両走っているとこなかなか無いでしょ。デハー〇〇一型は一九五〇年に作られて以降ずっと現役なのよ」

まるで自分の家族を褒めるかのような、どこか誇らしげな様子で老婆は語る。

「何度も存続が危うくなりかけたけど、お兄ちゃん達みたいな若い人たちがいっぱい来てくれて、地元の若い子達がいっぱい力になってくれて、こうしてみんなに好きでいてもらえるのよ。本当ありがとうねえ」

真奥達は特に何かしたわけでもないし、年齢だけで言えば老婆の数倍は行っているのだが、思い出話を語る彼女の感慨に水を差すこともあるまいと、あいまいに笑みを浮かべて相槌を打つ真奥。

「お兄ちゃん達は観光？ 犬吠行くの？」

「あ、そうです。観光というかなんというか……」

「そうよねー、水平線から昇る朝陽はいいわよー？ 私なんか毎朝見てるのに、見るたびに心が洗われるようだもん。ねー、歳取ると無暗に朝早くなっちゃって」

「はあ……」

そう言えば大黒天祢が、大吠から行ける君ヶ浜は、関東で一番早く朝陽を見られる場所であると言っていた。

「あ、大吠行ったらぬれ煎餅ね、ぬれ煎餅、食べて頂戴。とってもおいしいから」

その後、真奥は老婆と発車時刻まで延々話を続けることとなったが、おかげで鈴乃の追及からは逃れることができた。

初めこそ戸惑った真奥だが、老婆は銚子電鉄沿線のことを観光ガイドよろしく色々語ってくれた。途中から千穂や恵美もその輪に参加して、名も知らぬ同士ながら、妙な形で会話の花が咲く。

やがて出発の時間になると、銚子電鉄デハ一〇〇一型はその身の中に悪魔と人間を乗せ、大儀そうに走り出した。

総武本線よりも人口密度が高まった車内だったが、真奥の場所からは運転席と、進行方向の様子がよく見えた。

「わあ！ 木のトンネル！」

千穂がその光景を見てどこかで聞いたことのある快談を上げ、

「これは……ちょっとした冒険気分ですね」

「へえ……」

芦屋と漆原も、思わず感嘆の声を上げる。

盛夏の日差しに照らされて、山の本々が形作る緑のトンネルの中を走っているのである。

線路端には夏の花が咲き、あんなに古く見えた車両なのに、上り坂に差し掛かったときの車体の唸りはまさしく鋼鉄の馬車と呼ぶにふさわしい力強さだった。

小さな踏切に、シンプルな架線、木で出来た電柱。

真奥も芦屋も漆原もかつて体感したことのない、それは文字上の記録でしか知らない『時代』の空気であった。

「風情があつて、いいですね」

芦屋が思わずこぼした感想に、老婆は満面の笑みで頷く。

「でしようでしょう！」

その後老婆は、西海鹿島という無人の駅で降りていった。

「名前も聞きませんでしたね」

西海鹿島の駅を出てから、芦屋がぼつりと言う。

「いいさ、袖振り合うもってやつだ。俺達にとってあの婆さんは、触れられるけど手の中には留められない、時代の空気みたいなもんなんだろ」

「……何言つてゐるの。暑さで気でも狂つたの？」

失礼なことを聞いてくるのは、運転席の窓を微動だにせず凝視しているアラス・ラムスを抱いた恵美だ。その問いに真奥はそれほど怒つた様子もなく答える。

「ああ。ちよつと最近、世界征服の野望について、思うところがあつてな」

「あらそう。諦めて日本に骨埋める氣になつた？」

明らかにほぐらかそうとする真奥の回答に、恵美もそれほど本氣にしていな返事。真奥がそれきり黙つてしまつたので、恵美もそれ以上は特に追及してこなかつた。

電車は西海鹿島、海鹿島、君ヶ浜を過ぎ、ついに真奥達は関東地方最東端の地、犬吠へとたどり着いたのだつた。

「この駅は、少し凝つた作りをしていますね」

荷物を抱えて先頭で降りた芦屋が、汗を拭いながら呟く。

犬吠駅はどことなく南欧風の趣がある白いタイル張りで、さすがにメイン観光地らしくきちんと駅員も配置されている。

真奥が降りた後、次の終点駅外山に向かう電車を撮影する乗客たちを尻目に、真奥達は駅舎内へと入つてゆく。外は盛夏の日差しに満ちているが、茶色いタイル張りの構内は涼しく、落ち着いた雰囲気だつた。

どろどろと他の観光客らと一緒に駅舎に入った真奥達は、右手の売店スペースで煎餅を手焼

きしている婦人がいるのに気づく。

「お、婆ちゃんと言ったぬれ煎餅ってあれか？」

「これです！ 銚子電鉄の救世主！」

真奥が尋ねると、千穂が解説もそこそこに、売店の中に飛び込んでゆく。

「まま、あれなーに、なーに？」

駅のベンチにアラス・ラムスを座らせて、ハンカチで汗を拭っていた真美は、千穂が駆け込んだ方を見て答える。

「おせんべよ、おせんべ。アラス・ラムス、好きでしょ？」

「おせんべい」

おせんべという単語に突然アラス・ラムスは真美の手を離れて真奥と千穂の方へと走っていつてしまう。

「あ、こらアラス・ラムス、転ぶわよ待ちなさい」

「ばば、ちーねーちゃー！ おせんべー！ おせんべたべたいー！」

「んー？ アラス・ラムス、お前ままにおせんべ買ってもらってるのか？ おい、まだ煎餅は早いんじゃないのか」

最後の一言を真美に言う真奥。

「赤ちゃん用のソフトサラダ煎餅よ。もうしつかり噛めるからそれくらいは平気」

「ぬれ煎餅なら、アラス・ラムスちゃんも大丈夫かな？ あ、でもご飯食べられなくなっちゃうかも。お姉ちゃんと半分こしようか？」

千穂（ちほ）かがみ込んで尋ねると、アラス・ラムスは両手を上げて、

「はんぶんこ！」

全力食べたいアビール。

「仕方ねえな。あ、いいよーちゃん、金は恵美（えみ）が出すから」

「そこは「俺（おれ）が出すよ」じゃないわけ？」

恵美の金でアラス・ラムスの機械（きかい）を取ろうとする器の小さすぎる真奥（まおく）に恵美が顔を曇（くも）め、そしてそんな様子を更に鬱々（うつうつ）とした表情で見つめていたのが芦屋（あしや）だった。

「……魔王様！ まずは先方に到着の連絡をお願いします」

完全に觀光気分になっている真奥達をたしなめるように言う。

「あ、そっか。悪い悪い」

真奥は気まずそうにそう答え、携帯電話を取り出して駅の外の広場へと出ていった。

売店のレジ前で、視線の端で真奥が駅から出ていくのを見ていた恵美。

「さてと、千穂ちゃん、ちょっといい？」

小さな声で千穂に呼びかけると、駅舎の片隅まで引っ張ってくる。

「昨日は本当驚いたわよ。よくお母様（おははさま）が許してくださったわね？」

「……すいません、いきなり電話してしまって」

銚子電鉄を見に行く、という詭弁もいいところの頼みを、母は思いのほかあっさり許可してくれた。付き添いの恵美と鈴乃と話をさせること、との条件は付いたが、恵美も驚きつつ、千穂と銚子に行くことを快諾してくれた。

「こっちとしても、魔王を見張るなら千穂ちゃんの安全を確保してからって思ってたから、渡りに船だったわ。それでね」

恵美はにやりとして鈴乃を振り返る。

「千穂殿、これはお母上からの伝言なのだが」

「はい？」

鈴乃はキャリーの中から一枚の紙を取り出す。

「お母上指定のこの宿にチェックインして、私達のどちらかを電話口に出して定時連絡せよとの条件付きで、二泊三日まで許す、だそうだ」

「え？ え？ え？」

千穂は、アラス・ラムスと半分こしたぬれ煎餅を危うく取り落としそうになった。

「これで心置きなく、あいづらがきちんと仕事できるか見てられるでしょ？」

「ど、どうして……」

千穂は、日帰りだけで満足すると決めていたはずだったし、そうするつもりだった。大体

何故、恵美と鈴乃が母からの伝言を持っているのか。

「千穂ちゃんに同伴するんだから、万が一のときにお母様が私と連絡取れないと、ためでしょ？それで連絡先をお教えしたら、後から電話をくださったの」

「親の欲目かもしれませんが、千穂は嘘を言わない、本当によく気の付く子です。真奥さんの行く末を心配しているのもそうでしょうが、真奥さんのお仕事がうまく行かないことで、遊佐さん達もどこか遠くに行ってしまうんじゃないかと心配しているようなんです」

電話口の里穂は、真剣だった。

「千穂が言うならば、そう思うだけの何かがあるのだと思います。千穂は日頃、遊佐さんや鎌月さんのことを、本当に信頼して、大切な人だと思っているようなんです。勝手に申し上げるようですが、千穂の懸念を払拭するのに、お力添えいただければと思います……」

恵美としても、千穂をエンテ・イスラの事情に巻き込んだことに關しては常々申し訳ないと思っていたので里穂の申し出を快諾はしたものの、その後しばらく、三人が泊まる宿の料金を全て持つと言って聞かない里穂と、私が出すいや私が出すの押し問答が続いた。

千穂は、母親にエンテ・イスラのことを話したわけではあるまい。だが「そう思うだけの何か」を千穂が感じたのなら、里穂はそれを全面的に信じてくれるらしい。

恵美が直接会った里穂は、決して放任主義には見えなかった。よほど今まで、円満な親子關係を築いてきたからこそその言葉だろう。

つい先日まで存在も知らず、知ったと思ったら行方不明になってしまい、そもそも人間ではない母を持つ恵美としては、少し羨ましく思う。

「ま、要約すると、結局のところお母様は、千穂ちゃんを全面的に信用してくださってるってことと、後で完全に置いてけぼりになったお父様に、銚子名物のサンマの佃煮をお土産に買ってきたさいってことかしらね。まあ安心して、その時は私達も一緒に行ってあげるから」

「……参っちゃったなあ……お母さんたら」

千穂は、少しだけ目を潤ませてうつむいてしまう。

「それで、なんだったの？ 千穂ちゃんがこんな無茶した理由は。ルシフェルのせいであいつらがクビになるかもしれないってだけじゃないんでしょ？ そうならビデオを見たすぐの段階で決心しても良さそうなものだしね」

千穂は一度だけ鼻をすすると、アラス・ラムスを地面に下ろした。

「……昨日、サリエルさんから聞いたんです。ガブリエルさんがまだアラス・ラムスちゃんを狙うの諦めてないって」

唐突に出てきたガブリエルの名に、恵美と鈴乃の顔にかすかに動揺が走る。

「この前はなんとかなったかもしれないですけど、真奥さんも遊佐さんもアラス・ラムスちゃんも、何度も危ない目に遭って、でも一人じゃなかったから、なんとかあったじゃないですか。もちろん真奥さんがエンテ・イスラでやったことを許せて言うんじゃないです。でも、本

当に危なくなつたとき、お二人が近くにいた方が、ずっと安全だと思つて、でも……今回遊佐さん、真奥さんが遠くに行つちやうのをどこか喜んでたような気がしてそれで……」

「ああ……」

恵美は思わず頷いた。

過去数度の共同戦線は、全てやむを得ず、なし崩しの形で張つたものだ。

確かに真奥や芦屋や漆原がいたからこそ、恵美が助かつたことは多くあつた。だが恵美から積極的に彼らに助けを求めたわけでもない。

今回は真奥達が、あの謎の大家、志波美輝の関係者の所に行くということで特に彼らを必要以上に追跡する姿勢を見せなかつたが、大家を知らない千穂が、そのことを不審に思つてしまつたのだろう。

「真奥さんも遊佐さんも、鈴乃さん芦屋さん漆原さん、皆が笹塚の……私の近くにいてくれるのは、本当に些細な偶然が重なつたからで、ちよつとでもどこかのバランスが崩れたら、みんななくなつちやうつて分かつたら、怖くなつたんです。自惚れ、ですけどね。私が頑張れば、そのバランスを保てるんじゃないかなつて思つちやつて……」

千穂は、駅のベンチに座り込んで何やらアイスらしきカップを手にしている芦屋と漆原を遠目に見ながら言う。

「いつかはエンテ・イスラに帰つて決着をつけるときが来るのかもしれないけどでも……その

決着をつけるために、今は、必要なときだけでいいんです。力を合わせてほしいんです」

千穂は千穂で、真奥恋しというだけでここに来たわけでは決してない。

「真奥さんがここまで気づいたかは分かりません。でも、サリエルさんこうも言っていました。

『遊佐さんの聖剣の場所は分かってた』って。遊佐さんを狙う人たちは、もう遊佐さんがどこにいるか襲ってくる前から把握してる。もし真奥さんが餓子に行っていない隙にガブリエルさんが次の手を打ってきたら……」

ガブリエルとの一対一の戦いは、恵美が勝った。だが次も、彼が正面から単騎で戦いを挑んでくるとは限らないのである。

千穂の言うことは、千穂の見てきたことは、全て真実だ。

恵美も真奥も、勇者だ魔王だと言いながら、日本で起こったトラブルを自分一人だけの力で解決できたことなど一度も無かった。

むしろ力に慢心し、千穂や梨香を始めとした多くの日本人を自覚なしに巻き込んだことの方が圧倒的に多い。

「……千穂殿は、本当に聡明だな」

鈴乃は、感心したように呟く。

「エミリアの最終目標は、どのような形であれ魔王との決着をつけること。この日本でエミリアと魔王のどちらが欠けても、決着がつかなくなることは変わりない。一番に達せねばなら

ない目的のために今立ち向かうべき当面の敵を、見誤ってはならない。……そういうことだろう？ 千穂殿」

千穂は小さく頷いた。

かつて鈴乃は、立ち向かうべき敵を見誤り平和への道を阻害する者達を排除する立場にあつた。排除という手段を取らざるを得ないことが嫌で、苦しくて、本当の敵は誰なのだと常に叫び続けていた。

そして今鈴乃の、恵美の、倒すべき敵は、魔王であつて魔王でない。

人間世界の当たり前前の正義を包み隠そうとする、正義の面をかぶった何者かだ。

そしてもしかしたら、勇者や魔王よりも強大な力を持っているかもしれない何者か達は、かつて一度たりとも、人間世界の危機に手を差し伸べたことなどなかった連中なのだ。

「皆とずっと仲良くしていたっていうのは、エンテ・イスラのことを何も知らない私のわがままです……でも、今はアラス・ラムスちゃんがあります。皆が大好きで仕方ないアラス・ラムスちゃんがいるんです。この子が悲しむことにだけは、なつてはしくない」

「おせんべおいしいよ？」

アラス・ラムスの無邪気な答えに、千穂は小さく微笑んだ。

「千穂ちゃん」

「はい……わ」

そんな千穂を、恵美は優しく抱きしめた。

「お母様が信頼なさるはずだわ。こんな平和な国に生まれたのに、どこからそんな覚悟が湧いてくるのかしらね」

恵美は安心させるように、その背を柔らかく叩く。

「いいわ。千穂ちゃんのお感に乗ってあげるわよ。この子が大事なものは私も一緒だしね」

恵美は千穂を解放すると、足元のアラス・ラムスの頭に手を乗せる。

「ただ誤解しないでほしいんだけど、魔王と仲良くしたり一緒にいたりお近づきになるつもりなんかこれっぽっちも無いわ」

恵美は外で汗を拭いながら電話をしている真奥を全力で指差す。

「本当に、どーーーーーしても私一人じゃどうにもならない事態が起きて、他に打つ手が無いって確信するほどイザって言うときだけ、助けを求めるんじゃないやなくて骨の髄まで利用しつくしてやるってことは約束するわ。それで、使い終わったら生ごみの日に出してやる」

恵美のやや芝居がかった宣言に、千穂は満面の笑顔で、頭を下げた。

「ごめんなさい。ありがとうございます」

「とりあえず、今回は二泊三日、犬吠で様子を見つつ羽を伸ばしましょう」

「そうだな。折角遠くまで来て、いつも通り悪魔の貧乏生活を見守るだけでは面白くない」  
そして、鈴乃の苦笑交じりの眩きが横となって、緊迫していた空気を打ち壊した。

丁度そこに真奥が外から帰ってきて、外気温との差に大きく息を吐いた。  
女性陣が深刻な話し合いをしていたことなど知りもしない真奥は、

「あ！ お前ら何美味そうなんもん食ってんだよ！」

芦屋と漆原が食べているアイスのカップのようなものを見て非難の声を上げる。

「ぬれ煎餅アイス。結構美味いよ」

「どんな味なのかという好奇心に抗いきれなくてつい……魔王様も召し上がりますか？」

どうもこちらに注意を払ってこないと思ったら、悪魔二人は暑さにやられてアイスを食べることに集中していたらしい。

「食うに決まってるだろ！」

真奥は小銭を握って売店に駆け込む。そんな有様を見ながら、

「ぬれ煎餅アイスなんて訳の分からないものの誘惑に負けるような悪魔に力を借りないと、自分の身も守れないなんて、ちよつと複雑」

恵美は不満げに顔をゆがめる。

「でもぬれ煎餅アイス、凄くおいしいらしいですよ？ 夏の新名物らしいです」

「千穂殿千穂殿、そういうことじゃない」

真奥がアイスを買ってきてその不思議な食感と味わいに舌鼓を打っている最中、

「……どんな人なんだろうね、大黒さん、だっけ？」

漆原が不用意に発した言葉に、真奥と芦屋は身を強張らせた。

「お前なあ、努めて考えないようにしてんだから、そういうこと言うなよ」

「だって怖いじゃん」 「アノシャシン」の人の姪おひなんだろう」

「で、電話の声はそこそ若い女だったぞ？」

「しかし、鬼が出ようと蛇へびが出ようと、今さら逃げ出すわけにもいきません。人事を尽くして天命を待つのみです」

「まだ仕事場も見てねえのに、どうやって人事尽くすんだよ……っ」と

その時、真奥の携帯に着信があった。

思わず顔を見合わせる三人。真奥は一拍置いて電話に出る。

「もしもし」

「あ、真奥さん？ 今駅前にいるから。白いバン」

いよいよご対面である。

三人の大悪魔は何が起こってもいいよう、一度深呼吸して精神を整えてから、夏の日差しが降り注ぐ大吠おほび駅前駅前の広場に出た。

千穂達もそれに続いて表の駅前のタイル広場に出る。

そこには白を通り越してクリーム色になりつつある、使い込まれたロングタイプの業務用バンが停まっていた。

意を決して近づくと、運転席の人物がこちらに気づいたようだ。シートベルトを外すような仕草をして、運転席から下りてくる。

その人物の全身が陽光に照らされたとき、真奥も戸屋も漆原も恵美も、思わず目を丸くした。

「真奥さん？」

「あ、はい、そうです。えっと、大黒さんですよね」

「そうよー、遠い所までありがとうね、ようこそ大吠に！」

ただ一言、美人であつた。

年齢は二十代後半だろうか。

長い黒髪を無造作に結び、黒いＴシャツに使い込まれた緑色の前掛け、擦り切れたジーパンにサンダルという大変にラフな姿なのに、木崎と張り合うほど見事なプロポーションの持ち主であると分かる。

顔は完全すっぱんだが、意思の強そうな整った眉と瞳が、健康的に日焼けした肌に見事にマッチし、精悍な戦士の趣すら感じさせる。

本当にこの女性が、あの大家の姪であるという大黒天掾なのだろうか。

志波美輝との共通点など、脊椎動物の雌性体であること以外どこにも存在しない。

「似てないと思つたっしょ？」



そんなに長いことぼんやりしていたらうか。大黒天祿おほくろあまなねが試すような笑みを浮かべてこちらを見てくるので、真奥まおくは我に返って慌あわてて首を……。

「えっと……」

縦横どちらに振ろうか迷った。

年頃の女性に対して、『あの大家に似てる』と言っていいのかどうか、真剣に悩んでしまっただからだ。

「あっはっはー ごめんごめん、真奥さんの立場じゃどちらとも言えないよねー」

「は、はあ……」

「ミキティおばさんが化粧落とすと、結構似てるんだよ。若い頃の写真なんか本当私と瓜二つなんだから」

それが真実だとしたら、時の流れとは実に残酷げんこくである。

正直な話、あの大家が化粧を落とした若い頃を想像するより、六千五百万年前に絶滅した恐竜の皮膚の色を想像するほうが遥はるかかに容易やさいと言わざるを得ない。

「ま、とにかく私が海の家『大黒屋』の即席店長、大黒天祿です、よろしくね」

「あ、はい、えっと、真奥貞夫まおくさだおと言います」

「芦屋四郎あしやしろうです。この度はお世話になります」

「……漆原半蔵うるははんざう」

真奥に続き、芦屋は背筋をしゃんと伸ばして一礼。対して漆原は、先ほどまでテンションがそこそこ高かったくせに、妙に小声でぶつきらばうに自分の名を名乗っただけだ。

「芦屋さんに漆原さん……それに……」

大黒天称は、真奥達の後ろにいる女性陣に目を丸くした。

「何か、最初に聞いていたより随分大勢だね」

「いやあのですね、お世話になるのは男三人だけで、あとはなんと言うか、勝手についてきただけで……そ、そういやちーちゃんも恵美も鈴乃も、結局どこまでついてくる気だよー」

大勢で押しかけて迷惑がられて、アルバイトの件まで無しにされてはたまったものではない。慌てて言い訳する真奥だが、

「真奥さんの後輩で、佐々木千穂と言います！ 観光のついでに、真奥さん達の働くお店を見てみたくて来ましたー」

千穂がそんな真奥を制してストレートに来訪理由を伝え、べこりとお辞儀。

「おーいちーちゃん。聞いてるかー俺の話ー」

「録月鈴乃と言う。彼らとは……まあその、隣人だ」

「遊佐です。この子は、アラス・ラムス」

真奥に構わず、鈴乃と遊佐もそれぞれ挨拶。

二人が千穂の目的を否定してくれるとばかり思っていたが、全くその気配も無い。

ちなみに六人の間では、アラス・ラムスを人に紹介するとき、ヘタに名をごまかさないという取り決めが為されていた。真奥や恵美のような名前を使ったところで、本人が理解できないからである。

実際、アラス・ラムスの容貌は日本人離れしているので、その名を不審がられたことはまだない。

「あれまあ、随分とバリエーション豊かな綺麗所を引き連れて。所持持ちなのは誰？」  
不頼な女性陣にも特に迷惑がる様子も見せない天祢の言葉に、漆原が真奥を、千穂と鈴乃が恵美を指差し、芦屋は明後日の方向を向いた。

「おいっ—」

真奥と恵美の抗議が全力で唱和する。

「知り合いに良いように使われちゃうのも観光地に家や職場がある奴の宿命ってやつよ。折角来たんだから、うちの店のブレオーブンにでも付き合ってもらおっかな？ 私の目が届く範囲なら海で泳いでもらってもいいし、銚子の見どころも教えてやれるしそれに……」

天祢は、恵美にちらりと流し目を送る。

「やつぱりダンナの職場というのは、気になるもんでしょう。もう真奥さんたら、こんな可愛い奥さんいるのに、電話口じゃ独り身だとか言い出すんだぜ!?」

「だ、だから違いますって!!」

自分の使命や千穂の手前、真奥の仕事場を知っておきたいのはやまやまだが、夫婦扱いされてはたまったものではない。

心の底から全力で否定する恵美だが、天祢は取り合わなかった。

漆原以外の全員が、思わず恵美と千穂を見るが、恵美は不機嫌そうに顔をしかめているだけ、千穂はどういうわけか普通の笑顔（スマイル）を浮かべている。

「ま、こんなクソ暑いとこで立ち話もなんだから車乗りなよ。お嬢さん達もととりあえずどうぞ。あ、今チャイルドシート出すね」

まるで子供の存在をあらかじめ知っていたかのように、天祢はチャイルドシートを貨物スペースから取り出し、設置可能な助手席に手際良く設置してゆく。

六人は思い思いの表情で顔を見合わせながら、大型のワゴンに乗り込んでゆく。

助手席がアラス・ラムスなので、二列目三人席に女性三人。その後ろに、窮屈（きゆうくつ）そうに男三人が乗ることになった。

「ほんじゃ、赤ちゃんいるから安全運転で行くぜい！」

最後に全員分のトランクを貨物スペースに放り込んだ天祢がそう宣言し、時代を経た音を出すセルモーターがエンジンを唸（うな）らせ、いい加減サスペンションが堅くなった車は大吠（おほいけ）駅の広場を出て広い道に出た。

やたら近隣の宿泊施設の存在をアピールした看板の集合体が目に入る。千葉に入って未だ一

度も海を目にしていな<sup>い</sup>真奥<sup>まおく</sup>達<sup>たち</sup>が、天祢<sup>あまね</sup>の言う通り五分程度で視界は急速に開けた。海岸線<sup>かいがんせん</sup>を走る道路に出た瞬間<sup>しゆんくわん</sup>、右側に太平洋が突然出現したのだ。

「わあ！」

千穂<sup>ちほ</sup>が歓声<sup>かんせい</sup>を上げ、

「こっちの海は初めて見るけど……こんなに青いものなのね」

恵美<sup>けいみ</sup>も小さな声でそう言つてため息をつく。エンテ・イスラで世界中を旅した恵美も、目の前に広がる快晴の太平洋が誇る美しい青は見たことがなかった。

「この深い青一色の美しさは、我々の故郷でもなかなかお目にかかれんな」

鈴乃<sup>すずの</sup>も感慨<sup>かいがい</sup>深げに呟<sup>つぶや</sup>く。

一応恵美も鈴乃も、感嘆<sup>かんたん</sup>を漏<sup>も</sup>らしつつ天祢の耳を意識して声を出すが、

「まま、あお！ あおいっぱい！ いっぱいけせど！」

アラス・ラムスも見たことのない光景に大はしゃぎで、青色<sup>せいしょく</sup>を司<sup>つかさど</sup>るセフィラの名を口走<sup>くそう</sup>つたりしている。

一瞬<sup>いつしゆん</sup>ヒヤリとする真奥<sup>まおく</sup>だが、何も知らない天祢にその意味が分かるはずもない。

「ここが君ヶ浜<sup>きみがは</sup>海岸<sup>かいがん</sup>。ちよつと右後ろ見てみ。岬<sup>みさき</sup>の上にある白いのが大吹埴<sup>おほはね</sup>灯台<sup>とうだい</sup>だよ」

天祢の言う方向を見ると、そこにはなかなか峻峻<sup>しゅんしゅん</sup>な崖<sup>がき</sup>を持つ岬と、凜<sup>りん</sup>と立つ白亜<sup>はくあ</sup>の灯台が、抜けるような青空を背景に巨大な生き物のように海を見つめていた。

「あれ、岬の手前にあるの……」

「お、見つけた？　そそ、あれが大黒屋だよ」

君々浜海岸という名らしい広い浜の丁度真ん中あたりにその建物はあった。

一見すると古い平屋建ての民家に見える。

真奥達はその建物を認めた瞬間、天祢は道を外れて浜の駐車場らしい広場に入ってしまった。

「なんか、思ったより人がいないですね？」

助手席から表を見ながら、芦屋が尋ねる。

忙しいと言っていたはずだが、天祢が車を停めた広場には車の数がまばらにあるだけだ。

書店などの観光雑誌で海水浴場の写真を見たことがあるが、砂浜を埋め尽くさんばかりに人がある光景ばかりを想像していただけに、拍子抜けしてしまう。

シートベルトを外しながら天祢はエンジンを切る。

「浜が開かれるのは明日からなんだ。今はまだ、サーファーさんくらいしかいないんだよ」

海水浴場の詳しいシステムなど知らない真奥は、それ以上考えることなく納得する。

「明日……ですか？」

が、千穂は何かまた引かかったように、額に手を当てて沖の方を眺める。

「サーファーさん……ああ、ほんとだ。ちよつと沖の方に……」

千穂も窓から海岸を見やるが、ふと波の合間に見え隠れするものに気がつき、首を傾げた。

「佐々木さん？ どうされたのですか？」

一瞬の違和感は、芦屋からかけられた声で思考の渦に潜っていつてしまう。

「……いえ、なんでもありません」

結局違和感が何を意味するのか分からず、とりあえず意識の隅に追いやった。

「ここは散歩コースとしても人気があるし、灯台や朝のご来光目当てに来る人なんか海開きの前から結構来たりするんだよ」

なるほど、言われれば犬を連れて散歩したり、レジャーシートを敷いて肌を焼いている人の姿も散見された。

「さ、とりあえず荷物を置いてもらわないとね。先に離れの方、案内するわ」

少し坂になっている浜を下って先ほど見えた家屋に近づく。

思い思いの仕草で車から降りた面々は、天称に先導され、建物の裏手の、やや古びた木のドアの前に来る。

「布団以外はなんも無いけど、ま、仕事上がつたらくつろいでちようだいな」

そう言って開かれたドアの向こう側を見て、真奥と芦屋と漆原と、そして鈴乃が目を丸くした。

「……なんか、うちよりいいところじゃない？」

漆原が全員を代表して思わずそう呟いたのも無理はない。

広さは八畳程度。押入れがあつて、奥には魔王城のものと同規模のキッチンスペース。広い窓から差し込む日光が室内を明るく照らしているのに、この部屋はとても涼しい。

「僕、ここんちに引き籠りたい」

漆原の目は、天井近くのある一点に釘付けになっていた。

エアコンだ。

エアコンがあるのだ。

旧型だが、そこで唖っているのは間違ひなく冷房稼働中のエアコンであつた。

「海沿いだから湿気でもうしても畳が波打っちゃうんだけど、それだけは勘弁してね」  
そんなことは、三人の大悪魔にとってエアコンの存在の前では瑣末なことではない。

大体、布団以外はなんも無い、と言うが、魔王城にはその布団だって無いのだ。

思わず居住環境に誘惑されてマグロナルド爆遷を一時忘れそうになった真奥だが、

「しかし、冬になれば相当の寒さだと思ふぞ」

漆原に芦屋が冷静な突っ込みを入れ、真奥も人知れず我に返る。

そう、海の家は季節営業。夏を過ぎたらここに彼らの仕事はないのだ。

「気に入ってもらえるなら何よりだよ。私は夜は自分ちに帰っちゃうから、夜の戸締りとかはきちんとよろしくね」

来たばかりの下宿人を残して店主が帰るとは、また随分信頼されたものである。それだけ大

家の志波の信頼も厚いということなのだろう。

「それで、来ていきなりで悪いんだけど、荷物置いたら表来てくんないかな。早速なんだけど、仕事があるんだ」

仕事という言葉に顔を曇めたのは漆原一人であり、彼の変化を誰よりも敏感に捉えた者がいた。

「私が荷物解いておきますよ。皆さんお仕事頑張ってください」

太陽のような満面の笑みで言いながら半ば強引に芦屋の手からトランクを奪い取る千穂は、一瞬だけ真奥を振り返って小さくアイコンタクト。

千穂の気遣いに感謝しつつ真奥は頷いて、なんの申し合わせも無く、芦屋と二人で漆原を羽交い絞めにする。

「ちょ、おい！ まだ何も言ってないだろ!!」

真奥と芦屋は抜群のチームワークを発揮して、漆原の抗議の声を無視し引っ立てた。

天称はそれについて一切コメントせず、また先頭に立って表の浜へと歩いていく。

恵美とアラス・ラムスと鈴乃もとりあえずそれに続いた。

天称は「離れ」と言ったが、建物の棟自体は申し訳程度の渡り廊下で接続されており、店舗スペースにも裏から行けるようになっていた。

新しい職場というのは足を踏み入れるだけで色々な感情が胸の中で渦巻くものである。

真奥も声屋も、それなりに緊張と期待を胸に抱いて新しい戦場の正面に立つ。

そしてその感情の渦は、店の外観を一目見るなり一気にしぼんでしまった。

「……………え？」

絶句するはかなかった。

木造平屋建ての海の家「大黒屋」は、店舗スペースはそこそこ広がった。自転車屋の広瀬の

店から自転車全てを取っ払って二倍に拡張したらこれくらいのは広さではないだろうか。

だがそのスペースは、全く掃除が行き届いておらず埃だらけになっていた。

浜に少し張り出した庵のような部分があり、経年劣化でささくれているという意味で時代を感じさせる、あまり腰かけたくない木造のベンチとテーブルが設えられている。

細いドアがたくさん連なっている場所は、水道設備らしきものが見えるので、シャワー室か何かなのだらう。十分百円、といういつ書いたのか分からない文字が潮風に錆びていた。

トイレが店舗内の水洗式なのは最低限救いだ、が、年季の入ったコインロッカーは正常稼働するのか大変不安である。

店の顔である看板は長年の風雨にさらされているせいか錆だらけ、建物の古さは仕方ないにしても、背もたれの無い椅子は天板のスポンジが破れて露出していたり、真鍮製のドリンクサーバーと思しきパイプにはびっしりと緑青が浮いている。

店のレジの近くにタワーターミナル型のドリンククーラーが鎮座しているのだが、中身はス

カスカ。なまじコラ・コーラの缶が数本入っているだけに、余計に物さびしさを際立たせている。焼きそばなどを作るための鉄板が錆びていないのは、ギリギリの良心と言ったところだろう。釣り下がっている浮き輪やビーチボール類に描かれた、何世代も前のアニメキャラの笑顔がうらさびしい。

いくら勝手が分からないとは言え、どうしてこんなになるまで放置していたのだろう。

来年には廃棄予定の店舗。それが真奥の第一印象だった。

もともと天祿の父親の店のはずだ。となると、父親の段階でそこまで商売熱心でなかったという疑いすら湧いてくる。

全員の胸に、言い知れぬ危機感の嵐が去来した。

「おうちばっちー」

そして思ったことはなんでも口に出す年頃のアラス・ラムスが、無邪気故に直球ど真ん中で全員の心情を代弁してしまった。

「あの……大黒さん」

芦屋の問いに、天祿はサムズアップしながら答える。

「堅苦しいなあ芦屋君！ 気軽にあまねっちと呼びねえ！」

無茶なあだ名で呼ぶことを強要してくるというどうでもいいところで、大家との血の繋がりを確認した芦屋はげんなりしながら、

「……天祿さん。浜の海開きは、いつと仰おつしやっていましたっけ」

それだけ尋たずねた。その声色こゝろだけで、芦屋も真奥と同じ印象を抱いだいたことが知れる。

「明日!!」

元氣のいい返事。

「マジな話すつとね、ガチでピンチ!」

「この状況でなんでそんなに明るくしてられんのさ……」

あの漆原うぐいしはらすら呆あきれの声こゝろを上げるほどに、汚よごいのだ。店が。

「や、ほら言ったじゃん、私即席店長しやくしやくてんぢやうだって。なんていうか、イマイチ勝手が分かんなくて、あと本業もあつたし」

本業が何かは知らないが、絶対にサービス業ではないだろうと真奥は踏ふんだ。

「真奥さん芦屋さん、荷物、とりあえずまとめ終わおわり……わ」

そこに後からやってきた千穂ちほをして、思わず言葉を失うあたり、どれほどの事態じたいが分わかろうというものだ。

「がち……びん……がち……まま、がちやびんてなーに?」

「……アラス・ラムスはまだ知らなくていいの」

幼児特有の奇想天外な聞き違いに思わず吹き出しそうになる惠美けいみだが、それをこらえて言うべきことを言った。

「私は……多分この店には、買い物には来ないと思う……」

正にトドメの一言である。天祢は、ですよねー、と言わんばかりに天を仰ぐ。

鈴乃も恵美と同様のことを思っていたが、ふと、

「まあ……貞夫殿、どうした？」

店構えを見て以来一言も発しない真奥が、何やら口の中でぶつぶつ呟いているのを聞き取った。

「こんななのに、夏は忙しい……客来てる……独占状態。千円かける三は安くはねえ……。て

ことは……天祢さん」

「んあい？」

天を仰いでいた首を正面に戻しながら返事する天祢に、真奥は尋ねる。

「一つ聞きたいんですけど、もし大人りとかあったら、手当もらえますか？」

「へ？」

とんでもない単語が混じっていたような気がして、真奥以外の全員の声が唱和した。

「お、大人りって、そりやそうなれば喜んで出すけど、でも……」

この有様から何をどのようにすれば大人りなどという発想が生まれるのか。恵美の発言通り、まともに客が来るかすら怪しいというのに。

「芹屋、漆原」

「は？」

「え、何？」

真奥の呼びかけに、二人は顔を上げる。

「大入り、目指すぞ」

まさしく、大見得を切った真奥。

「天祢さん、やらせてください」

「いや、やるのはいいけど、大入りは無茶じゃね？」

おい雇い主。思わず全員が突っ込みそうになる天祢の発言。

「やー、自分で言うのもなんだけど、奥さんの言う通り、私だってちょっと買物来たくないよこれは」

「だから奥さんじゃありませんってば!!」

恵美の抗議は海風に散る。

「目標は高ければ高いほどいいんですよ。目標を高く持っておけば、『達成できずにとん挫したポイント』は目標を低くしたときよりずっと高いところにあります。それに……」

真奥は少しだけこそばゆそうに言った。

「店の外観や品揃えは、言うなればビジネスマンの身だしなみみたいなもんです。よれたシャツやすすけたスーツでお客の前に出て、十分なサービスもせずに稼いだ金は単なるあぶく銭に

「しかりません。次に繋がるお金にならない」

その一言だけ妙にたどたどしい口調のような気もしたが、要するに客を迎える以上は可能な限り万全な体制を整えるべしと言っているわけだ。

「……魔王のくせに」

恵美は憎々しげに呟いてから、何かを諦めたように一つ大きく息を吐いた。

「……それで、何をどうするつもりなわけ？」

そしてそんな恵美から飛び出した問いに、真奥は眉を擧めて聞き返す。

「お前がそれ聞いてどうすんだよ」

真奥がそう反応するのも仕方がない。芦屋か漆原ならともかく、現状最も真奥と敵対しているはずの恵美から出てくるはずのない言葉だからだ。

恵美は何故か少し悔しそうに顔を歪めて、目の端でちらりと千穂を見る。

「うるさいわね……手伝ってやるって言ってるのよ。それくらい察しなさい」

視界の端の千穂の顔が笑顔になるのが、恵美には妙に腹立たしい。

予想外すぎる恵美の申し出に、さすがの真奥も芦屋も漆原も度肝を抜かれた。

「ど、どうしたのさ遊佐、悪いものでも食べた？」

漆原がそう言ってしまうのも無理はない。

「後で対応のやり方で返してもらうために貸しを作るだけよ」

その返答の意味が分かるのは、鈴乃と千穂だけだ。

「なら、私も手伝います。いいですか？ 天祿さん」

千穂も恵美に並んで立候補する。

「さ、佐々木さんまで……よろしいのですか？」

「はい、元々、少しくらいお手伝いできたならとは思ってましたし、遊佐さんが参加するなら、私も負けていられないです」

芦屋の問いに、手を握って力強く頷く千穂。

「私は、残念だが作業に参加できる服装を持ち合わせていない。その代わりアラス・ラムスは私が預かる。まさか赤ん坊を作業に参加させられないしな」

「すずねーちゃ、かえるの？」

恵美の手からアラス・ラムスを受け取った鈴乃は頭を振る。

「ばばたちはこれからお仕事なんだ。アラス・ラムスは邪魔にならないよう、すずねーちゃと一緒に砂遊びをしよう」

「おすなあそび？」

砂遊びというフレーズに、あまりピンとこない様子のアラス・ラムス。

「そうだ、一緒に砂浜にお城を建てよう」

「うん!!」

「アラス・ラムスは、私が責任を持って子守する。魔王達が失職しないよう頑張れ」  
 恵美と千穂にそう言い置いて、アラス・ラムスの手を引いて浜の方へと歩いていく鈴乃。  
 恵美はその背を顔を顰めて見送ると、踏ん切りをつけるように思い切り自分の頬を両手ではたたく。

「で？」

そのまま居合抜きでもするかのような剣幕で、真奥を睨む。

「……本気か？ 本気で手伝う気があんのか？」

「だからそう言ってるでしょ。やりたくなくなるからそれ以上聞かないで」

「漆原見ろ……」 今日は勇者が魔王様に膝を屈した記念すべき日となったぞ」

「芦屋、この状況でそういうこと言ってるで虚しくならない？」

千穂はそんなやりとりを、ただにこやかに眺めているだけ。

「ちーちゃんと芦屋は経験済みだが、俺は結構人使い荒いぜ？」

「あまりナメないでもらえる？ テレアポってのはね、神経太くないとやってられないの！」

「言ったな。じゃあ、これからは俺の指示に従ってもらおうぞ。嫌だって泣いて逃げ出すなよ？」

ま、お前らは着替えとか持つてきてないだろうから、あんま重労働はさせねえけどな」

偉そうなことを言う割に妙に気配りができるところを見せて真奥はそう言うとき、天柙に視線を移す。

「天祢さん、いいですか？」

最終的な判断を、天祢に仰ぐ。なんだかんだで雇い主は彼女である。いくら恵美や千穂がやる気があるからと言って、勝手に従業員を真奥が採用するわけにはいかない。

「なんかよく分かんないけど、私は構わんぜ。本当に明日までにまともに営業できるようにするなら、今日一日くらい人件費増額ばっちこいよ！ 元々私の不手際だしねー」

それに対する天祢の返事とはことん気楽なものだった。

それを横目で見ながら、真奥は芦屋、漆原、恵美、千穂を順繰りに見回した。

「よしっ。最初に言っとくが、いくらなんでも明日初日から大入りは無理だ。人数が増えたとはいえ、店舗自体結構大きいし手が回るとこは限られてくる。だから……」

天祢が頼りにならない以上、真奥の手で自分たちが気持ち良く働き、お客さんから正々堂々とお金を頂ける店を構えねばならない。

翌日のお金の動き全てが自分の双肩にかかる、言葉通りの『店長代理・真奥貞夫』が君々浜の大地に光臨した。

「今日これから全力で、ハリボテを作る！」

※

真奥は、素早く店内の設備をチェックして回る。

電気周りやキッチン周りは、さすがにまともに稼働する。食材保管用の高湿冷蔵庫など、マ  
グロナルド幡ヶ谷駅前店より良いツキザキ製の新型を導入していたくらいだ。

ドリンククーラーは、クリーム色の天板や、錆の浮いた足元などかなり経年劣化が見られる  
が、これは置く場所次第で隠せる程度のものだ。

真鍮のサーバーは、一本の管の先に二つに分かれた出水口が付いていることから、ビール専  
用のようだ。

さらに外から見えない奥に埃をかぶった手動のかき氷機を発見する。

動作にやや引つ掛かりを感じるが、致命的に壊れているわけではなさそうだ。

その他、電源の配置、照明の位置などを確認してから、真奥は、よし、と気合を入れると、  
奥に入ってしまった天祢に向かって声をかける。

「天祢さん！ 小口現金いくらくらいあります!?」

小口現金とは、日々発生する小額な支払いに備えたり、不測の事態に対応するために銀行預  
金とは別に部署や店舗に用意されている現金である。

完全統一規格で運営されるマグロナルドではあまり見ない帳簿上の処理項目だが、応接出勤  
クルーへの交通費の支給や店舗で使う文房具代などをこれで賄ったりする場合がある。

そして大黒屋のように特に縛りも規格も無い自営業の店舗の場合、例えば焼きそばで使うソ

ースが無くなったので近所のスーパーからその場しのぎに買ってくる、といった時に、この小口現金が使われるのだ。

「んー二万円くらいかなー！ 本当に必要なだったら、私のポケットマネーから出すよ？」

店の奥から、天祢の大声が帰ってくる。千穂は未成年のため、きちんと契約書を作り、両親の了解を取りたいと言うので、事務的なところは意外としっかりしているらしいと認識を改める真奥。

「二万もありや十分です。おい恵美」

真奥はレジ脇にあるボールペンとメモ帳を勝手に取ると、さらさらと走り書きで書いて恵美に渡す。

「ここに書いてあるもの、天祢さんに店の場所教わって五千円以内で買ってこい。あとレジから小口とは別に万札何枚か出して、銀行で全部百円玉に崩してきてくれ」

「百円に両替ってのは分かるけど……でも新しい浮き輪一つとポンプ式空気入れ、それに色画用紙と紙やすりなんてなんに使うの」

明らかに不審がる恵美だが、真奥は取り合わない。

「いいから行けって。レシートは確実に持って帰れよ」

「領収書じゃなくて？」

「よっぽど高額じゃなければ、小口で買う場合はレシートに購入品目を書いてあるからその方

がいい。でも購入内容が書かれてない場合はちゃんと領収書取ってこいよ」

「分かつてるわよ。これでも一応会社勤めしてるんですからね。宛名は大黒屋、但し書きは品代でいいのかしら……」

恵美は素直に従って天祢に店の場所を聞きに行く。

「芦屋、お前は恵美が戻るまで、店の床を掃除しろ。砂一粒、残さないつもりでな」

「か……か、かしこまりました……っ」

芦屋は命じられたことを、何故か喉を突っ返させながら実行に移す。天祢に掃除用具のある場所を聞いて早速掃き掃除を始めるが、丁度そこに千穂が出てきた。

「佐々木さん、聞いていただけですか……」

「はい芦屋さ……芦屋さん!? なんで泣いてるんですか!?」

鼻の頭を赤くして涙ぐみつつ、手はしっかりと掃き掃除を始めている芦屋を見て千穂は慌てるが、

「勇者が……あの勇者エミリアが、全ての悪魔の敵が! 魔王様からにじみ出る王者の威厳に触れて、頭を垂れて魔王様の命に従っているのです! それを見て……私は……私はもう胸がいっぱいでっ! これは一人の悪魔としては小さな一歩かもしれませんが、魔界にとっては大きな飛躍です……っ!!」

こらえきれずに涙を流しはじめる芦屋を、千穂は引きつった笑顔で見上げる。

「嬉しいのは分からないでもないですけど多分それ色々間違ってますし、とりあえずアームストロング船長に謝ってください」

「うう……絶望に負けず生きてて良かった」

感動のポイントがよく分からない菅屋を愛想笑いでスルーした千穂は、真奥の元に向かう。

「あ、ちーちゃんどうだった。お袋さんの方は」

真奥は戻ってきた千穂に尋ねた。結局なし崩し的に千穂に手伝ってもらうことになってしまい迷惑をかけたことになるが、千穂の顔つきからしていい反応が返ってきたようだ。

「大黒さんにも電話に出ていただいて、お仕事するの許してもらいました。今大黒さん、私と真奥さん達の契約書持つてくるって店の奥に……」

すると千穂は少し言葉を切って、慎重に単語を選ぶような口調になった。

「マジで許してもらえたのか？」

千穂とて、銃子にいた以上、事が真奥と深く関わっていることくらい分かっているはずだ。

もちろん真奥は千穂と恵美の間で交わされた話を知る由もないが、それを差し引いても千穂に旅先での労働を許すとは、なかなか豪胆な決心である。

もちろん千穂の破天荒な行動を許したのは、娘への信頼に裏打ちされたものだろう。それは娘個人だけでなく、娘が信じる娘の周囲すべてに対する信頼でもある。

だとしたら、真奥はその信頼と絆を壊すようなことはしてはいけない。

「……帰ったら、またちーちゃんちに魔王城からつつってお礼のお土産持っていかなきゃな」

「え？ そ、そんな、気を遣わないでください。私が好きでやってるんですから」

千穂ならそう言うだろう。だが真奥は首を横に振る。

「こんだけ世話になっててそういうわけにはいかねえよ。……こりや本当に、ちーちゃんをうちの軍にくださって言いに行く日が来るかしんねえな」

真奥が何気なくそう言うとき、

「……ちよつと、ドキつとしました」

千穂が息を呑む気配。

その瞬間、真奥も自分のセリフ回しが意味深になってしまったと気づいた。

「あ？ ……あー あ、いや、その、あんま深い意味じゃないんだけど、ほら、言葉のあやというか、や、例の返事ってわけじゃないから、あ、でも否つてわけじゃ、あれ？ あれ？」

「あの……『うちの軍に』が無かったら……あの……その、予約は確……し……あう」

「え？ 何？」

千穂はもじもじしながら口の中でもご言っており、真奥には何を言っているか聞き取れなかった。

「な、なんでもありません……で、でもその、本当に、いつかその……」

「……あのさ、衆人環視。仕事無いなら僕エアコンに当たりたい」

「うおっ!?」

「う、漆原さんっ!?」

二人の足元。ビールを出すカウンターの下にしゃがみ込んでいた漆原の声に、真奥も千穂も飛びのいた。

「あ、い、いや、ある、お前にも仕事ある。だからちよつと待て!」

「い、いるならなんで言ってくれないんですかあああ!」

千穂は顔を真っ赤にして抗議するが、漆原は眉を蹙めて忌々しそうに千穂を見上げる。

「ンなこと言ったって、どうせどこで口挟んだって文句言うくせに」

こればかりは漆原が正しい。

非常にバツの悪そうな顔を見合わせる真奥と千穂だが、大人と魔王の威厳にかけて、真奥が先に復活した。

「うおっほん! えーつとだ、ちーちゃんはこのち、ちよつと地味な作業になるけど……」

大きく咳払いをした真奥は、千穂を伴って厨房に入って調味料の棚から塩と酢を手に取り、さらにシンクに向かってタワシを手を取った。

真奥の意図が分からず首を傾げている千穂の目の前で、小さなボウルに塩を大匙一、酢をそれが浸るほど入れると、タワシでそれをよくかき混ぜた。

そして緑青の浮いているビールサーバーの前に来ると、塩を溶いた酢をつけたタワシで表面

をこすりはじめた。

「あっ！ 凄（すご）い、落ちてる！」

すると、真奥（まおく）が磨いたところだけ、真鍮（しんそう）の金色のツヤがよみがえった。

「塩の粒（つぶ）が研磨剤（けんまざい）になって、酢酸（くすさん）を浸透（しんとう）させて緑青錆（ろくせいさび）を落としてくれるんだ。ちーちゃんには時間かけて、こいつをびっかびかに磨き上げてほしい」

「分かりました！ やつてみます！」

千穂（ちほ）はまだ少しほてったような顔で、それでも威勢よく答えて、タワシを受け取る。

「塩と酢は足りなくなったらちよいちよい足して、磨き終わったら教えてくれ」

千穂が了承の意を示して作業に入ると、また漆原（うるしはら）が声をかけてきた。

「テレビもネットも無かったのに、そんな主婦の裏ワザみたいなのどこで知ったのさ」

「日本に来たばっかの頃に少しな。その頃の短期派遣の仕事場って、節操（ふしぞう）なかったんだよ」

「へえ？ 例の長袖シャツ買わされたってやつ？」

「ああ。大体は重いもの運ぶだけの力仕事だったが、劇団の大道具搬入とか、サンドイッチマンになって辻立ち（つじだち）とか、交通量調査とかとにかく色々あってな。ちーちゃんの作業はオープン前のレトロ居酒屋の清掃作業で教えてもらったんだよ。専門の道具を使わない単純作業だったってな」

「人生何が役立つかわからないねえ」

漆原が苦笑し、珍しく真奥も同意する。

「だからだ、お前の今後の人生のどこで役立つか分からんから、お前にもこれから仕事を与える」

「めんどいのはやだよ？」

天祢の手前大声ではないものの、やはり一言多い。

真奥は漆原を引ッ立てて、客席を指差す。

「ここにある椅子のスポンジ、全部塗り」

「は？」

「鉄でもなんでも使っていいから、スポンジ塗り取って木の座面露出させろ。いいな」

「塗りって……いや、まあやるけど、でも、なんのために？」

「これは海水浴客が濡れた水着のまま座る椅子だ」

真奥は汚れたスポンジを指差す。

「濡れた尻でこれに座りたくねえだろう？ もともとビニールレザーが張られてて濡れても大丈夫

夫なはずの椅子だったんだろ？が、こうなっちまっちゃ水吸っちゃまって逆効果でしかない」

「ええ？ でもだからって塗りたら固い板でお尻痛くなるんじや……」

「客に来てもらうには堅い板を露出させてでも、濡れた尻で座っても不快じゃないことの方が重要だ。一方で、席数が多くないのに必要以上に居心地を良くして席の回転率を下げる必要は

無い。限られた条件で戦う以上、今は個々の満足度を抑えて回転率を上げることが優先したい。で、割いたら恵美が買ってくる紙やすりで……」

「なるほどね、割いた後の天板の角や表面の座り心地を滑らかにするんだね」

すると横あいから天柙が顔をのぞかせた。手に持っている紙の束は、千穂が言っていたパイト用の労働契約書か何かだろうか。

「よくそんなに色々なアイデア思いつくね。お店やってたこととかあるの？」

「あ、いえ。そういうことでは……。一つ一つの作業の意味は説明できますけど、それをやろうと思った動機はほとんどカンです」

真奥の指示内容で、純粋な真奥オリジナルのアイデアは一つも無い。ただ過去の経験やマグロナルドで学んだことの中から、お客が少しでも買い物をしたくなる結果に繋がる、最良と思われるパターンを構築したにすぎないのだ。

「すいません、いきなり店の備品壊すようなこと……」

「いいのいいの、仕方ない仕方ない。今の話聞いたら私も納得よ。最近じゃこの店もレジヤーチェアとか置いてるけど、うちの店そんなん入れるお金無いしね。お金をかけずに改良できるなら、それに越したことないわ」

本気なのか、真奥の気を軽くするためなのかは分からないが、天柙はあっけらかんと笑って真奥の肩を叩く。

「てことだ漆原。雇い主の許可が出た。椅子をひん剝け。ただし、綺麗に取れよ。スポンジカスやカバーの切れ端とか、残すんじゃないぞ」

「……やつぱりめんどいじゃん、ったく」

ぶつぶつ言いながらも、やはり天祢の手前洪々と云った様子で作業にかかる漆原。

「あと、ちよっと鈴乃にも声をかけてくるんでその間に、酒屋とか八百屋とかの発注書があったら、出しておいってください」

「はいよ。あと奥さん帰ってきたら、一応みんなの分の契約書作ったから目を通してね」

「奥さんじゃありませんって……」

真奥は天祢に淡い顔をしてから、返事も待たずに外に飛び出す。

波打ち際より少し手前で、鈴乃がアラス・ラムスと共に砂の城を作って遊んでいた。

いや、正確には、鈴乃一人で作業に取り組んでいるようだ。

「ばばー、すずねーちやすごいの！」

走り寄ってきたアラス・ラムスがそう述べるのも頷ける、浴衣の裾を砂だらけにして鈴乃が作っていたそれは、真正銘、城郭だった。

西洋風の城ではなく、屋根の鯉まで再現された、純和風の天守閣。

この短時間で、周囲に海水を引き込んだ漆まで作る念の入れようだ。

大抵赤ん坊は、こういうものを見ると怪獣映画の如く壊しにかかるものだが、アラス・ラム

スの幼い審美眼はそれ以上の何かを鈴乃の作品から感じ取ったのだろうか。

「……お前に、そんな特技があったとは……」

「む、魔王か。いや、アラス・ラムスにせがまれてつい熱中してしまつてな」

いい仕事をした、と言わんばかりの笑顔。実際、写真に撮って「姫路城」とでも題したいほど見事な出来である。

「大したことではない。修行僧の中には、教会建築や聖像彫刻を学ぶ者もいる。やり直しがきく分、砂像を作る方がよほど簡単だ。まあ、風のせいで出来た先から壊れるがな」

教会建築や聖像彫刻を学んだ聖職者が砂浜で姫路城を作るなどという話は聞いたこともないが、アラス・ラムスの子守を兼ねられる貝殻拾いを頼みに来たつもりで真奥は、考えを改めた。「鈴乃、頼む。後でそれ、店の隣に作ってくれないか？ 報酬は天祿さんに交渉して出してもらうから」

「砂の城をか？ 構わんが……何か意味があるのか？」

「意味無いと思つてるお前が恐ろしいわ」

真奥はしみじみと、その姫路城を眺める。

恵美や千穂は滞在期間に制限がかかるが、鈴乃は基本的にフリーの身の上だ。

宿泊場所を確保して報酬を出して拝み倒せば、日替わりで砂のオブジェを作ってもらえるかもしれない。これ以上は無い客寄せになるだろう。

「……ま、今のところは、アラス・ラムスの面倒を頼む」

「任せろ。アラス・ラムス、次は何を作る？」

「んーと、ままー！」

「エミリアか、よし、任せろ」

天守閣を作れるなら、人の砂像など造作もあるまい。砂のゴーレムでも作りだしそうな鈴乃を置いて真奥は店に戻ると、

「これ、主な発注先。あと去年までの主なメニュー表」

天祢が色々な書類を、漆原が椅子のスポンジを削いている脇の机に広げてくれている。

「とりあえず、初日はメニュー少し削りましょう。発注書見る限り食材が揃うのは明日朝になりそうだし、仕込み時間考えると全部やるのは無理そうなので、その分鉄板をフル稼働させれば……あ……天祢さんて、普段はどんな仕事してるんですか？」

恵美も千穂も鈴乃も、労働力としては基本的に今日限りと考えておかねばならない。となると、そもそも他人と話した経験すら少ない漆原と、店をここまで放置した天祢を真奥と芹屋でカバーしなければならぬのだ。

それでも本業が人と接する仕事か、あるいは調理経験などあれば、天祢には今から可能な限り仕込みをしてもらうという手もありなのだが……。

「えっと……結構、肉弾戦？」

「にくだんせん……は？」

真奥は瞬時にその言葉を漢字変換できずに尋ね返してしまう。

「あーそのとりあえず、料理は家庭料理以下です。キャベツの千切りとか、できません」  
大丈夫かこの雇い主。真奥はそこはかとなく不安になる。

「なんて言うのかな、うん、そう、警備とかそんなん」

まさか漆原と同じ、自宅警備というのではなからうな。電話で元々は両親の店だと言っていたが、まさか働かない娘に商売つ気の無い店を押しつけたのではないかという邪推が働く。どちらにしろ、天祢を使って調理場でのギャンプルはできない、ということだろう。

だが、「小口現金」という単語は分かっているようなので、店舗小売業の最低限の言葉は把握しているのだろう。彼女には店主らしく、金の出納業務の一切を任せるのが良い。

自然、声屋が調理担当、ということになる。

「ドリンク関連は……炭酸をオロチミンCをメインに、コラ・コーラ、三剣サイダー、オレンジ、スポーツドリンク系、お茶……多すぎるかな」

ドリンククーラーは一基、四段しかない。入れるものを限定しないと、一品目の品切れが、全体を貧相に見せてしまうことがある。

「なんでオロチミンC？ あれって小っちゃくない？」

天祢の問いに、真奥は首を振る。

「細身でクーラーに沢山入って、量的にすぐ飲めて、しかも安く売れます。百二十円の中に百円のものがあったら、買う買わないはともかく目を引くでしょ？ あと、あんま水遊びで紙幣持ち歩く人っていないと思うんです。ここのシャワー室とコインロッカーは一回百円だから、両替すればお客さんの財布の中に百円玉が増えます。お客さんが払いやすい貨幣で買える価格帯のものって、客単価の底上げになるんです」

これは、マグロナルドの低価格ラインナップ、通称百円マツダから得た知識だ。

「あとは、これが欲しいんです」

真奥は、発注書の中にあつた、「オロチミンCフェア、2ケースにつき店頭促販用A2版ポスターセット付き」の文字。二ケース注文すれば、必ず販促グッズをくれるというのだ。

「なに、真奥くん、水着のおねーちゃんのパスターが欲しいのかい？」

元氣潑刺としたアイドルがプリントされている、アイドルポスターを見て天祿がにやにやしながら尋ねてきて、真奥は生真面目に首を横向きに振る。

「レトロ看板風は、染みができて壁を少しでもごまかすのに使えます。あと、アイドルのポスターは視線誘導用にドリンククーラーの近くに貼れば、クーラーがポロいのも気にされなくなるかなって。可愛い子ですから販促にもなりますし」

「うわ、つまんねー。むっつりなのかい？ リアル草食なのかい？」

真面目な話をしているのになんたる言いぐさだろう。

「ちーちゃん……佐々木さんに、あれを磨いてもらってるのもそれが理由です。日陰の店内であれが光つてるとビールサーバーに視線が誘導されて、それ以外のものへの注意が散漫になります。ドリンク発注のときに、このオロチミンCとは別のビール系のポスターを持ってきてもらえば、ビールってメニューそのものに視線誘導できるんで完璧です」

「はあ……なるほどねえ」

「浮き輪も、恵美が買ってくる新しいのをここに並べれば、古い在庫も立派なバリエーションになります。とにかく、明日は最低限海の家として問題ない体裁を整えられれば勝ち。本格的に攻めるのはその後です」

「はえー」

感心した天祿の視線。すると真実の携帯に、恵美から着信が入った。

「おう、どうした。お前からかけてくるなんて、明日は世界の終わりか」

「斬るわよ」

字が違うように感じた。

「今銚子駅近くの大型スーパーにいるんだけど、新しい浮き輪ってどんなの買えばいいの？ 他の買い物考ええると、五千円じゃ一個しか買えないわ」

「子供向けがいいな。男の子でも女の子でもいいような。ポケチャーとかないか？」

ポケチャーとは大人気ゲームソフト『ポケットクリーチャー』の略であり、近年は毎年劇場

用アニメが作られるほどの国民的人気を博している一連の作品群の総称だ。

マグロナルドのお子様向け玩具付きメニュー「ハビネスセット」のおまけ玩具にも、ポケチャー絡みのものは多い。

「残念ね、ポケチャーはもう無さそう。プリピュアが特撮もの……あ、リラックス熊だ……」  
「何にときめいてんだよお前は」

「い、いいじゃないーリラックス熊だったら、ギリギリ男の子でも……」

「ねーよ」

恵美の浮ついた言葉を一蹴する真奥。

「なにももう！ この可愛さが分からないなんて、所詮は悪魔ね……あ、ポケチャー……ってこれ浮き輪じゃなくて子供用プールか……」

売り場をガサゴソと漁っているらしい恵美のその一言が、真奥に天啓をもたらしした。

「恵美！ そのプールどんくらいの大きさだ!?」

「何？ そんなに大きくないわよ。縦横二メートルくらいで、子供用だから深くもない……」

「縦横二メートル……ばっちりだ！ 買えー すぐ買えー」

「ええ!? 買えって、これ完全に予算オーバー……」

「金を出すから！ 浮き輪はもうリラックス熊で許す！」

「……はいはい、分かったわよ。じゃあ、もう少しかかるから」

恵美への返事もそこそこに、真奥は電話を切った。

すると、今度はレジ横に飛んでいって電話帳を大急ぎでめくる。

「銚子は港町だ……魚……鮮度維持……保管や輸送のために絶対あるはずだ……あったー」

真奥はある一枚の広告欄を見つけて、すぐに電話をかける。

その様子を呆然と見ていた天祿だが、短い用件の後に、真奥は小さくガッツポーズ。

「どこに電話してたの？」

「水屋です。南銚水業ってとこに」

「水屋？」

「漁港なら絶対に漁協に水を卸す会社があると思っただけです。電話したら、結構小さいロットから売ってくれるって言うてくれたんで、天祿さん、すいませんけど明日、車で取りに行ってもらえませんか？ かき水用の食用水と冷却用の溶けにくい純水を予約したんで」

「冷却用？」

真奥は店内を振り返って、身振りを交えて解説する。

「あのドリンククーラーは電源の都合で店の奥から動かさせません。だから恵美が買ってくるプールに氷水張ってそこに沢山缶飲料を放り込んで店先に出すんです。客寄せにもなるし、ちょっと寄って店の奥まで入らない人でも買っていてもらえます。その分、奥のクーラーは、テーブルでじっくり食事をする人用の飲料を多めに入れれば、品目数が稼げます」

「はあ……よく考えつくねえ……でも、かき氷って、もしかしてあれ使うつもり？」

天祢は真奥が引つ張り出してきた手回しかき氷機を見る。

「あれって、簡単なようで実は結構力いるし手間かかるからさ、そこまで手が回るかな？」

「大丈夫。ドリントとかき氷に関して、漆原一人で十分です」

「え、ちょ!? それ無茶すぎ!」

脳でスポンジ筆<sup>で</sup>りをしていた漆原が目<sup>め</sup>を刺<sup>さ</sup>いた。

「あの、さすがにそれは、漆原には荷が重いのでは……」

「私もそう思います。絶対無理だと思っています」

「あのさ、僕が自分で認めてるんだから、お前らが追い打ちかける必要なくない？」

それぞれの作業に集中していたはずの芦屋<sup>あしや</sup>と千穂<sup>ちほ</sup>が真奥の言葉を聞きつけて不安そうな声を出し、漆原がまたふくれっ面<sup>で</sup>になる。

だが真奥は自信たっぷりの様子で胸を張った。

「安心しろ。俺はホールの雑用を担当するが、必要なときにはちゃんとカバーに入る。それに、これは漆原一人で面倒が見られて、かつ漆原が下手<sup>へた</sup>を打つこともなく、かき氷機をうまく使えなくても客からは文句が出ないとゆー理想的なシステムなんだ」

「はあ？」

「い、一体どういうことですか!？」

「漆原さんが……一人でできる？」

三者三様に驚いているのを満足げに見つめる真央は、自信満々にニート墮天使が一人で複数ポジションの商品販売を担当できる画期的なシステムを語る。

すべてを聞き終わって、

「そ、そっか……マグロナルドじゃない、大黒屋だからこそ、できることなんですね」  
千穂が思わず唖る。

「冷凍庫を開け締めできて、値札が読める人間が座っていれば、確かに可能……さすがです。  
深謀遠慮が光りますね」

「芦屋、それはぶつちやけすぎ。ぶつちやけられすぎて僕そろそろ本気で悲しい」  
言いながらも、漆原はどこかホッとしたような表情で、

「でもそれなら、僕にもやれそうだ」

珍しくポジティブなことを言い出した。

※

穏やかな浜風の中、色とりどりの炎の華が、暗闇で光の舞を踊っていた。

「け、結構勢いがあるものなのですね」

芦屋がおっかなびっくり持っているスティックの先からは、色が次々に変化する火花が散っていて、芦屋の引きつった顔を照らし出していた。

「ままー、びかびか、びかびか」

「アラス・ラムスにはまだ早いから、ここで一緒に見てみましょうね」

聖剣と融合して大天使とやり合う赤子に火花が早いもくそもないものだが、アラス・ラムスは普通の幼児と同じように、未知の轟音や光で泣き出してしまふことが多々あった。

少し離れている場所なら光の競演を眺めていられるが、おそらく普通のスティック火花を持たせれば、怖がって放り出してしまふだろう。

「ねえ、これ何か面白いわけ？」

かと言って浜にかがみ込む漆原の目の前でうねうねと動いているへび火花など見せたところはどうしようもないわけで、恵美は大人しく子供を抑える母親役に徹している。

海の家大黒屋は、天祿主催真裏様一行歓迎火花大会で遊ぶ余裕が出る程度に、まともな商店としてあるべき姿を取り戻していた。

「おい芦屋、火貸せ！ 四刀流に挑戦するぞー」

芦屋の花火に脇から突き出されたスティックはなんと四本。

偉大なる魔界の王は、片手に二本ずつ全部違う種類の花火を持って、うきうきわくわくしている。

「……楽しそうで、何よりです」

素直に真奥の持つスティックに火花を差し出す芦屋だが、

「あ、終わってしまいましたね」

芦屋の花火が途中で終わってしまい三本しか火がつかなかった上に、

「……これ外側が違うだけで、火花の色一緒だな」

ついた三本が全く同じ火花を出すので、魔界の王ちよつとがっかり。

昼間、恵美が帰ってくる頃には、砂遊びに飽きたアラス・ラムスと鈴乃が戻ってきて、一度休憩となった。芦屋が今ある材料だけで、大人数の焼きそばを実験的に作り、それが全員の昼食となる。

作っている間、芦屋はLPガスを用いた鉄板の火力に衝撃を受けたようで、終始、

「この火力が魔王城にあれば……」

と、言っても詮ない独り言を呟っていた。

休憩後、真奥は鈴乃に依頼して、浜風が当たらない場所を選び本格的な砂の天守閣の建造に取り掛かってもらい、恵美はアラス・ラムスの面倒を見るために手伝いからは途中退場。

漆原は、板を露出させた椅子の表面を紙やすりで磨き上げてゆく。

芦屋は食事メニューの基本的なレシピを見ながら今ある材料だけで仕込みを始め、それを見ながら千穂が、やはり恵美の買ってきた色画用紙を使い、可愛らしく目立つ文字で、店内に掲示する御品書きの札を作ってゆく。

真奥は天祢の指示で、海の家的重要な評価基準であるシャワールームを隅から隅までカビの一片も見逃さず入念に磨き上げる作業に入る。

銚子の夕陽の名所、屏風ヶ浦の彼方に陽が落ちて、空が薄闇色に暮れはじめる頃。

恵美に「買物に来たくない」とまで言われ、まともな開業は絶望的だと思われた海の家「大黒屋」は、なんとか町の古い商店、といった様子にまで持ち直していた。

長い年月を経た上での壁の染みやヒビ、看板などの錆は現時点ではどうしようもないので、あとは、明日早朝の食料類の搬入を待って、最後の仕上げをするばかりである。

その頃には、鈴乃制作の砂像、題して「砂様・蒼天蓋」も見事完成した。

「鎌月ちゃん、これ商売にできるよ……」

天祢がそう唸るほど、精緻な造作の大天守閣だ。

どのような細工を施したが、ちよつと触れた程度では崩れることすらなさそうだ。

鈴乃曰く、君ヶ浜の砂は砂像を作るのに適した砂らしく、水と砂を正しい比率で混ぜ合わせて固めたものを彫刻すれば、一日二日は余裕で持つとのことだった。

恵美達はそこで一度、君ヶ浜から歩いて十数分の犬吠埼の旅館にチェックインし夕食を食べ

てから、天祿の誘いもあり、花火を初体験するべくまた君ヶ浜に戻ってきていた。

恵美と鈴乃どころか千穂までその宿に泊まると知った真奥は、

「結局泊まるのかよ!?」

と突っ込んだが、千穂が泊まることまで含めて親の了解を得ていると説明すると、釈然としないながらもそれ以上は何も言わなかった。

実は天祿と千穂を除くと、全員が花火をするのは初めての経験だった。

日本に来て一年以上経っているのに花火がどういうものかは知っている真奥達だったが、いざこうして自分で花火に触れてみると、たかが玩具に随分と精緻な細工が施されているのが分かる。

少なくとも魔術にも聖法術にも、こんな多様な光や炎を生み出す技は無い。

「アラス・ラムスちゃん、これ見てみて?」

千穂が花火から一際大きな仕様のものを取り出して掲げて見せる。

「随分大がかりな花火ね。なにそれ?」

恵美もその花火には興味を持った。地面に置く、噴水タイプの花火ともまた違う、長い竿の先端に、導火線が付いた六角形の紙の束のようなものが付属しているものだった。

千穂は周囲から少し距離を取ってから、先端の導火線を風よけのために掘った穴の中にある蠟燭ろうそくに近づける。

「おーー！」

アラス・ラムスが驚いたような声を上げる。

竿の先端で、六角形の紙がぐるぐると回転しながら色とりどりの火花を散らしている。

規模の大きさの割には十数秒でその火花は止まってしまったが、次に起きたことがアラス・ラムスの目を輝かせた。

「とりさん!!」

なんと火薬を内蔵し回転していた六角形の紙束が二つに割れて、鳥かごを模した紙細工に変身したのだ。

紙の鳥かごの中にはデフォルメされた黄色い小鳥が入っていて、アラス・ラムスは、

「とりさんびいびい!!」

全力で触ふりたいアピール。

千穂は竿を恵美に渡して言った。

「まだちょっと焦こげ臭くさいかもしれないんで、もう少ししたら触らせてあげてください」

「よくできてるわね……玩具だからって侮あなづれないわね」

「他にもパラシュートになるのとか万国旗が飛び出してくるのとかあるみたいですけど、打ち

上げはダメだから見せてあげられなくて残念ですわ」

風に煽られてどこに飛ぶか分からないロケット花火などの打ち上げ系は、大抵どこの浜でも遊戯を禁止されている。

「びいびいだー」

恵美が紙が熱くないかどうかを確かめてからアラス・ラムスに渡すと、アラス・ラムスは手の中の鳥かごに目を輝かせた。

「ほら、千穂お姉ちゃんにありがとうは？」

「ありあとごじやますー」

恵美に言われて素直に元氣よく言うアラス・ラムスに、遠くにいた天祿や鈴乃の顔もほころぶ。

「ふっ、これで私の三連勝だな」

その向こうでは、多刀流遊びに飽きたらしい真奥、芦屋、天祿、そして浴衣姿の鈴乃が車座になって浜風にどれだけ耐えられるかを競う「線香花火サドンデス」を繰り広げていた。

「くっそー、浴衣に線香花火が似合いますぎでて負けても悔しくないぜー！　なあ真奥君！」

鈴乃の艶姿を見て、天祿は隣我真奥の肩をばしばしと叩く。

「や、俺は別になんとも……」

「負けてはなりません！　次頑張ってください」

真奥の隣からは、芦屋が線香花火の束からすかさず三本取り出してレフェリー役に徹している。



「まままま！」

「ん？ なあに？」

「あれ、びいびいでてくる？」

鳥かごを大事そうに抱えながらアラス・ラムスが指を差す方向は、花火に興じている真奥達の方ではなかった。

見ると、夜の海の沖で漁をする船団の漁火が見える。規模の大きい船団のようだが、なるほど、今見た鳥かご花火の火花の色に似ていなくもない光だった。

「さあ、どうかしら。それよりほら、線香花火ならアラス・ラムスも怖くないんじゃないかしら。鈴乃お姉ちゃんの所に行つて、仲間に入れてつて言つてご覧なさい？」

「すずねーちゃー！」

恵美はやんわりと、アラス・ラムスの注意を花火に戻すと、砂浜に下ろしてその背を押す。アラス・ラムスは砂に足を取られそうになりながらも、懸命に鈴乃の所まで走つていった。それを見てから、恵美は沖を見る。

夜の海での沖の光というのはあまり縁起の良いものではない。

エンテ・イスラの南大陸では、沖の怪火は最大級の凶兆とされていた。

死者の魂が放つ光とされていた洋上の怪火を見た者には何らかの禍いが冥府の門よりやつてくる、という伝承が残っていた南大陸。

悪魔大元帥マラコーダの軍が得意としていた屍霊術は、そんな迷信が色濃く残る風土に最大限の力を発揮したという。

もちろんここは日本で、恵美はあれが漁火を掲げた船団だと分かっているし、不知火やセントエルモの火などと呼ばれる地球の怪火現象が科学的に解明されていることも知っている。しかしエンテ・イスラには、間違いなく怪異として存在するのだ。

「あれかい？ 不知火が苦手な感じがかい？」

唐突にそう問われて顔を上げると、そこにはアラス・ラムスが示した沖を眺める天祢が立っていた。

「線香花火は、いいんですか？」

恵美ははぐらかすようにそう返す。

「もう勝てない勝てない。鎌月ちゃん伊達に浴衣着てないよ。千穂ちゃんと交代してきた」

浴衣を着ていると線香花火の持ちが良いなどという話は聞いたことがないが、天祢は続ける。「別にビビらせるつもりでこんなこと言うわけじゃないけどさ、銚子にはね、モウレンヤツサっていう怪談があるんだ」

「モウレンヤツサ？」

「モウレンヤツサはね、霧の深い時や時化のときに、漁船に現れる船幽霊なんだ。水死者の仲間を増やそうとして、『いながかせ』って言ってくる。いながつてのは柄杓のことだね、貸す

とその船は沈められてしまふんだ。モウレンヤツサが出るときはああやって海に火が灯るんだってさ。九州の方にも似たような話があるらしいけど、要するに死者が成仏できずに悪さするって話なんだけどね」

天祢は沖の船団を見ながら言う。

「私はよくある、死者が現世に帰ってきてきて悪さするって発想がどうにも分からなくてね」

「は？」

「いやだって、それこそお盆なんかどうなっちゃうのって話でしょ？ だから私は思うんだ、最初に死者やあの世からの兆しを恐怖した人は、よっぽど後生の悪い生き方をしたんだらうなって」

「それは、単に死ぬのが怖いからって話じゃなくて？」

脇から声をかけてきたのは、漆原だった。

漆原の目の前には燃え尽きて伸び切ったへび花火ばかりが十個近く転がっている。気に入ったのだろうか。

「死ぬのが怖いのと、死者からの声が怖いのは全く別のことだと思わない？」

唐突な死生観談義が始まってしまったが、それなら鈴乃の方が適任のような気がする。

「無念や未練を残して亡くなった人のことを、追い討ちかけるみたく怖がるなんてあんまりじゃない？ 実際怖いのは」

天祢はふと、犬吠埼いぬげさきの突端で、暗い海に光を投げかける灯台とうだいを見た。

「いつだって生きてる奴やつらだけさ。大体の凶兆きんしやうなんてのは、科学的根拠こんこがあつて、その連鎖れんさの結果でしかない。ま、何が言いたいかつていうと……」

天祢は涙を振り向いた。

視線の先には、真奥まおくと芹屋せしやと鈴乃すずのと千穂ちほ、そして千穂の手をかりて線香花火を満面の笑みで掴つかんでいるアラス・ラムス。

「あの子に、魂を差別するようなことをさせちゃいけないよってことかな」

「……天祢さん？」

「何？ どゆこと？」

天祢の言いたいことがいまいち分からず、惠美えみと漆原しはらが問いかけたときだった。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

低い警報サイレンのような大音響が、君ヶ浜きんがはまを揺らしたのだ。

その突然の音に天祢以外の全員が驚いて身を凍すくませた。

「あう？」

線香花火に興じていたアラス・ラムスも、不愉快ふげつたつそうな顔できよろきよろと周囲を見回し、そのせいでまだ火花を散らしていた線香花火を取り落としてしまう。

「だ、大丈夫よ、怖くないから」

千穂ちほは素早くアラス・ラムスを抱きしめて、その頬ほを撫なでて安心させようとするが、鳴りやまない音響にアラス・ラムスの顔はどんどん泣き顔へと向かってゆく。

「大丈夫よ！ 何も怖くないから！」

なんとかあやそうとするが、アラス・ラムスは爆発寸前だ。ガブリエルに敢然かんぜんと立ち向かった超常的な存在のアラス・ラムスだが、普段は当たり前前の赤ん坊のように、未知の恐怖に対して弱い。

そしてもう一度、空気を震わす大音響が鳴り渡り、ついにアラス・ラムスは泣き出してしまう。

「ういやあああやいやああああ!!!」

「あらあら……やっぱ赤ちゃんには怖いよね、この音」

一人泰然たいぜんとしていた天祢あまのは、また視線を灯台とうだいに戻した。

「わ、私達もちよつとびっくりしましたけど……」

惠美えみがそう答える間にも、再び大音響が響き渡る。

「や、これさ、灯台の露笛ろうふくの音なんだ。だから、何か危ないとかそういうことじゃないから気

にしないで」

「ムテキ？」

恵美は聞き慣れない単語が出てきて尋ね返す。

「濃霧のときに灯台の霧信号所が出す音声信号のこと。沖の船舶が座礁しないよう警告する信号を音で発するのよ。今、海の上霧出てるんじゃないかな？」

気象条件が揃うと夏の海は真冬と同じくらい霧が出やすい。

「おいおい、さつきまで結構暗れてなかったか？」

真奥の声に顔を上げた全員は思わず息を呑んだ。遠い海上に、いつの間にか真っ白な霧がかりつつある。漁火の船団も既に霧に吞み込まれうつつらとしか確認できない。

「す、すごい勢いですね」

芦屋はあたふたと周囲を見回し、千穂はアラス・ラムスがこれ以上怖がらないように、より強く抱きしめる。

「こりや、来るね」

心なしか、天祢の声に緊張が走る。

「君ヶ浜ってのは、昔は『霧が浜』って言われるくらい霧が出やすいことで有名だね。こりやちよっと、陸まで霧が来るかもしれない。残念だけど、花火大会はこれでお開きだね」

天祢は頷くと、花火の燃え殻を指差して真奥に言った。

「悪いけど、これ片づけといってくれる？ 私は女の子達を宿まで送ってくわ。霧が陸に来たら、地元民でも外出られなくなるくらい濃くなることあつからさ」

ときばきとそう指示する天祢は、昼間の緩い様子とはまるで別人のようだ。

「わ、分かりました」

真奥と芦屋が協力して燃えカスを回収している間にも、アラス・ラムスは泣きやまない。

「ふうえええいやああいやあ!!」

「……こんなに泣きやまないなんて、珍しいな……」

真奥は眉を顰めるが、見ると本当に霧が浜風に押されるように陸に近づいていることが目視で分かったので、慌てて天祢に言う。

「ちーちゃんのアラス・ラムスのこと、お願いします」

「おいおい、奥さんや鎌月ちゃんの立場はどうなるよ」

軽口で返す天祢だが、どこか余裕が無い様子でそれ以上からかつてくることもなく頷いた。

「まあ任せな。でも、そっちもできるだけ外に出るんじゃないよ。明日は朝早いし、今日はお寝ちやつて。んじゃ、千穂ちゃん、蓮佐ちゃん、鎌月ちゃん行こうか」

天祢に急かされた女性陣は足早に浜を去っていき、真奥達もそれを一抹の不安を覚えながら見送った。

恵美達が旅館に到着した頃には、既に一丁先を見通すのも難しいほどの霧が町を呑み込みは

じめていた。

「よし、んじやみんなお休み。明日は、ちゃんとバイト代受け取りに来てね!」

ところが天祢は、そんな惠美達を送り届けてからそのまま霧の町に出ていこうとする。

「天祢殿、まだ霧は深い。少しロビーで待機されてはどうだ?」

鈴乃の提案は至極もつとものことに思えた。だが、天祢は首を横に振る。

「ちよいと野暮用がありましてね。まあ本業に関わることなんだけど、霧が出たら行かにやらんところがあるんですわ。慣れてるから心配めさるな。んじや、また明日ね」

早口にそう言うのと、止める間もなく天祢は夜の霧の奥へと身を翻し去っていつてしまった。

ようやく泣きやんだアラス・ラムスと惠美、千穂、鈴乃の三人は、どこか不安げな様子で霧の中に消えた天祢を見送る。

不安を呼び起こす濃霧の中、灯台の明かりと思しき一条の光がさっと駆け抜けていった。

※

「しかし、すげえ霧だなあ」

「こんな中表に出たら、まさしく五里霧中といった感じでしようね」

真奥と芹屋は、下宿部屋の窓から外を眺めていた。

「ねえ真奥、携帯鳴ってるよ」

その後ろから漆原が声をかけてきて、真奥に携帯電話を差し出してくる。

「お、ちーちゃんからメールだ……。あいつら、無事旅館に着いたつてよ」

真奥はメールを開いて読み進めて、最後の一文に目を留めて首を傾げる。

「……まじか？」

「どうされたのですか？」

芦屋が尋ねてきて、真奥は顔を上げる。

「や、天祢さん、この霧の中どっかに行っちゃったらしいぜ？」

「普通に家に帰ったんじゃないの？ だって地元でしょ？」

「まあ、そうかもしれないけど、でもちーちゃん「帰った」じゃなくて「どこかに行った」って言ってるんだよなあ」

真奥は携帯を閉じてポケットにしまうと、また外の霧に目をやる。

そう言えば、結局天祢の本業がなんなのか、未だに聞けずじまいだ。その仕事に関わることで出かけているのだろうか。この霧では本当に数メートル先も見えないだろうから、交通事故にでも遭わなければいいがと思った次の瞬間だった。

ぶおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおん……。  
ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……。

またあの音が鳴った。窓ガラスがびりびりと振動する。

古の巨竜の嘶きは、このような音だったのかもしれない。

霧を引き裂いて涙の空気をびりびりと震わせる音に、物思いにふけて油断していた真奥は心臓が爆発四散しそうなほどに驚いて飛び上がった。

「び、びびったあ！」

その音と共に、周囲を包む霧が一層濃くなる。

視界は一面真っ白になって、灯台のあるはずの大吠埼すらおぼろに影しか見えない。

「ま、魔王様！」

「うおっ!」

そのとき、芦屋がすぐ隣で突然大声を出し、立て続けに驚かされた真奥は、小さく飛び上がってしまう。

「び、び、びびらせんじゃねえよ! あーもう!」

「も、申し訳ありません。ですがあの……霧の中に、何か見えませんか?」

「ん? 霧の中?」

十重二十重に重なる霧の中に見えるものと言えば、時折横切る灯台の光と、すぐ手前の砂浜、窓に映る自分達、そして、

「……人？」

霧の中にぼんやりと人影が見えた。こちらに歩いてくるようにも見える。だがその動きは妙にふらふらしていて、壊れた振り子のように不穏な動きだ。そして何よりも、

「な、なんかでかくねえか？」

「そ、そうですね」

段々と近づいてくるその人影が、やたらと大きいのだ。大柄とか上背があるなどというレベルではない。

平屋建ての大黒屋を軽く凌駕する大きさなのだ。

「何、どうしたのさ？」

真奥と芦屋の狼狽えように驚いて、漆原も窓に張りついてくる。そして、真奥と芦屋が見ているものを視認した。

「き、霧の中だから、ブロッケン現象だったんじゃない？」

「そ、それなら俺達のうちの誰かの影ってことになるだろ。つ、つまり」

「あの、まさか先ほど天祢さんがエミリアに語っていたあの話は……」

モウレンヤツサ。鈍子に伝わる船幽霊の伝説。

「違うよ。あれは船の上に出てくるんだろう？ あ、あれはどう見ても陸に……」

「しっ……お、おい、足音が……」

魔界の大悪魔達が雁首揃えて、霧の中に見え隠れする巨大な影におびえる姿は滑稽かもしれないが、悪魔だって訳の分からないものは怖いのだ。

「く、来る……」

芦屋のうめき声と共に、霧を割って、それは現れた。

「え……」

それは真奥と芦屋と漆原、誰が濡らした声だっただろう。

霧を割って現れたそれは、紛うことなき巨人だった。それも、三人のよく知った。

そして二人の見ている前で、人影らしいものは少し離れた場所に轟音と砂煙を上げて膝から崩れ落ちた。

「あ、あれは……」

「行きましょう！ 魔王様！ ルシフェル！」

「ま、マジで!?」

大黒屋の目と鼻の先で倒れたそれを見て、真奥達は気づけば大黒屋から飛び出していた。

下宿部屋の玄関のほとんど目と鼻の先。

一丁先も見えないほどの濃霧に巻き上がる砂埃の中で倒れている者の姿に、真奥も芦屋も

漆原も言葉を失った。

「ゴゴ……ゴア……」

人間には有り得ないうめき声を上げるそれは、確かに人の形をしていた。

だが体軀は常人の二倍近く。錆びた鎧のような皮膚を持ち、頭頂からは鬼のような一本角。そして特徴的なのは、左右の瞳を囲むようにして顔全体に彫られた刺青である。

まるで顔の中央に巨大な一つ目があるかのような刺青に、三人は覚えがあつた。

「ま、まさか……悪魔？」

芦屋が目目の状況を確認するように呟く。真奥もごくりと唾を呑んで叫んだ。

「さ……独眼刻印鬼の一族か!? なんでそんな奴がいきなり出てくるんだよ!?」

「何も……見えなかった、一体……人間に、あのような力が……」

悪魔の独眼刻印鬼族と思われるその存在が上げた意味のある言葉。それは間違ひなく魔界の言語の一つだった。それを聞いて急激に目の前の光景が現実感を帯びてきて、芦屋が思わず身を乗り出す。

「お、おい、貴様、独眼刻印鬼! 一体……」

「芦屋! 下がれ!!」

突如、独眼刻印鬼の上に霧が渦巻いた。

真奥が首根っこを引っ張るようにして、立ち上がりかけた芦屋を引きずり倒すと、その頭の

上を意思を持った蛇のように渦巻く霧が通過し、独眼刻印鬼の周囲に殺到する。

唖然としたまま為すすべなく見守る三人の視界が、一瞬激しく光り、思わず目を背けたわずかに一瞬で、日本にいるはずのない独眼刻印鬼は、霧に巻かれて忽然と姿を消した。

そして、あの巨竜の囁き。

「き、消えた……」

渦巻く霧がいなくなった後、残っているのは砂のくぼみのみ。いや……。

「若い独眼刻印鬼だったな……間違はなく奴は、ここにいた。負傷して」

今の今まで巨大な存在が倒れていた砂の上に、赤い何かが染み込んでいるのを見て取った。

真奥の冷静な状況分析に芦屋は眼を刺く。

「しかし、こ、ここは千葉の君ヶ浜です！ 何故魔界の悪魔が!?」

「お前、そりや東京の笹塚に魔王だ天使だなんだったのがたむろしてるんだ。いずれ札幌に大法神教会の大神官が現れたり、イスラ・ケントゥルムにヤマトノオロチが現れるかも」

「ふざけている場合ではありませんよ!」

芦屋は真奥の軽口をびしりと止める。

「今、我々がいるこの地で、というのが問題なのです!」

「偶然……だと思いたいんだが、ダメか?」

「偶然だとしても、唐突すぎるでしょ」

さすがの漆原もこの事態には動揺しているようで、きよろきよろと周囲を見回す。

「もしかしたら、魔界の者がようやく我々の居所を掴んで迎えに来たのでは……」

芦屋はふと思いついたように言うが、さすがにそれは楽観的すぎる観測だ。

「それはなくない？ それならなんであの独眼刻印鬼はあんなぼろぼろだったんだよ」

「そ、それは……」

漆原の意見に芦屋は言いよどむ。確信は持てないが、あれは戦闘による負傷のように見えた。ゲートがどこかで開いたのか、一体誰が開いたのか、あの傷を負ったのがゲートに入る前なのか出てきた後なのか。どこの時点で何が起こったかで話はまるで変わってくる。

何より、あれが真奥達の知る魔界の独眼刻印鬼だったとすれば一つ、大きな疑問が残る。

あの独眼刻印鬼が日本に落ちてきて尚、悪魔の姿を保っていたのは何故かということ。だが、状況は真奥達に考察する時間を与えない。

「っ!! おい、芦屋!! 後ろ!!」

考え込む芦屋の背後に、またしても悪魔が出現していたのだ。

肉食獣の下半身に鬼面の悪魔の上半身を持った、ビーストデモノイドと呼ばれる魔界でもポピュラーな人種の悪魔だ。

「ぐわわわわ……」

だがこの悪魔も、先ほどの独眼刻印鬼と同じように大きく傷を負い、苦痛のうめき声を上げ

ている。

見たところ魔王軍でも部隊長を務められる程度の中級悪魔のように見える。身に纏う鎧はもはやずたずた。両腕に挑める剣も折れていないのが不思議なほどにボロボロだ。

「ピーストデモノイド!? 魔王都サタナスアルクの住人か!?」

半獣半魔の悪魔種は数多く、魔界の首都とも言える魔王都サタナスアルクにも数多くの部族が住んでいる。

「へー、この世界の人間……貴様も我らに敵対するか!」

懐かしい魔界の言葉だ。軋るような音だが、人間の耳になっても真奥と芦屋にはその内容が概念送受に頼らなくとも理解できる。

「に、人間だっ!?」

芦屋も真奥も漆原も、当然魔界の言葉は理解できる。だが、状況を整理できずに慌てた芦屋の口から出てきているのは、既に完全に肌身に馴染んだ日本語だった。

「無礼者! 私は魔王軍悪魔大元帥アルシエ……」

「(わけの分からん言葉を話すな。せめて一太刀、貴様らに我が剣の味を教えてくれよう)」  
「にやにおう!?」

無礼な物言いに芦屋は頭に血が上るが、傷ついたピーストデモノイドの兵士にしてみれば、異世界の人間が何かを喚きたてているようにしか見えないのも当然だ。

刃もとうに潰れた両の剣が、芦屋目がけて振りかぶられようとした瞬間だった。

「芦屋っ!!」

真奥が鋭い声と共に芦屋に体当たりをぶちかまし砂地に転がった。二人の頭のすぐ上を剣が通過した気配がする。

「(刃を納めろ! 俺達はお前の敵じゃない!)」

真奥はもんどりうって倒れたままビーストデモノイドに向かって叫ぶ。鬼面の相貌が動揺したのが分かった。

「(芦屋、お前も落ち着けよ! 日本語で話しかけたって通じるわけないだろ!)」

「(あ、そ、そうか)」

漆原に言われて、芦屋もようやくそのことに気づいたようで、慌てて日本語から魔界の言語に切り替えた。

「(ぐ……魔界の言葉……魔界の力……貴様ら、一体なにも……)」

「!!」

「なっ!？」

ビーストデモノイドの兵士の言葉は、真奥達の耳に最後まで届かなかった。

先ほどの独眼刻印鬼と同じように、ビーストデモノイドもまた霧の蛇にその身を巻かれ、霧の世界を照らした一瞬の明るい光の後に、三人の見ている前で忽然と消え去ったのだ。

そしてまた、巨竜の嘶き。

「なんなんだよコレは!? 大法神教会でも攻めてきたのか!?」

「し、しかし、こんな法術は見たことありません!」

三人の目の前で、傷ついた魔界の悪魔達が、一瞬で霧の中にかき消された。

魔力の痕跡も残さず、さりとて二人の悪魔を消滅させた力の残滓はどこにも無い。否。魔力は、あった。

「上だ! また来るぞ!!」

今度は、真奥も芦屋も漆原も、その接近前に魔力を感知した。

「!?」

火薬の大砲でも打つような轟音が、遙か上空の霧の空を揺らした。

それと同時に、やはり何かが真奥達のいる浜を目がけて落ちてくる。

「避ける!!」

三人は素早くその場から飛びのく。

数瞬の差で、先ほどの轟音に吹き飛ばされたかのような勢いで落ちてきたその悪魔は、三人がいた場所に巨大な翼を広げて軟着陸した。

体躯の大きさから言えば、独眼刻印鬼やビーストデモノノイドに比べてずっと小さい。芦屋とほぼ同じ程度の上背のその悪魔は、漆黒に染められた鎧を纏う魔鳥の姿をしていた。

そしてやはり深く傷ついているようで、翼を使つて軟着陸したは良いものの、ビーストデモノイドと同じようにその場で膝をついてしまう。

「ふ、不覚……っ！ よもや此の地に、あのようない手がおろうとは！」

これも先ほどの二人とは違ったことだが、鎧も兜もぼろぼろの魔鳥戦士だが、腰の剣だけは柄も鞘も傷一つなく、色とりどりの宝石があしらわれ、華やかな光沢を放っていた。

名のある宝剣と見受けられるが、そんなことよりも真奥と吾屋は、その魔鳥戦士の顔に釘付けになっていた。

知った顔だったのだ。

「ま、まさか……」

「か、カミーオ!?」

「カミーオ殿!?」

悪魔のわりにはつぶらな瞳をしている魔鳥戦士は、見知らぬ人間達に呼びかけられて、ふと顔を上げる。

「何者だ人間……何故吾輩の名を知っている……? うぐっ！」

嘴から赤い血をあふれさせる魔鳥戦士は、鋭い眼光で真奥と吾屋を睨む。

「何者かなんていい！ 一体何があつたカミーオ！ その傷は……」

「魔王様！ 霧が!!」

真奥は魔鳥戦士に駆け寄ろうとしたが、三度霧の蛇が魔鳥戦士の体を包み込もうとする。消滅の原理がどうなっているのかは分からないが、万が一巻き込まれたらどうなるか分からない。思わず足を止めてしまう真奥だったが、

「畜生、こうなりや賭けだ!!」

漆原の鋭い声と共に、突然強い風が沸き起こった。

瞬間、真奥達を中心に、霧が一気に押しのけられる。

「漆原!!」

漆原の背には、堕天使の黒い翼ではなく、白い翼が聖法気を帯びた状態で一對、展開されていた。

それをはためかせると、一陣強く風が吹いて、真奥達のいる場所から大黒屋までの空間を、霧の中から浮かび上がらせる。

「お、お前その翼、なんで白……」

「見てれば霧がおかしいことくらい分かるだろ!? それより早くカミィオを家の中に!」

「お、おう! なんなんだよまったく! 芦屋、そっち支えろ!!」

「は、はいっ!」

二人は魔鳥戦士を肩に担いで、実はすぐそばまで戻ってきていた大黒屋の中へと連れ込む。漆原は小刻みに翼をはためかせて、霧を自分たちの所に寄せつけないようにしながらしんが

りを務め、全員が中に入ったところで扉を閉めた。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

狙った獲物を討ち損じた肉食獣のような咆哮が、君ヶ浜一帯に響き渡る。

「魔王様、霧が!!」

魔鳥戦士を座らせた芦屋が窓の外を見ると、まるで咆哮に薙ぎ払われるように、霧がみるみるうちに引いていった。

数瞬の後に、君ヶ浜は当たり前の夜の風景を取り戻していた。月と、星と、漁火と、町の明かりと、そして灯台。

まるで先ほどまでの出来事が白昼夢だったかのように、寄せては返す波の音以外は何も聞かない。

「カミーオ、カミーオ、しっかりしろ!」

三人は深刻な顔で、傷ついた魔鳥戦士を見下ろす。

「何者かは知らぬが……吾輩に関われば命を落とすことになるう……分を弁えることだ、にん

げ……」

何故か魔鳥戦士の嘴からは、独眼刻印鬼やビーストデモノイドとは違い、外見に似合わず最初から洗練された日本語が流れ出ていた。

「まあ無理ないかな。サタンもアルシエルも、全然外見変わっちゃってるし」

漆原の声に、魔鳥戦士の声が途切れた。

「でも僕のことなら分かるんじゃないの？ 悪魔大尚書カミーオ」

魔鳥戦士は、弾かれたように顔を上げた。

漆原は、よれたTシャツにハーフパンツのジャージ姿で、だが背の純白の翼はそのままに、

魔鳥戦士の前に立つ。

その容貌を見て、魔鳥戦士は息を呑んだ。

「ルシフェル……ルシフェルか!?」

「そうだよカミーオ。相変わらず、僕だけは呼び捨てなのな」

不満そうに眉を聳める漆原に構わず、カミーオと呼ばれた魔鳥戦士は、自分を見下ろす残る

二人の男に視線を移す。

「アルシエル？ ……サタン？ ……まさか、まさか……」

嘴から漏れる声が震えている。

「東方元帥殿……」

「……姿形はこのようになってしまいました<sup>が</sup>、カミーオ殿、私はアルシエルです」

芦屋<sup>あしや</sup>がかがみ込んでその瞳<sup>てんま</sup>を覗<sup>のぞ</sup>き込む。

「では、では、あなたは……あなた様は……」

「カミーオ、一体何があつた？ 話してくれ」

真奥<sup>まおく</sup>の視線と、カミーオの視線が交差する。

「サタン様……魔王サタン様……生きておられた……なんたる、なんたる通り合わせか」

「長らく魔界を留守にして済まない。だが、お前が日本に……この世界に来るとは思わなかつた。何があつた？」

「も、申し訳ございませぬ魔王様」

魔鳥<sup>まちょう</sup>戦士カミーオは、傷ついた体を起こして平伏しようとする。真奥はそれを止めようとするが、カミーオは首を振る。

「吾輩<sup>わがはい</sup>は……魔王様の留守を……守り通すことが、できませなんだ。四天王……亡き北方元帥<sup>けいほうげんすい</sup>殿、南方元帥殿にも願向けできませぬ……」

「どういふことだ？」

「魔王様……魔界は……エンテ・イストラは、再び乱世に突入いたします。吾輩の力及ばず、申し訳……」

「おい、おいっ！ カミーオ！ しっかりしろ！ おいっ！」

カミーオの瞳から、急激に命の灯が消え失せようとしていた。

それと同時に全身に淡い光が宿り、カミーオの体がどんどん小さくなってゆく。

「魔王様、これはっ!!」

魔力喪失による人間化現象が始まってしまったのだろうか。それとも魔力を使い果たしてしまったのだろうか。

固唾を呑んで見守る三人だったが、変化は数秒で終わった。

「何、これ」

漆原は、目を丸くして呟いた。

「……ど、どーすりやいいんだこれ」

真奥も、答えようがなくて呆然としている。

光が収まった後、そこにあったのは、砕けた漆黒の鎧兜、汚れて擦り切れた黒いマント、靴に収まったまま輝きを失わぬ宝剣、そして、

「ちよっとかわいいじゃん」

ぐつたりしながらも傷一つ無い、黒い小鳥だった。



魔王、世界を支配する者



花火大会が霧で中断された夜の翌朝、真奥達は夜明け前に天祢の執拗な電話攻勢に叩き起された。

曰く、大吠に来ておいて水平線から浮かぶ朝の太陽を見ずしてなんとする、ということらしいが、正直真奥的に、どうでも良かった。

美しい光景だとは確かに思ったが、イスラ・ケントウルの魔王城の自室からは、超パノラマでのご来光をほぼ毎日見ていたのである。

漆原など、生気のない目で一応太陽が昇りきるのを見てから二度寝したほどだ。

昨夜の出来事のせいで中々寝付けず、眠気が抜けないのは真奥と芦屋も同じで、一概に漆原を責めることはできなかった。

だが、そんな昨夜の霧が嘘のように、銚子、そして君ヶ浜の天候は快晴。八時前には日なたに出るだけで汗が噴き出る程に気温は上昇していた。

昨夜の時点で千穂から、無事全員旅館に着き、アラス・ラムスの機嫌も直った、ということとは知らされていたので、残る不安は今日どれほど客入りがあるかどうかという点に絞られた。

真奥と芦屋は本格的に店を動かす初日なので、一度目覚めると仕事の準備に取り掛かる。

夏なのでご来光もかなり早い時間ではあったのだが、二度寝してしまうと今度は仕入れの時間までに起きられないと思ったのだ。

朝の六時には天祢が出動してきて漆原も叩き起こされ、四人で店を開く前の最後のチェック

を行う。

果たして、客は来るのか。昨日は千穂や芦屋が懸念したように、全く人がいなかった浜だ。八月一日、真奥勝負の朝である。

そして朝八時には、昨日まで全く人がいなかった浜に、真奥の一抹の不安を払拭するように、多くの海水浴客が押し寄せたのだ。

押し寄せすぎて、浜唯一の海の家である大黒屋の天祢、真奥、芦屋、漆原の四人体制でも全く休む暇がない程であった。

最初は、鈴乃作『砂棲・蒼天蓋』の見事な造形に引き寄せられたお客が店の周囲に人だかりを作った。

そしてその人だかりがさらに人を呼んだ。

午前十時にはもう、芦屋の作る焼きそばの匂いに惹かれて行列ができる有様だ。

調理をしなければならぬ芦屋の手は、持ち帰りの客に対応するだけで完全に埋まる。

真奥と天祢は、テーブルで休憩しながら食事する客への対応に追われた。

漆原と千穂が磨いた椅子を使える席は総数二十。だが、店の少し外の地べたや岩に座るお客にも配膳の手を伸ばしたところ、あつという間に目の回るような忙しさになってしまう。

海を家の食事メニューは、当然ながら鉄板焼きそばだけではない。

不慎れと仕込みの手間を減らすため大きなカテゴリーでのメニューを減らしたが、その分一

か所で調理できる品を増やした。

具体的には、仕込みに時間がかかり、麵のゆで上がりや具の配置に気を遣わなければならぬラーメンをやめ、焼きそばをソース味とシーフード塩味の二種類に増やした。

鉄板を焼きそばに占領されたせいで好み焼きを作れなくなった代わりに、ラーメンを作っていたスペースでカレーを作り、別に炒めておいたチキンとポークのソテーからいずれかを具として選べるようにした。

色画用紙に一枚一品、ドリンクも合わせてメニューと値段を書いて店中に掲示することで、フードメニューの少なさを視覚的にごまかすことにも成功している。

結果、

「ありがとうございますー 四番さんポーク二チキン一の塩燗り三でー」

「三番ソース二塩一、生二、ソース燗り二ー」

「岩二番チキン五ー 今いけるか!? ……すいませんチキン出来立てお持ちしますんで、少しお時間頂戴できますかー」

真央は常に厨房に向けて絶叫するハメに陥っていた。

「ソース燗り」「塩燗り」というのは、テーブルで食べるのとは別に持ち燗りを希望するお客さんのオーダーである。

最初の番号は席番である。岩、と着くのは外の岩に腰かけている人たちのことだ。

「真奥君一番さんの生四つ！ 出られる？ もうポークソテー無いから私肉炒めないと！」

「すぐ行きまーす！ 漆原！」

「無理！ もう無理！」

真奥は漆原の方に助けを求めると、そっちはそっちでパンク寸前だった。

接客素人の漆原でもドリンクとかき氷の二か所を担当でき、かつ漆原自身がヘマをする心配も無い画期的だったはずのシステムは、今全く想定しなかった原因で破綻しかけていた。

真奥が考えたのは、手動のかき氷機をお客にセルフサービスで回してもらい、漆原は料金を回収するだけという、腐爛な経営態度が許される自営業店舗ならではのシステムだった。

扱いが難しい手回しかき氷機だが、アイスクリームを売る設備の無い大黒屋でかき氷を稼働させないという選択肢はあり得ない。

氷は必要量をあらかじめある程度外に出しておき、足りなくなったら漆原が出すことになるのだが、お客さんが自分で氷を削れるエンタメ性のおかげで、うまく氷が削れなくてもそこはご愛嬌で済む。

ただ氷を削るだけでは面倒がるお客さんが多いと判断した真奥は、ある程度採算性を無視し、氷シロップもイチゴ・レモン・メロン・ブルーハワイの四種を用意してセルフサービスかけ放題にした。

その結果、色々なシロップをかけるために、ふんわりうまく削ろうとお客さんが勝手に努力

してくれるのだ。

これなら漆原はお金をもらってかき氷機に氷を入れるだけで、後はお客さんが勝手にやってくれる。

かき氷用のカップとスプーンも大量に発注したので無くなる心配は無いし、あとは恵美に買ってこさせた子供用ビニールプールに氷水を張ったところに色とりどりの缶飲料を放り込んで、その前に漆原を座らせて人間募金箱よろしく機械的にお金を受け取らせればいいと思っていたのだが……。

「今大体十五分待ちー あとイチゴシロップが切れたからそこは納得してー お願いー」

漆原は目を回しながら、かき氷とドリンクの行列に向かって絶叫していた。

「ええー」

「マジでー」

行列に並ぶお客さんの間から、不満の聲が漏れ聞こえる。

ドリンクの売れ行きは芦屋の鉄板に比べればまだ穏やかだが、かき氷の企画が当たりすぎて、逆にお客にこの炎天下行列待ちをさせるといふ不便を強いる結果となった。

何人もが焦れて、熱せられた砂浜の上で陽光に顔を撃め足踏みをしているのが分かる。

なにせかき氷機は一台しかないのである。

氷をうまく削れなかったお客さんから不平が出るのを防ぐため、値段をかなり低く設定した

ことも、漆原が制御しきれない行列を作ってしまった原因だろう。シロップが切れたのも完全に計算外だ。

「魔王様！ 塩切れました！ 次まであと十分です！」

今度は芦屋から悲鳴が飛んだ。

瞬間、行列の中に小さく、不満の気配と声が漏れ出し真奥は慌てる。

「今出てる塩のオーダーこなせるか」

鉄板に走っていったって小声で耳打ちする。

「残り三つで今あるテーブルオーダーにあと一つ足りません」

芦屋の回答は絶望的なものだった。

仕込みの量も完全に見誤った。今までの大黒屋のいい加減な営業スタンスを勘案し、今年の

売上を前年比百五十パーセントと見込んで仕込みもそれに対応した量こなしたのだが、不足もいいところだった。

食材の余裕はあるのに、それを仕込む時間が全く無い。

「真奥君！ 岩一の生二つとコーラ！ ああもうどれ出したんだか出してないんだか分からなくなってきた！」

天祐は目の前に掲げられた待ち伝票の暖簾に目を回している。

通常海の家のおオーダーは、よほどしつかりテーブル席が確保されていない限り、一回の注文

ごとにレジで会計する形式だ。だが、客数とオーダー量を勘案して、それは不可能と判断した真奥が早々に卓ごとの伝票方式に切り替えた。

結果、商売に慣れない天祢が会計ミスしたり、会計回数が多すぎてつり銭が無くなるようなことは無かった。

しかし当初予定していなかった伝票精算方式にしたことで一か所に二重に物を運ぶオーダーミスが頻発した上、

「げ、伝票の予備がねえ……」

伝票の束を早々に一冊使い切ってしまうという想定外の事態が起こる。

「天祢さん、伝票の予備って……」

「あー分かんない！ 買ってあったら真奥君たちが泊まつてる部屋の押し入れにあるかもだけど、長いこと使わなかったから……」

なんでそんな所に置いてあるんだと叫び出しそうになるのをこらえる真奥。

だが、今真奥がホールから離れてしまうと、天祢一人で会計とホール業務とドリンクサーバー管理を引き受けることになる。

既に各所に待たされて不満げな気配を見せるお客さんがちらほらと出てきており、三三六の阿修羅が魔界の魔王でもない限り、状況の解決は不可能な状態だった。

全員、もう顔は真っ赤の汗だく。イレギュラーな事態に対応する余力が全く無い。

真奥の思考がパンクしかけたその時だった。

「真奥さん、伝票探しに行ってください、その間、なんとか私持ちこたえますから」

その声が、爆発寸前の四人の耳に飛び込んでくる。

「四郎殿はソース焼きそばのオーダーを完遂しろ。その間に塩の準備を整えておく。この野菜とイカを刻んで、エビの背ワタを抜けば良いのだな！」

「もしもし、南銚水業さんですか？ かき水機二台、即日リリースとかやってたりします？」

はい、当日料金がかかって全然構わないし古いので今すぐ君ヶ浜の大黒屋に……あ、そうなんですか？ じゃあ、イチゴとブルーハワイを。はい、お願いします……ふう、勝手に判断しちゃったけど、この盛況ぶりなら許容できる出費でしょ？ 一台につきリリース料三千円からですって。おまけでシロップのサンプルももらえるそうよ」

三方向から、光が差した。

真奥は思わず、呆けたように眩く。

「ちーちゃん……鈴乃、恵美……お前ら、なんで……」

自転車操業が限界に達しようとしていた大黒屋に、三人の女神が舞い降りた瞬間だった。

「二番テーブルは……あそこ、はい、ビール二つにオレンジ、ペットのコーラですね！」

真奥の返事待たず、千穂は卓番だけを天称に尋ねて、溜まっていたドリンクオーダーを的確に配膳してゆく。

「とりあえず今あるオーダー分だけのエビだ。キャベツは？ 千切りか？ ざく切りか？」  
 まるで達人の居合抜きのような速度で食材を切り刻みエビの背ワタを抜いた鈴乃は、声屋の横に並んでさつとレシビを一瞥しただけで塩焼きそばを作りはじめている。

「かき氷、行列が結構殺気だつてゐるわよ。何かサービスできるものとかないの？」

恵美が仏頂面で真奥に尋ねてくる。

総合的な熱量が爆発寸前だった大黒屋がざわめいた。

行列と熱気とうんざりしていた様子のお客が、突如現れた水着の女性スタッフの一声に釘付けになったのである。

今まで奥に籠ったＴシャツ姿の天祢しかいなかったこともあり、これに氣を取られない客はそうそうおるまい。

「やはり若さか……」

天祢は人知れず眩くが、そういうことでもないと思う。

千穂はオレンジ色のフリルのついたセパレートの水着の上に、白いパーカーを羽織って日焼け対策のバイザーをかぶり、それがまた「スタッフっぽさ」を演出している。

ドリンクタばかり乗った重いトレンチを器用に操り、都心のマグロナルドで鍛えたフットワークですいすいと客の間を縫って的確に、笑顔で配膳してゆく。

鈴乃は調理場なので腰に前掛けを巻いており、水着も黒いホルターネックタイプのシンプルな

デザインのビキニだが、胸元に付いている白いリボンが紺色の地味な前掛けとマッチして、仕事姿を華やかに見せる健康的な光を放つ。

キャベツを一玉、まるで居合切りのように一瞬でさく切りにしてみせたその瞬間、行列してイライラしていたはずのお客からも拍手が起こった。

そして恵美はバレオと胸元の大きなリボンが特徴の、華やかな南国カラーのリゾートビキニだ。

三者三様に素材の美しさを引き立てる水着を着ているが、真奥の関心は、全く別のところにあった。

「おい、アラス・ラムスは」

「……他に言うことないわけ？」

心持ち不満そうな恵美だが、ほんの少しだけ天祿を警戒するような様子を見せた。

「朝早く起きて水遊びしてたから、今はお昼寝中。勝手にあなた達の部屋に寝かせてもらったわ。起きる頃に私は抜けるからね」

と言いながら、自分の後頭部を指で二度叩いた。

要するに、今は融合状態、ということだ。

それさえ確認すれば、最早悩むことは何もない。

今は彼女たちの協力なくして、この難局は乗り切れないのだ。

「すまねえ！ 少しでも、力貸してくれ」

「はいっ！」

「任せろ」

「言っとくけど、貸しですからね！」

これまた三者三様の答えが返ってくる。

真奥は店内に飛び込んで、表面が少し結露した段ボール箱を四つ持って現れ、それを恵美に押しつける。

「これ、在庫含めて全部使っていいから、今いるお客さん全員にランチタイムだけのサービスだつって配ってくれ！」

オロチミンCの予備だった。

四ケースを配ると、仕入れ値にして五千円近く損失が出る計算になるが、今はそんなことは構ってられない。

今いるお客さんにしかるべきサービスを提供すれば、そんな損失は軽く取り返せる。

逆に今それを淡れば、明日以降更に大きな目に見えない損失を生むかもしれないのだ。

恵美は思った以上に素直に、焼きそばとかき氷に行列してやや機嫌が悪くなっているお客さんの間を歩き回り、

「お待たせしててすいませーん。こちら、ランチタイムのサービスでーす！」



堂に入つた世業スマイルで愛想とオロチミンCを配り歩きはじめる。

現金なもので、男性客は恵美の水着姿に鼻の下を伸ばしているし、炎天下なので冷えたドリンクのサービスを嫌がる客もいない。

日頃もあれくらい笑顔でいれば、少しは可愛げがあるものを。

正直なところ真奥には、彼女たちが水着姿であることよりも、颯爽と現れて窮地を救ってくれたことの方がずっと嬉しいサプライズだった。

「すぐ戻るっ！」

わずかに猶予を得たことを確認した真奥は無くなってしまった伝票の予備を探すために、一旦バックヤードに下がった。

悪魔三人の下宿部屋の押し入れには、確かに随分前から置かれていたらしい段ボール箱がいくつもあった。真奥は部屋の扉を開けて、一瞬エアコンの涼しい風に息をつく。

段ボールがしまつてある場所は把握済みだ。なぜなら昨夜、大慌てで空の段ボールを勝手に引きずり出したからだ。

「……カミィオ、生きてっか？」

部屋の片隅、直射日光もエアコンの風も当たらない場所に置かれている大きな目の段ボール。その中を覗き込んで真奥は声をかけた。

「さ、サタン様……………びい」

箱の中で、黒い小鳥がもぞもぞと気だるげに動いている。

「ぶ……あ、いやすまん、生きてるならいい。また後で様子見に来るから」

真奥や芦屋が魔力減衰のために人間になってしまったのとは異なる作用なのだろうか、どういうわけか、カミーオは人間にはならず小鳥になってしまったのだ。

口調も声も、昨日の魔鳥戦士の重々しいそれなのに、なぜか言葉の前後に必ず「びい」と、当たり前の鳥の鳴き声が続くのがなんともおかしい。

「ご心配をおかけしてびい……申し訳びい」

「いいからいいから、あんまお前にしてやれることって今無いからさ、本当に飯とか食わなくて大丈夫か？」

「かたじけのうございます……びい……魔力が、完全消滅したわけではございませぬので……びい……びい」

「くく……わ、分かった、じゃ、また後でな」

「は……びい」

体を休められるよう、段ボールの中にタオルを何重にも敷き詰めた真ん中で、小鳥になったカミーオという名の悪魔はぐったりと横たわっていた。箱の中には水を張った器を入れてあり、エアコンは寒すぎず暑すぎず高めの二十九度に設定。

普通の鳥ならもうあとは死を待つばかりの状況だが、瀕死の九官鳥に見えるこの悪魔は、そ

の実、正体に気づいた芦屋が敬称を使うほどの大悪魔なのである。

悪魔大尚書カミーオ。

悪魔大元帥と呼ばれているアルシエルとルシフェルが軍人なら、カミーオは文官とも言うべき存在であつた。

魔界に属する悪魔全てが魔王軍としてエンテ・イスラ侵攻作戦に従軍したわけではなく、むしろ大半の悪魔は魔界に留まつたままであつた。

真奥が作りだした、魔界最初の国家とも言うべき組織を、エンテ・イスラ侵攻中のサタンの名代として管理する役目を負っていたのが、悪魔大尚書の命を拝した彼、カミーオだったのだ。真奥の代理人として魔界で魔王に等しい権限すら振るえるはずのカミーオが何故日本で傷だらけになっているのかは、本人が語る前に力尽きてしまったので不明のまま。

カミーオがびいびい囁きながら気がついたのが今朝のことで、その時にはもう漆原も二度寝から目覚めて営業開始に向けて動きはじめていたので、未だ詳しい事情を聴き出すには至っていないかつた。

だが本当の姿を失うカミーオの言動から見えて一つだけ確かなことは、カミーオも、霧の中で消えた独眼刻印鬼もビーストデモノイドも、魔王サタンと悪魔大元帥アルシエルを探しに来たわけではないらしいということだ。

ならばその目的はなんなのか、何故銚子に現れたのか、何故悪魔の形状を保つたままでい

られるのか、謎は尽きない。

しかし、今は残念なことに、まことに残念なことに、それを追及している余裕は無い。

表では、真奥の帰りを信じて戦場を支える千穂達が待っているのである。

「俺には、戻らなきゃならない戦場がある！」

身を切られる思いで表に戻ると、なんとも手回しの早いことにリリースのかき氷機が二基、到着しているではないか。

恵美が電話をかけてから、二十分も経っていない。土地勘が無いので分からなかったが、意外にとっても近場にあつたりするのだろうか。フットワークが軽い南銚水業に心の中で礼を述べる真奥。

「漆原！ 氷は私がやるから、あなたは行列整理とドリンクに専念しなさい！」

「お前が僕に命令すんなっ！」

恵美の指示に漆原は文句を言うが、その判断は正しい。店の表に近いポジションにビジネスアールの意味で見目麗しい恵美を置きたいのはやまやまだが、彼女はあくまでジョーカー的ピンチヒッターだし、何より漆原のためにならない。

無言で抗議の視線を送ってくる漆原を真奥は無視し、千穂と天祢に一冊ずつ伝票を渡してオーダーと会計に回せる手を増やして自分の仕事に戻った。

溜まっていたオーダーを消化しはじめた頃には、鈴乃はシーフード塩焼きそばを完全復活さ

せ、今は巨大な寸胴鍋の前で、売り切れ寸前のカレーの新たな仕込みをしているところだ。

この体制なら、なんとかランチタイムを乗り切れる。

今日の失敗は千穂達のおかげで挽回できた。これを教訓に、明日以降、彼女たちの助けを借りなくて済むよう至らなかつた部分を補わなくてはならない。

結果論ではあるが、取り返しのつく失敗なら、取り返せるうちに沢山しておけば、最終的に損にはならないという木崎の言葉を本当に実感できた初日だった。

午後三時。

全てのオーダーが途絶え全員が息をついたのは、そんな時間になってからだった。

テーブル席が全て空席になり、鉄板の隅に焼きそばが余るようになり、真奥は空いた椅子にどっかりと腰を下ろした。

「つつつかれたああああ！」

思わずそう漏らすと、

「はい、真奥さん、天祐さんが」

千穂が、よく冷えたオロチミンCを差し出してきた。

「ああ、ありがと」

受け取ると封を開けて一気に喉に流し込む。

「き……………つくうう」

よく冷えた炭酸が一気に喉を駆け抜け、こめかみがかすかに痛むのも心地いい。

「でも、本当にありがとな、ちーちゃん。来てくれなかったらもう完全に俺達終わってたかもしれないね。本当に苦勞と心配かけっぱなしで悪いな」

隣の椅子に腰かけた千穂に、真奥は頭を下げる。

「役に立てたなら良かったです」

「明日から、ちーちゃん目当ての客とか来るかもしれないぞ？ 水着、似合ってるじゃん」

「…………へ？」

お礼からの褒め殺し。千穂は、真奥があまりに自然にそう言ったので、ワンテンポ遅れて顔を赤くする。

「あ、あ、あの、ありがとう……………ごさいます。その」

千穂は急に真奥が正視できなくなり、足をもじもじさせながら自分の手元のオロチミンCに視線を落とす。

「似合って……………ます？」

「ん、だからそう言ってんじゃん。持ってきてたんじゃ……………ないよな」

千穂はふるふると首を横に振ると、ソテーを作るフライパンを磨いていた天祿と目が合う。

真奥もつられてそちらに目をやると、天祿が何を考えたかサムズアップ。

要するに、出所はそこ、ということだ。いつの間に。

「最初は遠慮するつもりだったんですけど……ちよつと可愛い水着だったんで、その……ま、ま……」

真奥さんに見てはしくて、と言いたい千穂だったが、何かそれを口にするのがとてもはしたないことのような気がして、また顔を赤らめてうつむき加減になる。

「そうだよな。折角海来たんだったら、ちよつとは泳いでおきたいよな」

千穂が呑み込んでしまった言葉を、真奥はごく自然な流れに解釈した。

「そ、そ、そうなんです！ あ、あはははは」

千穂は顔を赤らめたまま、ついその流れに乗ってしまい、

「はあ……」

思わずため息を漏らしてしまう。

「本当は、お店の売り物だったらしいんですけど……」

「え？ マジで？」

真奥が天祿を振り向くと、天祿はサムズアップしたままわざとらしくソツポを向いた。

フードやドリンク以外にも、日焼け止めやレジャーシート、浮き輪やビーチボールなどの商品もある程度の数置いてある。

だがその中で、水着は大変に扱いづらい商品だ。商品の中では高価格帯に位置しているのに、基本的に売れない。

忘れ物に当て込んだ観光地価格な上に、そもそも盛夏の海水浴場に水着を持ってこない人は、本当に泳いだり日焼けしたりするつもりが無い人ばかりだ。

海水浴を満喫するつもりで水着を忘れたごく少数のうっかりさん、その中でも町に引き返してちゃんとした水着を買おうとする根性の無い人、さらにその内の金銭的に余裕がある人にか売れないという、大変に在庫になりやすい商品なのである。

だからと言ってそれを気前よくプレゼントしてしまうのも店主の態度としてはどうかと思うのだが、そのおかげで千穂達が働くだけでなく夏のレジャーを楽しめているのだと考えれば一概に責めることもできない。

何より、真奥が素直に口にしたように、本当によく似合っているのだ。

「ま、ちーちゃんが着るなら水着も本望だろうさ、本当、よく似合ってるよ」

「あ、あう……はい、あ、ありがとうござ……」

「おいおい真奥君よ、君、さつきから聞いていれば、ちょっと鼻<sup>はな</sup>が過ぎないかい？」

千穂がいましも発火せんばかりに真っ赤になっているところにすり寄ってきたのは天祿だった。

「私達を助けてくれた女神は千穂ちゃんだけじゃないんだぜ？」

言いながら天祢が視線を飛ばす先では、惠美と鈴乃が何事かとこちらを見返している。

「あー……まあ、その、あれだ」

確かに天祢の言うことは最もだ。昨日はもちろんのこと、今日だって惠美と鈴乃の助けなくしては乗り切れない場面は多くあった。だから、真奥は座ったまま二人に向き直ると膝に手をついて頭を下げた。

「助かった。感謝する」

思いがけず素直な感謝の言葉に、惠美と鈴乃は息を呑んで顔を見合わせた。

「……私は昨日と同じ、貸しを作っただけよ。感謝される謂れはないわ」

「惠美殿の言う通りだ。我々としても、貴様らが失態を重ねて失職されては面倒だから手を貸しただけで、見返りや感謝を求めているわけではない」

真奥は素直に礼を言ったのに、まことに素直でない反応。それも予想していたことだったの  
で殊更に感謝を重ねるつもりはなかったが、取まらないのが天祢である。

「おいおい、それだけかい？ それだけじゃないだろう？ もう一押ししたまえよ」

「は？ もう一押しって何がですか？」

「何がですかじゃないよ真奥君よ。千穂ちゃんも確かにいいものを持っているがねえ、うら若き乙女があと二人、珠の肌を惜しげもなくさらしておるのだよ。少しは奥さんも褒めてやらにやあ、浮気を疑われてしまうぜ？ 千穂ちゃんは私の提供だが、彼女たちは自前だ。きちんと

褒めてやれば、得点高いぜ？」

天祿に罪はないのだが、真奥達の間の人間関係でこれほど空氣の読めない発言もあるまい。

「えー……？」

真奥は心底困った顔で、なんとなく微妙な雰囲気を感じ出す惠美と鈴乃の背を見る。

というか、何故二人共申し合わせたようにこちらに背を向けているのか。疑問に首を傾げながらも真奥は、大変に素直な言葉を口にした。

「その、今日のことを感謝はするけど、褒めるトコもないっつーか、褒めても意味ないっつーか、お前から最初からそこまでレジャーする気満々だったのかと逆に呆れるっつーか……」

水着が女性にとつては思い切ったファッションであることと、それを褒められて悪い気はしないという一般常識は理解できる。惠美も鈴乃も、水着姿が美しい部類に入ることとは真奥としても認めるにやぶさかではない。

だが、個々人の関係性に於いて、惠美や鈴乃が真奥に褒められることを望んでいるか否かと言われれば、どう考えたって絶対に否だ。

なのになぜだろう、真奥の、状況を的確に捉えたはずの言葉に惠美と鈴乃の背が一瞬びくりと震え、黒いオーラのようなものが立ち上っている心象風景が見えた。

「……あんたの目は節穴かい？」

それだけ聞けば酷薄と言わざるを得ない真奥の言葉に、天祿は開いた口が塞がらない。

「まお……真奥、様！ ちょっとー」

だが、なんとそんな真奥に諷言したのは、意外にも芦屋であつた。

「正直すぎます！ ここは節を曲げてでも褒めるべきです」

「は？ だつてお前、俺が褒めたつて……」

「誰がということは問題ではないのです。ミミズやオケラやアメンボに褒められたつて悪い気がしないのが女性というものです！ それをなんですか褒めるところが無いなどと。遠佐など確かに褒めても佐々木さんのような素直な反応は到底望めませんが、内心複雑な心境になるはずです！」

「お、お前なあ、色々酷いぞ。今のお前本当酷いぞ、ミミズだオケラだつてお前……」

「まして鎌月など、不本意ながら毎日世話になつて居るのです。社交辞令でも褒めておけば今後我らの障害が減るかもしれながうっ！」

必死の形相で真奥を説教する芦屋が、突然目を向いて砂浜に倒れ伏した。

真奥も千穂も支えることができずに身を引くが、芦屋の後頭部には焼きそばのヘラが、足元には妙に大きい氷の塊が落ちていた。

「我々は別に貴様らに褒められたいなどとこれつつつっぽつちも思っていない!!」

「ええええそうでしょうとも。褒めるところなんかどこにもありませんわ。分かつてるわよそんなこと」

鈴乃と恵美の、悪魔よりも悪魔のように冷たい視線の十字砲火が、真奥を貫いていた。

無意識のことなのだろうが、二人とも自分の胸元をかばうように腕を組んでいるのが涙ぐましい。

真奥にしてみれば、特に褒めようとは思わないが気にするほど無いわけじゃないだろうと言いたい、今さらそんなことを言えば水に液体窒素をかけることにしかなるまい。

「真奥君、芦屋君、君たちには失望したよ」

勝手に火をつけておいて勝手に水を差す天祢は白々しくそう言つて、そそくさと店の奥へと逃げてゆく。

「あは……あははは、あの、鈴乃さん、へら、あの、へら……」

この場合、一番の被害者は、間違ひなく何も悪いことをしていない千穂である。

「千穂殿」

「は、はい……」

千穂が芦屋の頭から引き抜いたヘラを受け取った鈴乃は、それを流し台で洗ってからほんの少しだけ恨みがましい目を、千穂の胸元に向けながら言った。

「今さらだが、やはり考え直したほうがいい」

千穂には答えようがあるはずもなかった。

「で、やっぱ褒めた方がいいものなの？」

早い段階で落ち着いていたドリンクスペースで、一人戦火から遠い所にいた漆原は、どこか憤然とした様子でかき水機の隙間に詰まった水カスを落としている恵美に悪意百パーセントで尋ねる。

「殺されたい？」

手に持ったアイスピックで刺殺するぞという意味の返事が返ってきた。

「そっか、分かった」

漆原は、芦屋の言うことが結構凶悪だったのではないかと推測を立てるが、そこまで口に出してしまうと本当に命が危ないので自重する。

そして漆原は勝手に商品の缶飲料を取って勝手に開けて完全休憩モードに入ってしまった。『……ちよっと、手が空いたならかき水機の周り掃除しなさいよ。水カスを放ったまま乾かしたら、錆びちゃうでしょ。なんで私がやってるのよ。斬るわよ』

本来自分が受け持つべき場所を恵美にまかせっきりでのんびりしている漆原に、先ほどの空気を引きずった恵美の文句が飛ぶ。

漆原は顔だけ振り返って、部品と部品の間に詰まった水をピックで取り除いている恵美に声をかけた。

「ところで遊佐、丁度いい機会だから、聞いておきたいんだけどさ」

「何よ、突然改まって。褒めたりしたら斬るわよ」

「それはもういいから。それよりさ」

漆原は大きく喉を鳴らして一口炭酸を飲む。

「うえっぶ……お前、オルバのこと、どう考えてるわけ？」

緊張と沈黙が二人の間を支配した、と言うにはあまりにも周囲は騒がしく明るかった。

「本当にいきなりで突然で下品ね。……どう考えてるって、どういうことよ」

「別に、深い意味は無いよ。ただ、あいつが日本の警察に捕まったまま大人しくしてると思うほど、お前も楽観的じゃないだろ？」

「そりやそうだけど……。でも、オルバが今どこにいるかなんて私には分からないし、分かったところで何もできないわよ」

「僕が、知ってるって言ったらどうする？」

相変わず、波も、砂浜も、海の家に集まる面々も皆、それぞれの事情で騒がしい。

「何を……言って」

「オルバは今、渋谷管内の留置所で起訴中だよ。場所は特定できないけどね。とりあえず銃刀法違反と器物損壊で起訴されたみたいだけど、僕らが起こした連続強盗と関連付ける証拠が出るまでの繋ぎの措置なんだろうね」

「な、なんでそんなことあなたが知ってるのよ」

「公的機関をハッキングしたとかじゃないよ。知ろうと思えば誰でも知れる。手続きは面倒だ

けどね。特にオルバは外国人として逮捕されたみたいだし、起訴前の容疑者の扱い方なんか、結構人権団体がうるさかったりするんだよ。実際、最近冤罪事件多いでしょ？」

これで意外と漆原なりに日本の社会のことを学んでいるのか、と一瞬感心した恵美だが、

「その人権団体のデータをハッキングしたんだ」  
一瞬でその感慨は打ち消された。

「……まあ、私はよく分からないけど、でも留置所って、何日間しか入れてちゃいけないって法律無かった？」

「へえ、よく知ってんじやん」

「これでも、職場で話題を合わせるためにドラマくらいは時々見るのよ。『相方』のシーズン六で、主役の一人が卒業したのがショックだったわ」

時代劇だドラマだと言いつつこの勇者、その内深夜アニメでも見はじめると敵ながら心配になってくる漆原。

「そこ、お前が誇っていいところじゃないからね。あ、はい百二十円。どうも」

漆原はため息をつきながら、やってきた客にコーラを一本手渡した。その動作が、いつの間にかかなりスムーズになっていることに本人も恵美も気づかない。

「……実際には、拘置所が満員で起訴後も留置所にいっぱなしてケースが結構多いんだ。オルバも、今起訴されてる内容は極端に重いものじゃないから拘置所の空き待ちらしいね。ただ、

問題はそんなとこじゃない」

漆原は、彼にしてはいつになく真面目な表情になって続ける。

「エンテ・イスラでお前らに負けた後、僕があいつの誘いに乗った理由は二つある。一つは単純に命を助けてやるって言われたからさ。お前らに負けたら、僕は行く場所が無くなるし、マラコーダとは折り合い悪かったし、大体お前らが僕のこと見逃すはずないしね」

「……きちんとどめを刺さなかったことを、今でも後悔してるわ」

「おいおい、アラス・ラムスがまた悪い言葉覚えちゃうぞ……って、あれ、そう言えばアラス・ラムスは？」

「店の裏のあなた達の部屋、と天祢さんには言ってるわ。実際はここ」

と、恵美は自分のこめかみを指差す。

「さびしがつて泣いたりしないわけ？」

漆原にしては、意外にもまともな質問。

「今日は朝からご来光見るんで早起きしちゃったのよ。ここに来るまではいっぱい水遊びしたし、だから今はお昼寝中……で、もう一つはなんなの」

「なるほどね。……前に真奥も言ってただろ。天界への橋渡しをするって言われたからさ」

かつて笹塚駅前で、敵として向かい合った漆原と恵美達。今、千葉の砂浜で大騒ぎしながら一緒に商売をしているなど、全く想像もできなかった。

「魔王軍は壊滅した。かと言って人間の世界にはいられない。あと僕に残された可能性と云えば、天界に戻ることにくらいしかなかった。あいつは言ったんだ。自分には天界と交渉できるだけの材料がある、ってね」

「天界と、交渉ですって？」

「僕自身が、その交渉材料の一つだって言ってたよ。要するに、伝説に語られるほど大物の墮天使を改心させて天に戻したってなれば、聖人すっ飛ばして、天使に引き立てられたっておかしくない功績だろ？」

物は言いよう、というやつだ。その理屈ならば、真奥はこの墮天使以下の駄天使を、一介の労働者として働かせたのだから、天使に取り立てられるほどの人材と言える。

「そして、もう一つ、奴が切り札にしたのが、エミリア、お前さ」

「私を？」

想定しなかったところに自分があてはめられて、惠美は驚いて作業の手を止めてしまう。

「もちろん、あの時真奥が言ってたみたいに、単純にお前の存在が邪魔だったってのも本当なんだろうけどさ。それならエメラダ・エトウ・ヴァやアルバート・エンデを捕まえたくせして生かしておいたってのもおかしい話だ。エメラダは大帝国の重鎮だろ？ そんなことすりゃ、後になってモメるのは分かりきってる」

「確かに、そうね」

実際に、エメラダが復帰した神聖セント・アイレ帝国と、大法神教会との関係は、徐々に悪化しつつあると、以前エメラダ自身が電話で言っていた。オルバの行いが明るみになりかけて教会の暗部の臭いが漏れたことで、西大陸国家の公正性が疑われ、中央大陸復興に関する他大陸との利権争いでやや劣勢に立たされているらしいのだ。

「これだけ確認しておきたいんだけどさ。お前の聖剣と、破邪の衣の元になった。進化の天銀。誰が管理してたの？」

それを尋ねられて、惠美は思わず血の気が下がるのを感じた。

「……オルバのいた外交・宣教部よ。聖具の扱いは、宣教部門が全部管理してた……聖具は司教座や、教会建設の要なもの」

「やっぱりね……多分、あいつ知ってたんじゃないかな。進化の天銀が、イエソドの欠片だってこと。他にあいつの周りに、天界と交渉できるような材料って見当たらないんだよね」  
惠美が思わずわが身を抱きしめ身を震わせたのは、決して水で冷やされたからではない。

「僕ら魔王軍と戦うために、勇者には聖剣と破邪の衣を持たせなければならぬ。でも、サリエルやガブリエルと違って、あいつはお前の体に融合させた。進化の天銀が簡単には離れないことを分かっていた。全部終わったからってお前が素直に返してくれるとも思えないし、それこそお前が復興政治の先頭に立つたりすれば、教会の求心力が落ちてイエソドの欠片も戻ってはいかない……」

「……そもそもオルバはどうして天界とそんなに接触したがるのよ？」

「そこまでは知らないよ。ただ、それだけ色々な材料持つてるオルバが、このまま大人しく日本で刑務所に入るとはどうしても思えないんだ。今まであまりに気にしなかったけど、今回僕自身が外に出ることになって色々真面目に考えて、ちよつと不安になった」

「……ルシフェル……」

「もし今あいつが突然に暴れたら、今度発売する G S P のモンスターキャプチャーの本体同梱版新作買えなくなっちゃうし」

「……………」

やっぱりダメねこいつ。色々ダメだわ。

「口に出てるぞおい」

「あ、あら？」

「大体、聖剣とか本来はお前の問題なんだからな？ もうちよつと真面目に考えろよ」

「うるさいわね。だからこうして、せつせとあなた達に貸しを作ってるんじゃない」

「なんだよそれ。大体、お前と真奥は全部済んだって思ってるみたいだけど、僕はガブリエルが素直に引き下がったわけがないと思ってるからね。あいつ、ネチっこくてしつこいので有名なんだから」

「それは……私だって分かってる」

恵美はふと視界の端で真奥と千穂を見て、複雑な声色で言う。

千穂に心配されてしまったように、恵美は自分で気づいてガブリエルや天界の未知の脅威に対して、確たる対策を取ったわけではない。

「でも、今の私とアラス・ラムスなら、何度来られたって負ける気はしないけど」

「それは個人で喧嘩した場合だろ。昨夜のことだってそれに関係ないとも限らないし、向こうが変な策を巡らせてからめ手で攻めてくることだって……」

漆原としては、昨夜の悪魔襲来を、当然恵美や鈴乃も感知しているものだと勝手に踏んでいた。だが、

「何よ、昨夜のことって」

恵美は不審げにそう問い返してきた。

「……え？ 気づいてないの？」

「だから何が」

昨夜のカミーオの魔力は、決して小さいものではなく、漆原も大技ではないが聖法気を使っている。

恵美達が昨夜どこに宿泊したかは知らないが、純子市内であるなら気づかないはずがない。

「おおい、恵美、ちよっと」

漆原がさらに言い募ろうとしたとき、千穂と話していた真奥が恵美を呼ぶ声がした。

顔を上げると先ほどまで浮ついた会話をしていた真奥と千穂が、どこか真剣な様子でこちらに駆け寄ってくる。

「今ちーちゃんに聞いたんだが、お前ら、大炊埒に宿取ってるんだよな。昨日の夜に霧が出たとき、何も無かったって本当か？」

「何も無かったって……何について聞かれてるのかよく分からないけどなんの話？」

真奥と漆原は顔を見合わせると、少し声のトーンを落とした。

「昨日の夜、魔力や聖法気を感じしなかったかって聞いてるんだ」

「は？」

真奥は、奥の方で食器洗いに忙しい天祢の様子を窺いながら、恵美に言う。

「ちよっと、裏の部屋ついてこい……天祢さん！ちよっと裏行つてきます！」

「あいよー」

天祢は振り返らずに答える。

仕事が終わったわけではないので表の様子は漆原に任せ、三人は領き合つて店の裏手の下宿部屋へと向かう。

途中、昏倒したままだった芦屋を叩き起こすのは忘れない。

表に出ると、どうやら鈴乃は店の隣の「砂棲・蒼天蓋」の、乾燥して浜風に煽られて壊れた部分の修復に取り掛かっているようだ。

水着姿でそんなことをしていたものだから、ギャラリーに囲まれてしまっている。本人もまるで戦人のように周囲の視線に構わず作業に打ち込んでいる。

なかなか絵になる構図だが、彼女の立場的にそこまで目立っていいものだろうか。写真でも撮られて困っているようなら、バリケードでも作って助けに入ろうと思いつきながら真奥は二人を裏の部屋に上げる。

「あ、起きそう」

部屋に上がった途端に恵美が何かに気づいたように顔を上げ、畳の上に座る。

自然と赤ん坊を抱く手を作ると、そこにすっぽり嵌るようになして恵美の体から光の粒子が分離し、やがてアラス・ラムスの形を取った。

「便利だな。世の母親が羨ましがりそうだ」

「自分が寝てる最中に頭の中で夜泣きされてもいいなら、融合子育てのコツをブログで発表してもいいかもね……アラス・ラムス、起きる？」

「んむう……むゆ……」

恵美の腕の中に出現したアラス・ラムスは、もぞもぞと動きながら虚空に手をばたばたさせる。その手には、昨日千穂からもらった鳥かご花火の玩具が大事そうに握られていた。

恵美が空いた手に自分の手をそえと、小さな手が恵美の指をきゅっと握って、ゆっくりと目を開ける。

「おはよ、アラス・ラムス、おむつ大丈夫？」

「あよござやます……う、だいじよぶ」

恵美の問いに、アラス・ラムスはぐしぐしと目をこすりながらもごもごと答える。

「アラス・ラムスが起きちゃったから、私の手伝いはここまでね」

恵美がアラス・ラムスを抱き上げながら言うのと、真奥も特に異論は唱えず頷いた。

「ああ、助かった。でだ、見てもらいたいののは、あれなんだ」

真奥は部屋の隅の段ボールを指差す。その後ろには、何やら汚れて擦り切れた黒い布で實巻きにされた長いものが立てかけられている。

千穂も恵美もその箱の中を覗き込むと、

「あ、かわいい」

千穂が思わずそう呟いた。

「びいびいうごいた!!」

恵美の代わりに、アラス・ラムスが触れたそうに手を伸ばす。

「だめよアラス・ラムス、触っちゃ。大分弱ってるみたいだから……」

「びい……びい……サタン様? ……お勤めは、終えられたのですか? ……びい」

「!?」

「びいびいとりさん!」

黒い小鳥が突然喋ったので、千穂も恵美も思わずのけぞるが、アラス・ラムスは大喜びである。放り出されてしまった花火の玩具の鳥かごがなんとも物悲しい。

「こーら、アラス・ラムス、千穂お姉ちゃんにもらったものだろ。大切にしなさい」

真奥一人、三人の反応を楽しむような顔で、玩具の鳥かごを拾ってアラス・ラムスの手に再び握らせた。

『びい……むむ……人間の気配。サタン様……びい、この者たちは？』

見た目が小鳥で可愛いらしい囁き声なのに、随分重々しい喋り方をするので妙に不気味である。

「……九官鳥か、何かかしら」

「可愛い……ような、そうでないような……」

千穂と恵美は真奥に、これは一体何事かと問う。

それに対する真奥の答えは、二人に衝撃をもたらした。

「こいつは魔界の悪魔だ。昨夜の霧の中、突然空から降ってきたんだよ」

悪魔大尚書カミーオ。恵美は、そんな悪魔の名前も役職も聞いたことがなかった。

そもそも悪魔の口から「内政」などという言葉が出てくるとは思いもしなかったのだ。

曰くこの黒い小鳥カミーオは、真奥が魔王として覇業を開始する初期の頃からつき従ってい

た軍師であつたらしい。まだ魔王軍などという統率された組織も無く、芦屋も漆原も真奥のことなど知りもしなかつた、混沌が魔界を支配していた古い時代。

魔界の統一を目論んだサタンは、カミーオを三顧の礼を用いて、軍隊と呼ぶのも恥ずかしい小規模な戦士団の軍師に招聘したのだという。

なんの力も持たない人間からは強大な存在ではあるが、カミーオは特に悪魔としては高位の存在ではなかつた。

だがカミーオは、腕つぶしと凶暴さが全てであつた魔界の中で、中には人間以下の力しか持たない者もいた一族を率いて生き残つていたのだ。

そのことに目をつけたサタンは、生き残りの術を知るため、カミーオを招いたと言う。

当初弱小部族の若者であつたサタンのことなど歯牙にもかけていなかったカミーオだが、最終的にサタンの見識に感化されて軍門に下つた。

もちろんサタンの見識とは、彼が幼い頃に出会つた天使によって授けられたものである。

「カミーオがいなきゃ、魔王軍なんてものは、絶対にできなかったと思う」

とは真奥の弁。

その一言だけでもカミーオは恵美達エンテ・イスラ人にとって万死に値する相手だが、とにかくカミーオは魔界でも数少ない、説得や交渉に長けた悪魔だつた。

カミーオは魔界のあらゆる部族の言語や習俗に精通し、自然の声を聞くことができた。

君ヶ浜に落ちてきた当初から当たり前のように日本語を用いていたのも、そのあたりが理由なのかもしれない。

彼のアドバイスで、当時のサタン達は強敵を回避し、ときには部族を災害から救い、その交渉術により、仲間を少しずつ増やしていった。

そして、サタンとカミーオにとって一大転機となったのが、何を隠そう、アルシエルとの出会であった。

サタンやカミーオと同じく、アルシエルは「力」をより輝かせる「知」で勢力拡大を狙う豪族の長であった。

その頃、そこその規模に膨れ上がり、名も知られるようになっていたサタンの部隊は、異種族が一所に集まったがために内紛の火種を抱える頃合いでもあった。

だがアルシエルの加入により、軍事的な勢力拡大をアルシエルに任せ、カミーオは部隊内の調停役をすることで、今まで以上に組織としての力が上昇。気がつけば魔界各地から多くの悪魔達が仲間入りを志願してくるほどの一大組織に成長していた。

「カミーオが立案した組織改革案の中で、俺が驚いたのはワイバーンのライセンス制だ」

「ワイバーンに、ライセンス？」

「ワイバーンで、なんですか？」

恵美と千穂は、違う理由で首を傾げる。

ワイバーンとは、魔王軍が戦場で駆っている騎乗魔獣の一種である。巨大な空飛ぶ蜥蜴、というのが最も適した表現だが、あれに乗るのに一体誰がどう免許を出すというのだ。

「ワイバーンは個体数が多い。効率的な戦闘を行うために、ワイバーンを操る術に長けた悪魔達を選び抜いて、勲章、という形でワイバーンで戦う資格を与えたんだ」

そのことで、ワイバーンを操ることがサタンの部隊の中で一種のステータスのような形になり、悪魔兵の向上心や統率力が飛躍的に向上したらしい。

「……」

惠美としては、魔界の悪魔がそこまで高度な社会性を持っていたことにただただ驚くばかりである。

最終的にサタンが魔界を統一して魔王を名乗り、エンテ・イスラの覇権を目指して進軍した際、カミーオはサタンの代理人として、残った魔界の住人を統率する役目を負っていたというのだ。

そのカミーオがどうして千葉の君ヶ浜に、悪魔の兵士たちと共に落下してきたかはまだ聞き出せていない。

もちろん惠美にしてみれば、まず話そのものが信じられないわけだが。

「本当にこのカミーオのような悪魔が三体も、昨夜の霧の間に君ヶ浜に来てたって言うの？」

「びいびいだっこー」

アラス・ラムスは、花火の紙細工とは違う本物の小鳥になんとかして触りたいようだが、恵美が深刻な顔をしつつも器用に抑える。

「独眼刻印鬼もビーストデモノイドもどちらかと言えば肉体派だけど、君ヶ浜と犬吠埼の距離で感知できないなんてことはまず有り得ないわ……」

「そうだろうな。俺だって最初、お前らがスッ飛んでくるものだとはばかり思ってたよ。だけど、こいつら痛めつけたのはお前らじゃないんだろ？」

「そうだったとしたら、その場でトドメ刺してるわよ」

「つまり……真奥さんでも遊佐さんでもない誰かが、異世界の魔界から来た悪魔達をやっつけちゃった、ってことですよね」

千穂の総括に、真奥は頷く。

「俺、後であの灯台に行ってみようと思うんだ」

「犬吠埼灯台ですか？ 私達、午前中行ってきましたよ？」

「は!?」

千穂は確認するように恵美を見ると、恵美も頷く。

「お金払えば入れるのよ、あそこ。一番上まで階段で上がることもできるわ。昨夜鳴った霧笛の霧信号所もちゃんとあった。でも私達が気になるような特別なものは無かったけど」

昨夜霧が出て、霧信号所の霧笛が鳴った。それだけが、真奥達と恵美達の共通認識だった。

「階段に貼はつてあつた『頂上まであと何段だよ!』」つて言つてゐる灯台とうだいのキャラが可愛かわいかつたです」

惠美えみの言う特別なものとは、そういう観光地ほっこりコラムのような話ではない。

「霧きりが出て、こいつらが現れて、霧に巻かれて、光に照らされて消えたんだ。霧信号所きりしんごうじょがある灯台とうだいが関わかかわつてないってほうが無茶じゃないか？」

「でも、ここは日本よ。エンテ・イスラみたいのに、夜通し灯台の上で番番をしてる灯台守とうだいしゅがいるわけないし、大体あれはずっと昔に日本で作られた灯台でしょ？ そんな法術ほうじゆつや魔術まじゆつみたいな力持つてゐるわけな……」

惠美が反論しようとしたその時だった。

「ビィィエエエエエ!?」

「びいびい!」

カミーオが、突然甲高い叫きこび声を上げたのだ。

大人たちが真面目まじめな話をしている間、惠美の手をかくぐつてはカミーオ（というより小鳥）に触れたがつていたアラス・ラムスが、立った尾羽を思い切り揺ゆんでカミーオを引っ張り上げたのだ。

「ちょ、アラス・ラムスちゃんダメよ!」

「びいびい、だめ?」

「は、離せこの、人間の赤子のくせにー びいー」

アラス・ラムスに掴み上げられて叫ぶカミーオだが、ハチドリのように羽をばたつかせてびいびい言いながら甲高い声で騒ぐその姿は、魔界最高の文官、悪魔大尚書と名乗るに全くふさわしくない。

「こ、こらアラス・ラムスー ダメよー ほら、小鳥さん痛い痛いって言ってるでしょー」

「い、痛い、痛い尾羽が千切れるー びいー」

生き物や物品に暴力的に接する子供をたしなめるときに使う親の方便として、

「対象物が痛いと言って泣いているでしょー」

という定型文があるが、本当に鳥が痛いと思いでいるケースは世界初ではないだろうか。

「ふぎやつびいー」

恵美に怒られて泣きやカミーオを手放すアラス・ラムス。カミーオは、思い切り羽ばたいていたせいで解放された途端に部屋の隅までスッ飛んでいつてしまう。

勢いで段ボールの後ろにあった黒布に巻かれた長物にぶつかり、倒してしまった挙句にその下敷きになってしまう。

「お、おいカミーオ、無事かー」

棒状の黒布が倒れたときにガチャリとかなり重い音がした。

「ぐ、びいよ……は、だ、大事ございませぬ……」

今度は真奥も、驚きを露わに固まった。

「ふ、膨れた」

黒布で包まれた長物の下敷きになったはずのカミーオが、突然水を得たワカメのように相似拡大的に膨張して鶏ほどのサイズになっているではないか。

「こけこー!!」

それを見たアラス・ラムスの、目を輝かせんことか。

驚いて動きが止まった恵美の隙を突いて俊敏な動作で飛び出すと、鶏サイズのカミーオに全力タックルを仕掛ける。

「あ、こ、こらアラス・ラムスー」

「ぬ、に、二度と同じ手は食わんびいよ!!」

ところがカミーオも負けてはいない。自分を下敷きにした黒布の長物をはねのけると、短い脚を器用に畳に引っかけながら、シャカシャカと走り出してアラス・ラムスの手から逃れようとするではないか。

「こっここけこー!!」

「人間の赤子如きが吾輩を捕まえられると思うびいよ!」

しゃかししゃかべたべたととてばたばた。

翼をばたつかせる黒い鶏と両手を振り回す銀髪の赤子が、さながら回転してバターになって



しまったどこかの虎のように、真奥と恵美と千穂の周囲を駆け回る。

「こちらー アラス・ラムスー やめなさい転ぶ……」

わよ、と恵美が言う前に、アラス・ラムスは転んだ。

カミーオが跳ねのけた黒布の長物に願ってしまったのだ。

慣性の法則にしたがいつんのめって畳の上をころりんと前転してしまったアラス・ラムスは、状況が把握できずにきょとんと周囲を見回す。

「だ、大丈夫かアラス・ラムス！ 怪我してねえか!?」

真奥が慌てて助け起こすが、アラス・ラムスは意外にも平気そうで、首を横に振った。

「ぜ、ぜひーっぴいよぜひーっぴいよ……わ、吾輩の勝ちっぴいよ……びいえっ!?」

一方、部屋の隅で可愛くない息切れを起こしている黒鷄カミーオは、三白眼になった恵美に首根っこを締め上げられていた。

「アラス・ラムスが怪我してたら、チキンソテーにしてカレー鍋にぶち込んでやるから覚悟なさい」

「あ、あの、今のは一概にカミーオさんが悪いわけじゃないと思うんですが……」  
馬鹿親二人を諷めるのはもちろん千穂だ。

「ほーら、アラス・ラムスちゃん、鶏さんにごめんなさいしなさい。鶏さんびつくりしちゃったでしょ」

千穂が珍しく少し戯しい声色で言う、アラス・ラムスは一瞬ぐすりそうになるが、う、と口を引き結んで頷いた。

「うー……ごめなしゃ」

「く、くはは。人間の、赤子の、戯れに、いちいち目くじらを立てる吾輩ではないびいよ」

言う割りには余裕は無さそうだが、意外にもカミーオは、大儀そうな物言いでアラス・ラムスの暴挙をすんなり許した。

千穂の教育的指導で頭が冷えた恵美は、少しきまり悪そうに鶏を段ボール箱に戻す。

「……で、話を戻すと、あなた達を迎えに来たんじゃなければ、一体この鶏は何しに日本に来たの？ それと」

恵美は、カミーオを下敷きにし、アラス・ラムスが頷いた、薄汚れた黒い布に巻かれた何かを見る。

「あれは何？ きつきはという理屈で膨らんだわけ？」

「ぐえっ……そ、その前に……」

カミーオは恵美に絞められた首を翼で器用にさすりながら真奥を見上げた。

「サタン様、吾輩はこの者達の前で事の次第を話してよろしゅうございますのかびいよ」

「あ？ ああ、構わねえ」

真奥は鷹揚に頷く。

「まあ、察しの通り、この二人は人間だ。こっちの子は佐々木千穂。俺やアルシエルの正体も知っていて、この世界で色々世話になつてゐる」

「おお、左様でございますかびいよ。人間の少女よ。我が主に代わり、礼を申し上げる」

段ボールの中で身を起こし、三つ指を突くように翼を広げて、深々と千穂に頭を下げる黒鷲カミーオ。

「あ、その、どうもこちらこそ、いつもまお……あ、サタンさんには助けていただいています」千穂もついつい正座してお辞儀。

魔界の大悪魔と日本の女子高生が、次元を超えて理解し合い日本流の挨拶を交わす歴史的瞬間である。

「で、お前の尻掴んだ赤ん坊とこっちの女は、聖剣と勇者だ」

いきなりぶつちやけた真裏に、カミーオと恵美と千穂は、三者三様に驚き目を剝いた。

「びいよっ!?」

「ちよっと!?」

「真裏さん!?」

段ボール箱の中で身を起こして、嘴を開けて恵美とアラス・ラムスを見上げるカミーオ。もちろん彼も驚いただろうが、それ以上に驚いたのが恵美と千穂だ。

「何をあつさりばらしてるのよあなたは!!」

見た目は鶏にわとりでも、素顔は魔王名代の大悪魔である。

カミーオは恵美にとつて敵だが、もちろんその逆もまた然りなのだ。

「びいよ剣の勇びいよ……ですと!?」

「……やっぱりチキンソテーにしてカレーに放り込んできていい?」

「やめろ、悪気があってやってるワケじゃねえから」

今度は自分からカミーオに手を伸ばそうとする恵美を、真奥は留める。

「おいカミーオ、間違えんな。びいよ剣の勇びいよじゃない。びいよ剣『と』勇びいよだ」

「真奥さん、遊佐さんが話聞いてくれなくなっちゃいますから真面目にやってください」

千穂の冷静な突っ込みで、恵美のアイアンクローが真奥の喉輪のどわに激突することだけは回避できた。

「サタンびいよ」

「誰がサタンびいよだ」

「サタンびいよ!」

アラス・ラムスが喜んでしまった。

今度は真奥の手がカミーオをつまみ上げようとするが、カミーオはのけぞって回避する。

「聖剣の勇者は、エンテ・イスラ侵攻軍崩壊の原因の何故、勇者と、そして聖剣と、馴れ合っておるのですか………びいよ」

なんとか真面目に問答しようとした末に、結局耐えられなくて言ってしまった感。

びいよはともかくとして、カミィオの声色は、特に真奥を責め立てるような様子ではない。ただ、真奥の真意を知りたい。そんな口調だった。びいよはともかく。

先に答えたのは、真奥ではなく恵美だった。

「……成り行きでしかないわ。言っておくけど、私はいつでも魔王の寝首を掻く準備はできてるんだからね。あなたも、変なマネをすればタダでは済まないわ。私が聖剣を持つ勇者だってことは、他の悪魔には黙っている方が身のためよ」

いつものことながら、恵美は強面の悪役としか思えない台詞を吐き、黒鷄を威圧する。

「……ってことだそうだが、実際はもうちょつと複雑だ。それにさ、お前なら分かると思うけど……アルシエルだって、最初は敵だったたる？」

「……………びいよ」

真奥は畳の上に胡坐をかいて、段ボールの中の鶏に噛んで含めるように語りかける。

「俺達はどうやって魔界を制圧してきたか思い出せ。俺はこの国で……人間相手にもそれができらんじやねえかって、そんな夢を見た。何せ、俺と勇者が、成り行きとはいえ馴れ合えるんだからな」

恵美と千穂には決してわかるまい。

「その覇業の夢を……」

これは、サタンとカミーオが交わした、遠い遠い昔の契約。カミーオが、若きサタンにつき従うことを決めた、決定的な理由。

「東方元帥殿と共に支えることができなかったこと、口惜びいよございます」

——俺が勝ったら、昨日まで殺し合ってた敵だって明日は仲間だ——

副業とは敵をただ殺し尽くし、焼け野原を作ることではないと知っていた、唯一の悪魔。

「そこはお前、なんとか我慢してはしかったな」

真奥は笑う。

「ちよつと、なんの話よ」

「真奥さん？」

焦れた様子の恵美と千穂に、真奥は決まりの悪そうな顔を向ける。

「……俺がどうして魔界を統一できて、どうしてエンテ・イスラ侵攻に失敗したかって話さ」

「はあ？」

「信じられないかもしれないが、カミーオは話の分かる奴だ。人間や勇者にも偏見はねえ。お前だって分かってたんだろ。エンテ・イスラの状況は、天界が直接しゃしゃり出てきてる時点で、もう俺とお前が単純に命取り合って済む問題じゃなくなってきた。それに、いずれ決着はつけるにしろ、アラス・ラムスの問題だってあるんだ。今俺達がやり合えば、アラス・ラムスに親殺しをさせることになりかねねえ」

真奥は、アラス・ラムスの髪を撫でた。

「にひ」

その手を気持ち良さそうに受け入れるアラス・ラムス。

「今じゃ一つ卓で飯食つてるけど、お前だって別に成り行きに任せて俺を許したわけじゃねえだろ？」

「当たり前でしょ、何を言い出すつもり？」

恵美は、つい声が剣呑になつてしまう。

「いつかは決着つけなきゃおさまらんのは分かる。だがそうするために俺達は、今起こっていることに対して最低限の情報は共有すべきだ。そうじゃなきゃ、ガブリエルのときみたいにアラス・ラムスが危険にさらされるかもしれねえ」

「……」

納得がいかない。魔王のくせに、あまりに正論すぎて、反論の余地が無いではないか。分かつている。そんなことは、魔王に言われなくなつて分かつているのだ。

「……相変わらず、サタン様は真つ直ぐに物事を申されますな、びいよ。仇敵同士となれば、理屈では分かつてても感情ではそうはゆきますまい」

恵美の様子を見たカミーオが、嘆息しながら言う。

「聖剣の勇びいよ」

「だから誰が勇びいよ！」

「納得がゆかねのなら、こう考えればよいっぴい。共通の敵がいるなら、互いの邪魔をせぬ程度に情報共有があればよい。何も進んで共闘する必要などありはせぬっぴいよ」

語尾にびいよを付けることに段々と抵抗が無くなってきている感のあるカミーオを、惠美は睨みつける。

「……今さらあなた達に偉そうにお説教されなくなつて、私だつてそんなこと分かつてるわよ。さつさと話を進めたら!? 私は勝手に聞かせてもらうわよ！」

結局、一人狼狽えてそっぽを向くしなくなつてしまった。何せ真奥とカミーオの言うことは、全て正しいことなのだから。

真奥とカミーオと千穂は、苦笑しながら惠美の背中を見る。

なんだかんだで、彼女も分かっているのだ。

「それじゃあカミーオ、改めて教えてくれ。お前たちは何を求めて、日本に來た。一体どうしてポロポロでここにたどり着いたんだ? 魔界やエンテ・イスラが乱世になるって、どういうことなんだ? そんなで、これは一体何なんだ? 」

最後に真奥は、黒い布で包まれた重そうな棒状の物を指し示す。

その中身は、カミーオが携えていた一振りの宝剣。

彼が纏っていた鎧は砕け、彼自身も小鳥のサイズにまで縮小してしまつたにもかかわらず、

この宝剣だけは輝きを失わずにそのままそこにあった。

それをカミーオが纏まとっていたマントで包んでいるのは、何かの拍子に天祢あまねに見られることを警戒しているのもあるが、なんとなく、見た目通りの煌きらびやかなだけの宝剣ではないという予感があったからだ。

今までエンテ・イスラから現れた天使達には、聖剣せいけんを取り返したり、東美あづみや真奥まおくを抹殺まつころするという至極分いたかりやすい目的があった。

だが、悪魔が、真奥達を迎えに来たわけでもないのに日本に来る、という事態からは推測できることはあまりにも少なすぎる。謎なぞは多い。

「それは……」

真奥が肝心要かんしんようの問題について質問し、カミーオが嘴くちばしを開こうとしたその時だった。

部屋のドアが、ノックされた。

「……はい？」

漆原うしはらならノックもせずに入ってくる。芦屋あしやか鈴乃すずのなら、ノックの前に声をかけてくるだろう。だとすると……。

「真奥君」

天祢の声だった。

何故なぜだろう。いつもの天祢の声なのに、エアコンで体が冷やされたせいだろうか、妙みょうに冷た

くは聞こえなかったか？

「さっき鶏にわとりが絞め殺されたような声が聞こえたけど、大丈夫？　てか、サボりの最中に夫婦喧嘩けんかとかマジ斬新ざんしんじゃね？」

色々と突っ込みどころはあるが、真奥がなかなか戻らないので呼びに来たのかもしれない。先ほどのカミーオの悲鳴や恵美の大声が、外まで漏れていたのでだろうか。

「開けていい？」

「ど、どうぞ」

真奥は言いながら、カミーオに目だけで「喋るな」と釘を刺す。彼女は、真奥達のことを何も知らないのだから。

「邪魔すんぜー。……どしたの、その鶏」

ドアを開けた天祢は、先ほどと同じく髪をくくって少し汗ばんでいて、前掛けには油やカレーが跳ねた染みがついていて、サンダルを脱いで上がってくる。

漆黒の目は、真奥も恵美も千穂もアラス・ラムスも見えていない。真っ直ぐに、カミーオ。真奥はその違和感を見逃さなかった。

天祢は、ドアを開けた瞬間から既に、真っ直ぐカミーオの入った段ボールにしか目をやっていない。

まるで中で何が起こっていたか、何がいるのか、分かっていたかのように。

普通に様子を見に來ただけなら、三人揃って天祢を見ている真奥と恵美と千穂の誰かと目を合わせるはずだ。

天祢は視線をカミィオに合わせたまま動かさずに近づいてくる。

「何、黒い鶏？ 焼き鳥にでもすんの？」

「びいよっ？」

カミィオが怯えたような声を上げる。

「あの……昨夜、怪我してるところ見つけて……」

真奥の苦しい説明。砂浜に一体どこから鶏が迷い込んでくるというのだ。しかし他に思いつかないし、何より嘘は言っていない。

そしてそんな真奥の説明にも、天祢の視線は揺るがない。

「この辺に養鶏農家は無かったと思うから、どこかのペットじゃない？ 近くの獣医さんに知らせた方がいいよ」

「わ、分かりました」

「それと、漆原くんがぶーぶー文句言ってたよ、さっさと帰ってこいって。もうラッシュは無いだろうけど、そろそろ片づけはじめないとね」

真奥は少しずつ、緊張が解けていくのを感じた。

考えてみれば部屋の真ん中に鶏がいれば目を引くかもしれないし、随分長いこと話し込んで

しまっていたのも確かで、天祢も雇い主として一言言いに来ても不思議はない。

真奥は気持ち切り替えて頭を下げた。

「すいません、すぐ戻ります」

「あいよ」

言うと天祢はようやくカミィオから目を離す。

「……………」

「小っちゃいねエ。将来、どんな大人になるのかねエ」

「わぶ」

そしてなぜか、惠美の抱えるアラス・ラムスを見て不思議な笑顔（エグスマイル）を浮かべると、頭をひときり撫でてから部屋を出ていった。

「……………」とりあえず、今できる話はここまでだな」

雇われの身である以上、雇い主の命には逆らえない。

店じまいとはいえまだ夕方前。海の家は陽が落ちる前には閉店するので、まだ話す時間はあるだろう。

と、

「……………」あとの話は私が聞いておくから、あなたは仕事してきなさいよ」  
ばそりと。

「あ？」

「……私が話聞いておくって言ってるの!! 急いで動く必要があるならすぐに教えてあげるから、さっさと仕事に戻れー」

尋ね返した真奥を視線で射殺すほどの形相で、恵美が睨みつけてきた。

「そ、そりや助かるけど……いいのか？」

「いいも何も、あなた達がそう言っただけに私にお説教したんでしょ！」

真奥とカミーオは知る由もないことだが、この「あなた達」には千穂も含まれているのだ。恵美自身納得が行っていないのは丸わかりで、顔は赤いし今しも泣き出しそうな涙目だが、彼女も修羅場をくぐった戦士なのだ。何が必要で、何を優先するべきか分からない人間ではないのである。

「……じゃあ、頼むわ」

「頼まれない！ 私は自主的に聞くだけー」

「はいはい、それでいいよ。じゃあカミーオ、悪いけどこいつに……」

「今の女です」

「話を……あ？ 何がだ？」

カミーオの短い声から、「びい」が消えた。

「今の女……吾輩の力を全く寄せつけず、まるで鬼神の如き力でございました」

「……天祢さんのこと、言ってるのか？」

真奥も、千穂も、そして恵美ですら、耳を疑ってカミィオを凝視した。小さな嘴とつぶらな瞳で、悪魔大尚書は重々しく頷く。

「吾輩麾下の兵達を巨竜の嚙きに吞み込ませたのは……あの女です……」

※

空が朱に染まりはじめる頃、大黒屋は店じまいとなる。

午後五時を過ぎた頃には、シャワースペースとコインロッカーくらいしか利用者がいないからだ。

鉄板を磨いて洗浄し、ドリンククーラーの冷却排水トレイを洗い、かき水機にカバーをかけて、残りの食材やドリンク、その他売り物などを点検してゆく真奥達。

天祢はレジから売り上げジャーナルを打ち出し、今日の売り上げ概算を全頁に提示してみた。あとはコインロッカーとシャワールームのコインペーダーから回収した百円玉の枚数を数えると、今日一日の売り上げが出揃うことになる。

「今日レジで打ったのだけで……三十五万行ったわ」

天祢はにこやかに、売り上げジャーナルを掲げて見せる。

「あとは漆原君とこのドリントとかき氷、あと芦屋君が受けた持ち帰りオーダーのと、シャワーとロッカーのお金回収して打ち込まなきゃだけど……ヘタすりゃ五十万行くんじゃないかな。多分、この店始まって以来だよ」

「でも、今日はちーちゃん達が来てくれなかったら途中でパンクしてたかもしれないし、余計な小口の出金もありました。そこらへんを、もうちよっと煮詰めなきゃダメですね」

真奥は渡された売り上げジャーナルと、前年度の帳簿を見比べる。

客数を少なめに見積もっていたせいで仕事量がパンクしかけたことは彼の中で反省点だが、帳簿の数字の比較だけでみれば、何と前年比二百パーセント越えという天文学的な成績をはじき出していた。

もちろん真奥の策が当たった、というのもあるが、この数字の根本的な原因は、天祢の一家が今まで大変いい加減な商売をしていたということに尽きるだろう。

「カタいこと言わない。こりや大入り出すよ、出しますよ。毎日これなら出さざるを得んでしょう！ あ、遊佐ちゃん千穂ちゃん鎌月ちゃん、ちよつとー」

天祢は水着から普通の服に着替えて、宿に帰る支度をしている女性三人の名を呼ぶ。

「これ、二日分のアルバイト代。本当助かったわ。ありがとね。鎌月ちゃんは特に、砂のお城代も入れさせていたかったです。できるなら、毎日でもやってほしいくらいよ」

鈴乃の大作、『砂棲・蒼天蓋』は大いに人目を引き、人が人を呼ぶ相乗効果をもたらし、

間違はなく今日の売り上げの緑の下の力持ちであった。

真奥は今後、鈴乃の特技を何かに生かせないかと真剣に検討中である。

部屋の中で感じた天祢の違和感は、真奥が仕事に戻ったときには既に消えていた。

引き続き手伝いに入ってくれた千穂も、すぐに先ほどまでの調子を取り戻しているようだったが、それでもどこか真奥の不安は消えなかった。

天祢にやられた、というカミーオの言葉はもうろんのこと、恵美のどこちなさが消えていないのである。

真奥が店に戻ってから小一時間ほどしてアラス・ラムスを抱いて出てきた恵美の顔は、誰が見ても憂鬱を抱えているようにしか見えなかった。

その後、アラス・ラムスや仕事の手が空いた千穂や鈴乃と波打ち際で遊んだりもしていたのだが、ふとした瞬間に表情が陰る。

「でも、残念だわー。みんな明日で帰っちゃうのよねー」

どうやら天祢が三人を引き留めにかかっているらしいが、恵美は本来が偶然連休だったわけだし、千穂も親との約束がある。天祢もあまり本気で引き止めている様子ではないが、本心から残念がっているのは理解できた。

「……………」

真奥のハーフパンツのポケットの中で、携帯電話にメールが着信したことを知らせるバイブ

レーションが鳴った。

「……」

真奥は、その送信者の方を見るような愚は侵さなかった。

「どしたの真奥。顔色、黒いよ？」

「お前もな漆原。てかそりや日焼けだろう」

一日海岸で仕事していたせいで、悪魔達は全員うつすら小麦色の肌になっている。

悪魔でも日焼けはする、というどうでもいい真実にまた気づいた真奥は、千穂と一緒に鈴乃の砂の城の前で記念撮影などしている天祢に聞こえないように、漆原と芦屋を手招きした。

「今夜、出かける。お前らもついてこい」

※

犬吠埼灯台は、イギリスから招聘された灯台技師、リチャード・ヘンリー・ブラントンの設計、施工監督のもと、明治七年に完成、点灯した。

戦争などのために仕様を幾度も更新した現在、日本に六ヶ所しかない第一等灯台であり、一等フレネル式レンズを用いたその光の到達距離は約三十五キロメートルにも及ぶと言う。

悠然と暗闇の海に一条の光を投げかける灯台のふもとで真奥と芦屋と漆原は、小さな段ボール

ルを抱えて恵美と対峙していた。

「お前一人か……ちーちゃんと鈴乃は」

「ベルには事情を話して、万が一のときのために、千穂ちゃんのそばについてもらってるわ」  
まさかこの期に及んで決闘でもなからうが、この呼び出しの果てに万が一の事態が起こるような展開が待ち受けているのだろうか。

もう一人、姿が見えない愛娘がどこにいるかで、その理由が明らかになるかもしれない。

「アラス・ラムスは」

「ここよ」

恵美は今度は、自分の頭ではなく右手をかざした。

「どういうことだ。まさかこんなところで決着をつけるために呼び出したわけじゃねえだろ？」  
店じまいの最中、真奥の携帯に着信したのは、恵美からのメールだった。

電話番号はともかく、恵美にメールアドレスまで教えた覚えは無いのだが、恐らく千穂あたりから聞き出したのだろう。

「カミーオを連れて、今夜十一時頃灯台の前で。決して、天祢さんに気取られぬよう」

恵美からのメールは非常に簡潔なものだった。

了承も返信もしていなかったが、恵美は真奥達がやってくる事が分かっていたようだ。

「それも面白そうだけど残念ながら違うわ。カミーオ、話してあげて。私が魔王をここに呼ん

だ理由を」

「びいよ、仕方あるまい」

大分回復したらしいカミーオは、今までよりも明瞭な声で答えた。

三人の悪魔の顔が、箱の中の小さな鳥にむく。勇者と悪魔大尚書が示し合わせるとは何事なのだろうか。

大吠埼から見える鏡子の海が、黒々とした予感を孕んだ、不吉の色に見える。

夏の夜にしては妙に冷たい風が、異世界の住人達の髪をもてあそんだ。

「サタン様、東方元帥殿、ルシフェル。この国に危機が迫っておるやもしれぬのですびいよ」

「だからなんで僕だけいつも呼び捨てなんだよ」

漆原は口を尖らせるが、カミーオは構わず続ける。

「勇者エミリアが、聖剣となる赤子を伴ってこの地にいると聞きびいよ、吾輩腰が抜けるかと思ひましてございますびいよ。今、魔王軍でも魔界の者でもない勢力に取り込まれた悪魔達か、その。エミリアの聖剣。を血脈になって探し回っているのですございます」

「魔王軍でも魔界の者でもない悪魔？　なんだそれ」

真奥は手に持ったダンボールの中の鶏を見下ろして言う。

「びい、数十年前のことにござります。魔界の魔王都サタナスアルクの吾輩の所に、あろうことか人間が訪れたのでござります。その者は、聖剣を得し者が魔界、天界、エンテ・イス

ラの三界に覇をびいよする力を得られるなどとのたまいました。そしてその甘言に、サタン様の仇を討たんと息巻く残留主戦派の悪魔達が扇動されてしまったのですばいよ」

真奥の後ろで、芦屋と、漆原すら驚いた様子で息を呑んだ。

魔界に、人間が訪れた。そんな話は、魔界の長い歴史の中でも例が無い。

普通の人間では魔界に満ちる魔力に当てられて、まず意識を保ってられないのだ。

サタンの姿に戻った真奥のすぐそばにいた千穂は、魔力に当てられて呼吸ができなくなったほどである。

「カミーオが言うには、魔王軍壊滅後、魔界はあなたの仇を討つために第二次慢攻軍を送り込もうとする主戦派と、あなたの生存を信じて国力を温存する穩健派に二分されてたのよ。そしてカミーオは両者の調整に必死だった。でも、その人間が、魔界の均衡を崩した」

恵美が魔界の事情を真奥に話すという、奇怪な構図。不審に思う真奥に構わず、恵美は続ける。「その人間は言ったそうよ。聖剣は、二振りあるって。そしてそのうちの二振りこそ」

恵美は、周囲に普通の日本人がいるかもしれないことなど全く確認せず、己の聖剣を顕現させる。

進化聖剣・片翼。

善き半身の意を持つ、聖剣の片割れを。

「進化聖剣・片翼が、私と一緒に日本にあることを知っている人間は、そう多くないわ」

その言葉で、真奥はようやく理解した。

何故サリエルが、最初から惠美の聖劍の在り処を知っていたのか。彼がどこから情報を得たのか。

エンテ・イスラで惠美の聖劍の場所を知る。人間。は確かに数少ない。

旅の仲間、エメラダとアルバート、そして日本で親しくなった鈴乃ことクレスティア・ベル。そして鈴乃が日本に来る前に、エミリアの生存を知らせた大神官聖壇の六人の大神官たち。そして、

『主戦派を引き連れ姿をくりましたその人間は、オルバ・メイヤーと名乗りましたびいよ』

「な、何考えてんのあいつ？ 何してんの!? てかいつの間に!？」

その名に一番衝撃を受けていたのは、ここ数日でオルバについて色々と考えを巡らせていた漆原だった。

惠美が日本に知っていることを知っていて、かつ明確に惠美に敵対行動を取り、それを改めなかったのはオルバ一人。予想こそしていたものの、やはり実際に聞くと信じ難いことだった。

「下手な情けは無用でしたね……」

日本で直接オルバと刃を交えた芦屋も、拳を力いっぱい握って悔しそうに歯噛みする。

「カミーオ殿。オルバについていった主戦派というのは、誰が率いてるのですか」

「南方元帥マラコーダ殿の副官、バーバリッティア殿っびいよ」

「真面目な話してるときにポケチャームでえな喋り方すんな」

真奥はがしと頭を掻く。

「だが、そんな話をするならこんな開けた場所じゃなくなつたって、大黒屋でやりやいいだろうに。どうせ天祢さんも帰つてるんだぜ？」

「あなたも聞いたでしょ？ その天祢さんが、カミーオ達を倒したのかもしれないって」

「そりや聞いたけどよお……」

「フランクな印象だから忘れてるかもしれないけど、あの大家さんの親戚よ。敵とは言わないまでも、普通の人間じゃない可能性を忘れないで」

恵美は手厳しい。

が、その厳しさは今までと違い、単なる敵意ではなく叱咤のようにも聞こえる。

「もし天祢さんが私達も分からない不思議な力の持ち主で、カミーオや悪魔兵を倒せる人だつたとしても……これから起こることに対処させるわけにはいかない」

「これから起こること？ 何があると言うのだ」

芹屋の問いに答えたのは、びいびいカミーオだった。

「吾輩は、我らの争いを異世界に持ち込むことは罷りならぬと考え、人間に扇動された主戦派が異世界で騒ぎを起こすよりも先に、秘密裏にエミリアの聖剣を確保せんとやって参ったつぱいよ。オルバ・メイヤーは異世界日本の東京なる国がある地域に聖剣があるのしか言わなかつ

たびいよ。仕方なく洋上にグートの出口を設定し、想定される地域の東端からローラー作戦でしらみつぶしに探すつもりでおりましたが……」

つまり、カミーオが関東最東端の銚子に現れたのは全くの偶然、ということなのだろうか。

「てかそれ以前に、ここは千葉で、東京じゃねえぞ」

「でもさ、千葉って、『東京なんか』って名前ついてる施設多くない？」

「言うなルシフェル。そういう問題でもない」

「必ずしも偶然ではありませぬびいよ。オルバが聖剣を求める手がかりになると言つて残したものを使ったところ、この地域で反応があつたのびいよ」

「聖剣を求める手がかり？」

「つい最近、そんな話を誰かから聞いたような気がする。」

真奥が記憶の位置を探るよりも早く、カミーオは続ける。

「しかしながら結果はご覧の有様。この国の強大なる力の持ち主の前に為す術無く……」  
申し訳なさそうにうつむくカミーオの話の後を継いだのは恵美だった。

「その主戦派の大部隊が、もう日本に……地球に向かってるっていうのよ！」

「はあ？」

「なんだと!?」

「なんでそれを一番最初に言わねえんだよ!!」

「びよぎっ」

漆原と芦屋と真奥が一斉に驚きの声を上げ、そのせいで真奥はカミーオの入った箱を取り落としてしまう。

「げ、ゲートの規模と事前情報を計算するに、到着は今夜半にござります……奴らも、敵を待みにこの東端の地より、ローラー作戦を展開するものと思われますびい」

箱からよちよちと出てきた黒い鶏は、足を羽の下にしまつて地べたに腰を落ち着ける。

「正直なところ、あの女の力は常軌を逸しておりましたっぴいよ。これから現れる部隊も、我らの二の舞を踏まないとは言ひ切れませぬが……」

身も蓋もない言い方をすれば、カミーオは、どうせ第三勢力の部隊も、天祢一人の力に敵わないだろう、と言っているのだ。

天祢がそこまで強大な力を持った人間であるということ、又聞きでしか知らない真奥はその実感はまるで抱けないのだが、カミーオは大真面目だ。

「一方で袂を分かったとは言え、バーバリツティア殿とて魔界統一の心を同じうした同胞。敵対するに忍びなく、扇動された配下の者らとあの女が衝突して、同胞に無用な犠牲を出すことを見逃ごすことはできません」

「私は、別に悪魔なんかどうだっていいんだけどね」

恵美は、あくまで悪魔の一派とは一線を画すスタンスで言った。

「ただ、本当にオルバが絡んでいるなら、無視はできない。天祿さんが人外の力を持つてるかどうかなんて関係ないし敵か味方かなんて知ったことじゃないわ」

惠美は、真奥を睨みつける。

「もし悪魔の大部隊が聖剣を求めて日本に来るなら、それを追い払うのはこの国に争いを持ち込んだ、私とあなたの責任よ。天祿さんに丸投げしていいことじゃないわ」

毅然と言い放った惠美の上空を、灯台の閃光が薙いでゆく。

「……味方だと、思っていてえなあ……基本的に、大家も天祿さんも、いい人だからな。二人がいなかったら、俺達あとづくに路頭に迷ってたんだ」

真奥はさびしげに笑って言った。

「惠美」

「何よ」

「……お前よく信じたな、こんな話」

「は？」

惠美の表情が、一瞬警戒の色を帯びる。真奥のものの言い方は、真奥がカミィオに嘘をつかせたと取られかねない口調だった。

「死にかけの悪魔が、俺を救出するためにお前を尻に嵌めてるとか思わないのか？」

「……なんだ、そんなこと？」

だが恵美は、拍子抜けしたような声を上げた。

「そんなチキンやあなた達が私を毘に嵌めたところで、私をどうこうできるわけ？」

大層自身に満ち溢れた言葉である。だが、どこかわざとらしい。

胸を張って精一杯真奥達を見下す姿勢を取ろうとするが、途中で考えを改めた……というより馬鹿らしくなった、という顔で力を抜いた。

「あんまり人をバカにしないでくれる？」

「あ？」

恵美は精一杯顔を曇めて、額に手を当てた。

「あなた、私とカミィオを引き合わせたとき、千穂ちゃんとアラス・ラムスも同席させたでしょ。だからよ」

「あ、ああ……あ？　なんだそりや？　どういうこった」

分かるようで、全く分からない。なおも食い下がると、恵美は真奥から逃げるようにして顔を反らし、背中を向けてしまう。

「そりやあなたは、邪惡な悪魔で、その親玉で、貧乏で意地汚くて、父さんの仇で全人類の敵で宇宙のゴミみたいなものよ、スペースデブリよ！　でもね……」

心底忌々しげに、鼻や目尻を苛立たしげに震えさせながら、恵美は言った。

「あなた達が千穂ちゃんやアラス・ラムスを裏切るような嘘を言うような奴じゃない、って程

度には、あなた達を信用してるの！ だから……」

勢いに圧倒されて目を瞬かせる真奥達の顔を順繰りに睨みつけてから、

「この件に関しては、私と一緒に責任取りなさい!!」

絶叫が、夜の岬にこだました。

「……納得した!? 納得したなら今の言葉は忘れなさい! この宇宙ゴミ共!」

惠美はそれこそアラス・ラムスの宿る聖剣を投げつけてきかねない勢いで絶叫した。

音圧に押されたかのように一瞬風が吹き、気まずい沈黙を作る。

「な、何か全然信用を得てるようには思えないし、宇宙ゴミってのは違う気もするが……」

真奥は、閃光が薙ぐ夜空を見上げると、頷いた。

「サンキュな、信じてくれて」

その言葉に、惠美の顔がふっと和らいだ気がしたのは気のせいだろうか。

一瞬の幻のような惠美の柔らかい表情の後に来たのは、地獄の閻魔のような怨嗟の声だ。

「わ・す・れ・ろ・って言ってるでしょ!」

惠美が聖剣を振るうと、光の軌跡が灯台の閃光のように夜の闇を薙いだ。

「あのね、あのね、アラス・ラムスもね、がんばるの!」

戦乙女の立ち姿のように神々しく見えた惠美だが、聖剣から聞こえてくるのんびりした声のおかげで、いまいち決まらない。

だが、それも悪くない。

「……不思議な縁にござりまするな、びい」

「全くだ。だが、俺達はどうする。本当に悪魔の大部隊が攻めてきたら、はつきり言って相手できる自信ないぞ」

「それについてはびい、吾輩に案がござりまするつびい、吾輩の持参した宝剣、あれは……」  
そろそろ全員が面倒になりはじめている「びいよ」に耐えつつ、カミーオの案とやらに全員が傾聴した瞬間だった。

遙か沖を照らす灯台の閃光が、ほんの一瞬映し出した。

引き裂かれた闇を。

「……来たんじゃない？」

気づいたのは、意外にも漆原だった。

真奥も恵美も戸屋も知らないことだが、漆原はガブリエルが襲来した際も、ゲートの閉閉を一番最初に感知していたのだ。

漆原が見る先に全員が目をやつて、誰もが思わず目を疑った。

夜の雲間に紛れて一筋、いつの間にか黒い裂け目が空を横切っている。

「……おいおいおいおい、一部隊なんてレベルじゃねえぞありや」

群れ為し夜を覆い尽くす蝙蝠のように、遙かな旅をする渡り鳥のように、裂け目から吐き出

される無数の影。

「遠光映眼」

漆原は小さく呟いて、今はまだ帯状の霞にしか見えない影を注視する。

「カミーオの言う通りだね。バーバリッティアの姿は無いみたいだけど、マラコーダの配下だったマレブランケ族の連中だよ」

「あなた、ここからあそこが見えるの？」

眼を細めて沖を凝視していた東美が、呆れ半分に漆原に言う。

「簡単な術だよ。僕は半分天使。ここんとこ毎日ベルが作るご飯食べてた。あいつの食材は聖別されてる。他に質問は？」

昨夜、カミーオを捕えようとしていた霧を打ち払った漆原の翼が白かったのは、そのあたりに理由があるのだろうか。

だが、今聞いたたすべき問題はそこではない。

「……なんであいつらも、日本に来てるのに悪魔型を失わないんだ」

他の質問は芦屋から出た。

「知らないよ。あいつらが魔力の供給源を持ってきたか、開きっぱなしのゲートが関係してるか、そんなとこじゃない？」

いずれにしろ、それをこの場から判断する手段は無い。

現実問題として、今真奥達の目の前に、魔界と同じ姿で活動する悪魔の大部隊が日本に迫っているのである。

マレブランケ一族と呼ばれる悪魔大元帥マラコーダが率いていた種族は、人間の言うところの屍霊術に通じている一族であった。

人間側の屍霊術の認識は、悪霊や死体を甦らせて操る忌むべき邪法、ということになっている。しかし実際のところ、単純に死体に魔力を憑依させて操る傀儡術の応用にすぎず、術者がきちんと傀儡を操らないと、傀儡単独の戦闘能力は皆無となる。

敵の心理の隙を突く術に長けていたマレブランケ一族の長マラコーダは、サタンが率いる大元帥の中では軍門に下ったのは一番最後だった。

体軀の大きさは人間とほぼ変わらないが、蝙蝠のような翼と四肢から一本ずつ伸びる尋常でなく長い爪が、マレブランケ一族の特徴だ。

「適当に数えたけど……千はいるんじゃないかな」

十分すぎる数だ。犬吠埼から見えているということは、彼らの姿が沖の船舶に捉えられてしまいかもしれない。

「沖の船に乗っている人たちが危ないかもしれない！ 私先に行く！」

恵美はポケットから栄養ドリンクの瓶を取り出してそれを一気にあおる。

口の端を手の甲で拭いながら、両足に力を込めると、恵美の全身が光り輝きはじめた。

「行くわよ！ アラス・ラムス！」

「あい！」

「天光駿靴！」

真奥が止める間もなく、惠美は流星のように海へと飛び出していつてしまう。

マレブランケ族の一同も惠美の強大な聖法氣に気づいたらしい。闇夜に浮かぶ影が編隊を組むように大きくうねりはじめた。

「お、おい、カミーオ、俺達どうすりやいいんだ。さつき宝剣とか言ってなかったか？」

真奥も芦屋も最低限度の魔力しか残っていないし、漆原も簡単な法術は使えてもあれだけの大集団と事を構えるほど力が戻っているわけではない。

このままでは惠美とマレブランケ族の大立ち回りを見物するだけで終わってしまう。

「びいよ！ これはしたりつつびいよ！ そうですサタン様。吾輩がこの国に持ち込んだ宝剣、あれなる武具はサタン様が手に取り鞘から引き抜けば……………びいよ？」

カミーオは、真奥と芦屋と漆原が物凄い形相で三方から睨んできているのに気づく。

「カミーオ、ないわ。それないわ」

「カミーオ殿ともあろうお方が……………」

「る、ルシフェル？ 東方元帥殿？ な、何をそんなに……………」

「お前必要だったんなら出かけるときに持ってこさせろよドアホ!!」

真奥がカミィオをつまみ上げる。

「あ！ びいよっ!?」

「あ、じゃねえバカ！ あの剣必要になるって分かってたんだろ!? 犬吠埼から大黒屋まで今からちんたら走って取りに帰るのかよ！ その間に恵美が全部終わらしちまうぞ!?」

「びびび……サタン様……くるじび」

「ああもう、ここでお前シメたって焼き鳥にもならねえ。おい芦屋、仕方ないお前走って取ってこい」

「か、かしこまりました。……あっ！」

慌てた様子で身をひるがえて駆け出す芦屋は、五歩走って転んだ。

身長百八十を越える大男がドジぶりをアビールしても、見てる側には荷立ちしか湧かない。

「……は、履きなれないビーチサンダルで、つい……」

芦屋本人もそれは分かっているようで、背中に迫る冷たい視線を回避するかのようになぞくさと立ち上がって走り出そうとするが、

「ほい、お探しのものはこれかい？」

ふと目の前に差し出されたものがあって、慌てて急制動をかける。

「小鳥君の丈に見合わない大薬物だとは思ってたけど、武器つつーよりなんか、切り札的なものだったのかね」

化粧気の無い美しく凛々しい顔、色気の無いＴシャツに前掛け、そしてその手には、カミィオが小鳥の姿になり漆黒の鎧が砕けても光を失わなかった、一振りの宝剣。

「天祢……さん？」

「はい、天祢さんですよー」

大黒屋の即席店主、大黒天祢はいつもの闊達な笑いを浮かべて手を振ってきた。

「まったく、あらかた強制送還したはずの魔力がなーんでうつつすら残ってんのかなあって思ったなら、そりやそうですよ。ご覧下さいこの宝剣。色とりどりの宝石をあしらった鞘から抜くと……」

天祢は、カミィオのマントにくるまれ、鞘に収まった宝剣をゆっくりと抜く。

その中から出てきたのは、血のような赤黒い刀身だった。

「こーんな魔刀じゃありませんか……うつぶ、鯉口切っただけでちよつときつつい。これ、どうするつもり？」

天祢は刀身を再び鞘に納めて、まっすぐ真奥を見据えてくる。

「あ、この期に及んで『天祢さんどうしてここに！』とかやめてね、シラけるから。君たちが言うべきことは、この剣を使って、君たちが何をするつもりかってこと。そんだけ」

明日の仕込みの材料を尋ねるような様子で、ひょうひょうと問いかけてくる天祢。

最初に目の前に宝剣を突きつけられた芦屋はもちろん、漆原もカミィオも、真奥も戸惑いを隠せず、どう答えていいか迷惑してしまう。

そうこうしているうちにも時間は経過し、惠美とマレブランケ達との間で戦端が開かれようとしているのだ。

「しゅっきりしなさい！ 真奥貞夫！」

ぐずぐずと答えられないでいる真奥を、天祢は叱咤した。

「女の子にあそこまで言わせておいて、自分は何も堂々としたこと言えないわけ!? 男のくせにだらしない！」

勢いに任せて、天祢は真奥目がけて禍々しい刀身を有する宝剣を投げつけてきた。

「うわっ……わ、え、こ、これ……」

「え、これ、じゃないよこの草食系！ 二日しか一緒に過ごしてないけど、あんたがどういう奴かくらいは分かっている。さっさと行って、男見せてらっしゃい！ あんたたちの責任の取り方ってやつを見せてもらうよ。剣を抜きなさい！ あんたは……」

真奥は天祢の声にはほとんど脅迫される形で、宝剣の柄に手をかけ、鞘から引き抜く。

その瞬間、犬吠崎の突端に、灯台の光をかき消すほどの黒い光が一柱、天に向かって屹立した。

「遠い世界の、魔王なんだから!!」

ぶおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

黒き閃光せんこうの力を代弁するかのような咆哮せうこうが、鈍子もろこしの海に鳴り響いた。

「大丈夫か、千穂ちほ殿、体調は」

「あ、はい……………何故なぜか、今回は平気でした……………」

誰もいなくなった大吠埼おほいはいさきで、旅館のロビーから出てきた千穂と鈴乃すずのは、ほとんど見通しの利かない霧の中をきよろきよると見回す。

「……………魔力の残滓ざんしは確かにある……………だが、何故……………」

「そりゃーあんた、いくら外に人がいないからって、あんな魔力を一気に放出されたら大吠の住人全員枕並べて失神するもん。防護措置をば取らせてもらっただけよ」

答えは霧の中から現れた。

「!!」

鈴乃は身構えて、用心深く千穂を後ろにかばう。

「そんなに警戒すんなよう、同じ鉄板の焼きそば食った仲だるうに」

相も変わらずラフなTシャツ姿の大黒天祢（おおくろあまね）だった。

「少なくとも、私はあんた達の敵じゃないよ。彼らが自分で責任取るっていうからとりあえずは静観してるけど、討ち漏らしとか場外乱闘とかあったら、ちゃんと手貸してやつから安心しな」  
この状況で何をどう安心しろと言うのだろうか。

惠美（けいみ）の話では、魔王軍残党の大部隊がこの純子に迫っているというではないか。

彼女が討ち漏らすような相手に果たして天祢が好く抗し得るのだろうか。彼女が只者（ただもの）ではない、という話を、鈴乃は全く信じられていない。

「ナメてもらっちゃあ困るよ、人間」

だが、そんな鈴乃の当惑を感じ取ったのだろうか。天祢は不敵な笑みを浮かべると、腰に手を当てる。

「!!」

「わっ!?」

鈴乃と千穂は、その瞬間思わず顔をかばった。

霧が、竜巻のように渦巻き天祢の周囲を取り囲む。

Tシャツにエプロン、Gパンにサンダル。ゴムで縛った無造作な髪。

日本中どこにでもいるような商店主が今、霧の世界の主として、大吠埼の海に君臨していた。  
魔力でも、聖法気でもない。正体不明の圧倒的な力を見せてつけて。

「こちらと遊びで大黒の名を名乗ってんじやないんだ。なんなら。この世界に在り得うべからざる者。全員、一瞬で光の彼方に吹き飛ばしてやったっていいんだぜ？」

その言葉がまるで舞台役者の決め台詞であるかのように、灯台の光がさつと天祢の背を照らし、そこで止まった。

第一等レンズから放たれる強烈な光に、千穂も鈴乃もたまらず目を閉じる。

だが、一瞬、ほんの一瞬だけ、彼女の背後に灯台の白光とは別の、光の環を見たような気がした。

「ま、大人しく待ってなさいな。きつと」

その残像は一瞬で消え、千穂と鈴乃の視力が復活する頃には、そこにいるのは気のいい女商店主だった。

「真奥君達が帰ってきたら、話せることもあるかもしれないからさ」

「天祢さん……」

「んじや私は、真奥君と小島君に頼まれたことせにやならんから、また後でねー」

天祢はそう言って、ひらひらと手を振ると霧の奥に消えた。

彼女の向かう先には、大吠埼灯台。

千穂と鈴乃は、巨竜が嘶きと共に、鋭い眼光で霧の海を睨み据えるのを見た。

「ままだ！ おちやわん！」

アラス・ラムスの概念送受により、惠美は左手からの攻撃を視界に捉えることなく破邪の衣の楯で受け流す。

「おはし！」

言われるまでもなく右手から来る無数の爪の波状攻撃は、進化聖剣・片翼の刃で全て弾き返す。

マレブランケ族一体一体は決して高い戦闘能力を持っているわけではない。

だが、族長マラコーダをして屍霊術を始め、トリッキーな術を得意としており、

「!!」

正面から攻めてきた一体が、目の前に着た瞬間突如として分裂したのだ。

シンプルな幻覚術によるフェイントだが、一対千という多勢に無勢もいいところの戦いを繰り広げていた惠美には、分裂した幻が本物が偽物かを判断する余裕が無かった。

体当たりを受け止めようと楯を構えた瞬間、

「おはし！」

アラス・ラムスの警告が響く。

魔力球の接近に気づかず、回避は間に合わないタイミングだった。

「天光鏡閃！」

咄嗟の判断で反射技を展開するが、

「ぐっ、ああっ!!」

正面からの特攻と反射技、どちらにも集中できず中途半端になった結果、両方共被弾してしまった。

空中でよろめいた惠美に向かって、十数体のマレブランケが殺到する。

「ちょ、何すんのよー! 放せ! こら……やあつー! 変なところ触るな!」

空中に足止めされたところを魔力弾で狙われたら防ぎようが無い。惠美はやむなく歯を食いしばると、

「光爆衝波!!」

腹の底から叫んで法術を起動する。体の中から聖法気を噴出させてまわりつくマレブランケを爆風で薙ぎ払うという、威力の割に聖法気の消耗が大きい術なのだが、もみくちゃになって放り出されてゆくマレブランケの爪が、惠美の顔の上を掠めてしまう。

血が一筋流れだし、尚悪いことにそれが右目に入ってしまった惠美の視界を塞ぐ。

「ま、だいじょぶ!?」

アラス・ラムスの呼びかけに答えているヒマは無い。

これで、なおのこと戦いにくくなってしまった。

「ったく、ただでさえ面倒なのに！」

何しろ恵美は、かつてやったことのない戦法を、この大群相手に取っているのだ。

「おちやわん！」

左手から迫るマレブランケを迎え撃つために恵美が放ったのは、

「空突閃！」

法術でも聖剣でもない。拳法だった。

聖法氣を纏った恵美の裏拳がマレブランケの爪と激突、爪だけを砕かれたマレブランケは悲鳴を上げて後退してゆく。

「使わせてもらうわよ、アルバート！」

裏拳を放った左手を改めて強く握ると、恵美は正面から迫りくるマレブランケに向かって連続で拳を繰り出した。

「空突連弾!!」

恵美の拳で打たれた風が、そのまま弾丸となってマレブランケ目がけて飛んでゆく。

ある者は腹に、ある者は脳天にそれを食らい、昏倒したようにふらふらと戦線を離脱してゆく。風の弾丸をすり抜けたマレブランケ達が放つ反撃の魔力球の全てを、聖剣で斬り伏せて霧散させ、

「せいっ！」

真正面に來たマレブランケの顎を前蹴りで蹴り上げ、そこに突っ込んできた後継もろとも左手の空突閃の餌食にして間合いの外に叩き出す。

「……こ、これは、思った以上に……難しいわね」

武器を使う戦い方しか知らない恵美に、拳法の手ほどきをしたのはアルバートだった。

エンテ・イスラ北大陸には、魔王軍北方攻略軍司令官アドラメレクによって征服される以前、多種多様な武術や法術が伝わる精兵集団「岳仙兵团」の勇名が響き渡っていた。

恵美と出会ったときには部隊は散り散りとなり、アルバートは深山で修業をしつつ樵となっていたのだが、元々岳仙兵团のエリート戦士である仙術道士であった彼は、剣を含めありとあらゆる雑多な戦い方に精通していた。

「北大陸は群雄割拠の多民族国家だから、争いるとき、必要以上に構根を残さないよう、かなり古くからそういう戦い方が根付いていたんだ」

ただ、それは人間同士の戦いでのみ成立し得ることなのだとずっと思っていた。殺さない戦い、というものは。

「（下がれ）」

その時、陰々たる声が、マレブランケの大隊に響き渡った。

その瞬間、あれほど執拗だった攻勢が嘘のようにやむ。

「人間の女……貴様、只者ではないな」

群れの中でも、一際大柄なマレブランケだった。

おそらくこの一党を指揮するリーダーなのだろう。悪魔のくせに眼帯を帯びた隻眼で、体軀以上に目立つ一際長い牙が特徴的だった。

「お褒めに預かりどうも。悪いけど、概念送受で聖法氣消耗したくないから、人間の言葉で通させてもらうわよ」

「我らマレブランケの精兵千二百……ここまで一人の死者も無い……なまじの戦いぶりではない。貴様、まさか……」

言うなりマレブランケのリーダーは、すっと右手をかざした。

その手には、安っぽいガラスをあしらったペンダントのようなものが乗っている。と、そのガラスが突然紫色に淡く光り、すっと恵美の方目がけて光の線を發した。

「紫の光……これは！」

「まま！ いえほど！ あのさらさらのむこう、いえほど!!」

融合したアラス・ラムスの声が、恵美の勘が誤りでなかったことを告げる。そしてその瞬間、マレブランケのリーダーが、これぞ悪魔、と呼ぶべき邪惡な笑い声を上げたのだ。

「へくはははは！ まさか、まさかこうも早くに見つかるとは。貴様、よもや聖劍の持ち主か、

聖劍の勇者エミリア・ユステイナーナか!?」

マレブランケのリーダーの目からんらんと輝き、全身の魔力を活性化させはじめた。

「（四人の大元帥と魔王サタン様すら凌駕した力の持ち主ならば、我が全霊を持って相手せねばなるまい！　そして我が勝ち、その聖剣、貰い受ける！）」

「……随しても仕方ないわね」

惠美は負けず劣らず不敵な微笑みを浮かべて、進化聖剣・片翼を天高く掲げた。

「顕現せよ！　我が力、魔を滅せんがため！！」

マレブランケが、その声だけで吹き飛ばされた。

次に惠美の全身から放たれた黄金色の閃光を直視できず、マレブランケの群れが気圧されたように退く。

「怪我したくなかったら、さっさと部隊を引き返さない」

蒼銀の髪に、緋色の瞳。具現化した破邪の衣、負傷は全て治療しそして、

「日本に来て、初めて第二段階に成長した聖剣の刃……生半可な威力じゃないわよ？」

進化聖剣・片翼。は、その名の通り進化していた。

細身の片手剣だった聖剣は、刀身が広がり柄が伸び、柄にあしらわれた翼と紫の宝石、イエソドの欠片がより強く輝いている。

「やはり！　魔王軍壊滅の元凶！　聖剣の勇者エミリア！！」

マレブランケのリーダーは、畏れの気配も見せず、エミリアに堂々と相対した。

「我が名はチリアットー！ マレブランケの頭領が一人！ 亡きマラコーダ様の御遺志のため、新生魔王軍の未来のため、その聖剣、貰い受ける！ 皆の者、手を出すな！」

部下を制し、堂々と武人の名乗りを上げたチリアットに対し、エミリアは一瞬だけ、進化聖剣・片翼を顔の正面に立てて、騎士の礼を取る。

「ほんと、最近が悪魔に関して新しい発見がありすぎね……手加減は、できないわよ！」

太平洋上における、聖法気と魔力の一瞬の攻防。進化聖剣・片翼とチリアットの黒く強固な右腕の爪が交差し、

「ぐうー！」

ほとんど抵抗もなく、チリアットの右爪は両断され、太平洋の海へと落ちてゆく。

「まだ、やる？」

「へく……」

たった一度の攻防なのに、チリアットは悔しげにうめく。

彼の目は、エミリアの剣閃を全く捉えることができなかったのだ。

大天使すら不可能なことをマレブランケの頭領格ができうるはずもないのだが、一個の戦士としての絶望的な実力差を見せつけられて尚、チリアットに撤退の文字は無い。

なんとしても、聖剣を我が手に。新生魔王軍の手に入れ、魔王サタン亡き後の新たな魔界統一とエンテ・イスラ侵攻の足掛かりにせねばならないのだ。

「……退く気はないのね」

「（我はマレブランケの頭領が一人チリアット！ 敗北を恐れて敵に背を向けるようでは、新生魔王軍の範たりえん！ おおおおっ！）」

「わー ちよっと！」

エミリアは思わず敵なのに声をかけてしまう。

チリアットが、無事な方の爪で損傷した爪を根本から切り落としてしまったのだ。

「（折れて邪魔にしかならぬ武器など無用！ どうせまた生えてくる！）」

「あ、そういうもののなの」

敵ながらあつぱれ、と一瞬だけ思ったことを後悔する。

「でも、だからって痛くないわけじゃないでしょ。血も出てるみたいだし、得意の武器を片方失って、まだやる気？」

「（血尽き、肉果てるまで！）」

なんとも古風な武人氣質である。

戦場での死が武人の本懐であるとはエミリア自身は全く思わない。しかしチリアットがそう考えているならば、エミリアはこれまで通りの戦法で、敵である悪魔が最も忌み嫌う決着を狙うのみ。

「私が、大人しくあなたを殺すとは思わないことね」

エミリアは聖剣せいけんを構えた。

「あれ？ まま、いいの？」

アラス・ラムスがエミリアの様子に気づいて尋ねる。

聖剣せいけんの聖法せいほう気を、あえて弱めた。折角第二段階まで進化したのに、第一段階に戻ってしまった。それどころか、形状維持ギリギリの、ちよっと強い剣、程度の力に落とした。

「条件は、対等の方がやりやすいのよ。敵を……」

一瞬目を閉じ、瞳の裏に浮かんだ悪魔達の顔を浮かべる。

「殺さないためにはね！」

「（面白い！）」

チリアットも、左腕の魔力を限界まで落とす。術に頼らぬ純粋な戦闘技術を争おうとするエミリアの誘いに応じた形だ。

聖剣の勇者と、マレブランケの頭領びょうが睨み合い、洋上に緊張が走る。

エミリアには、一つだけ懸念けんねんがあった。チリアットを殺さずに撃退することはできるかもしれない。だが、それで他のマレブランケ達が大人しくしているかどうかは、その時になってみないと分からないのだ。

頭領が力尽きることで、部隊が暴走しないとも限らない。

そうすれば、結局はこの場で圧倒的な力を持つエミリアが、一方的に虐殺どくころを繰り広げるこ

とになるだろう。

「……甘くなつたものね、私も」

エミリアは、大きく息を吸って気持ちを入れかえる。相手はマラコーダに勝るとも劣らぬマレブランケの頭領。油断できる相手ではないのだ。その時のことは、その時考える。

エンテ・イスラで行われれば、町一つ消滅させかねないその戦いの始まりを告げる号砲は鳴らず、代わりに息詰まるような睨み合いを始めた二人が、はっと顔を上げる。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

古の巨竜の嘶きが、空間を支配した。

それだけなら、エミリアとチリアットは、刹那の時の後に激突していただろう。

だが巨竜の嘶きは洋上に白き霧の支配者を呼び起こし、いつの間にかエミリアとマレブランケの周囲は、真つ白な世界で閉ざされていた。

「(17)」

その白い世界の奥から、一点、黒い、巨大な何かが近づいてくる。

その存在感だけで、霧が割れて道を作る。王の道に毛氈を引く従者のように。

「チリアットか。名前は覚えてる。マラコーダ配下の、マレブランケの頭領格の一人か」  
エミリアの背後に、その巨影は現れた。

「だが、一体どういうことだ？ 俺は、新生魔王軍などという組織があるのを、聞いたことがない。この俺を差し置いて、誰が『魔王』を名乗り、魔王軍を再建しようとしている？」

「へな、何者………っ！」

エミリアの背後に現れた巨影を誰何する声は、見えない手によって首を絞められ最後まで出すことができなかった。

「マレブランケの頭領如きが無礼な口を……その喉、このまま砕いてやつてもよいのだぞ」  
いつの間にか巨影の隣に新たな漆黑が、チリアットに向けてその手をかざしている。

節くれ立ち先端が二股に分かれた尾を持つ、耳障りな軋る声を吐き、血の通わぬ肌を持つ男は、怒りに満ちていた。

突如現れた二つの巨大な力に、マレブランケの兵団は空中で後退しようとする。が、

「そっちから喧嘩売ってきて、詫びも入れずに逃げようなんてそれは甘いよ、甘すぎるよ」  
また、新たな声。氷の刃のような冷たさを秘めた少年の声に、ゲートに近い側のマレブランケ達は振り向いた。

小柄な人間と変わらぬ姿。

だがその背からは、夜よりも、闇よりも黒い一對の翼が、マレブランケの進路を塞ぐように広げられていた。

「全く……来るならもつと早く出てきなさいよ。無駄に気を回して損したわ」

禍々しい黒い力に、光の力はなんでもないように声をかけた。

「はは、わりい。久しぶりなんで勝手が分からなくてな」

背後の巨影は、ゆっくりとエミリアに並んだ。

「へき、貴様ら……ぐつ……一体……」

チリアットはうめきながらようやくそれだけ問うと、それに応えるかのように、霧の世界に浪々たる大音声が響いた。

「静まれ！ マレブランケの戦士達！ この御方をどなたと心得る！」

「ぶっ」

どこかで聞いたようなセリフ回しに、エミリアは思わず吹き出しそうになる。

だがその声を聞いて、苦しげにもがいていたチリアットは思わず硬直した。

硬直するチリアットの目の前に、悠然と翼をはばたかせて霧の虚空から舞い降りる、黒い魔

鳥戦士の姿があった。

「へあ、だ、大尚書……カミーオ、様……」

チリアットは、カミーオの姿を見て愕然とした。

「汝ら、人間の甘言に惑わされ、主に牙を刺るか！」

「あ、主……？」

チリアットの目が苦悶にまみれながらも、カミーオの差す巨影に向く。

魔鳥戦士の外套を纏い、赤黒く光る刃の宝剣を携えた、巨大な上背。砕けた片角、獣の足。全ての生きとし生ける者を震え上がらせずにはおれない、その瞳。

「あ……まさか……まさか……!?」

「マレブランケの戦士達！ 魔王サタン様の御前である！ 控えよ！」

軋る声上げる男が、聞いたことのある節回しでそう命じ、エミリアはまた吹き出してしまふ。

「ちよつと！ あなた達わざとやってない？」

「ま、魔王様!?」

「魔王様だ!?」

マレブランケの精兵千二百、そのすべてにさざ波のように動揺が広がり、口ぐちに皆、魔王様、魔王様と呟く。

「そっちの反応も……ううん、いいわもう」

「間違いない……あの角は……」

「あれは、侵攻軍の東方攻略司令……大元帥アルシエル様ではないか?」

「な、何故、大商書がこんな所に……サタン様は、没されたのではなかったのか?」

マレブランケ達の動搖が伝わってくる中、

「おーい、僕は無視か。え、無視か、おい！」

逃げ道を封鎖していたルシフェルの怒気に、殿軍に近いマレブランケ達が慌てて振り向き、ワンテンボ遅れて彼の姿に気がつく。

「(堕元帥殿だ……)」

「(堕元帥ルシフェル様?)」

「(だげんすい) って、響きがすげえ嫌なんですけど。てかマラコーダの配下共！ お前ら陰でそんなこと言ってやがったのか！」

ルシフェルの怒気に押されて、何人かのマレブランケが慌てて群れの中に逃げようとする。

「アルシエル、放してやれ」

サタンは鷹揚にそう言うのと、アルシエルはチリアットに向けていた手をさっと払う。

その瞬間締められていた喉が開き、チリアットは大仰に呼吸を再開した。

あまりの急展開に空中に棒立ちのまま、チリアットはゆっくりと周囲を見回す。

聖剣の勇者エミリア、悪魔大尚書カミーオ、大元帥アルシエルと大元帥ルシフェル。

そして、

「(御無礼をお許しくださいませ、魔王サタン様!!)」

ゆっくりと、サタンの足元に跪いた。

それを合図に、その場の全員のマレブランケ達が、一斉に空中に跪く。

「マレブランケの頭領、チリアット」

霧に浮かぶ魔の巨影は、重々しく言った。

「（は、ははっ）」

「俺はカミィオ以外の者に、勝手に魔界の民を率いることを許した覚えは無い。一体俺の留守中、何をしている」

「（そ、それは……っ）」

跪き首を垂れるチリアットに、サタンは思いのほか優しい様子で尋ねる。

「面を上げろ。申し開きがあるならば聞こう」

「（お、恐れながら……）パーバリツティアを筆頭とした我らマレブランケが一党、ただ人間の甘言に踊らされたわけではございませぬ！　すべては魔界の安寧のため、魔界を脅かす者共の手に聖剣が渡る前に、我らの手にと……」

「魔界の安寧？」

チリアットは、ちらりと視界の隅に、進化聖剣・片翼を携えたエミリアの姿を捉える。

「（我らを纏めるパーバリツティアは、人間の甘言に乗るふりをして、聖剣を全て我ら魔界の手中に収めんと……）」

「浅はかな！」

チリアットの申し開きの途中に、怒声（セウ）が割って入る。

「（アルシエル様!?）」

「貴様らを惑わした人間はたった一人、勇者の仲間オルバ・メイヤーと云うではないか。マレブランケの頭領が集結すれば、情報を聞き出した後その者を屠（ころ）り、時を稼ぐなど造作もないはず。何故（なぜ）それをせず、カミーオ殿の裁可（さいか）を仰（たの）がなかったのだ！」

「（そ、それは……）」

「言つてやるな、アルシエル」

チリアットへの加勢は、ほかならぬ彼を問責する魔王から来た。

「こいつらはそれを考えないほどバカじゃない。最初はバーバリッティアだってそのつもりだったろうさ。だが、結局オルバは御（ご）しやすい相手でもなければ、一人で動いてるわけでもなかった。ただそれだけのことだろう？」

「（……面目次第も、ございませぬ）」

苦悶（くもん）の表情を浮かべるチリアットに、サタンは言う。

「チリアット」

「（む……）」

エミリアが横から尋ねる。

「あなたが持っていた紫色の宝石、見せてもらえる？」

「〔紫色の宝石？……これのことか〕」

紫の宝石、というキーワードに、サタンたちにもかすかに表情の変化が起こる。

チリアットの手にあったのは、紫ではなく透明の宝石をあしらったペンダント。

最初エミリアはもしやと思ったものの、それそのものはイエソドの欠片でもなんでもないただの宝石だ。だが、エミリアはその輝きに覚えがあった。

「念話品球……」

どれだけ距離が離れていても、概念送受をやりとりできる、身も蓋もない言い方をすればエント・イスラの携帯電話だ。

「さっきの紫の光は……この念話品球の向こうからやってきていた？」

エミリアは、かつて一度だけ、あの光と似たものを見たことがあった。

今、目の前にいる魔王を討伐すべく、かつて、仲間を率いてイスラ・ケントウルの魔王城に突入したときのこと。その時は知る由もなかったわけだが、玉座の間近くのどこかにあったアラス・ラムスの種子に反応した聖剣が「導きの光」を出したのだ。

当時のエミリア達はそれを魔王のいる玉座の間への導きだと思っていたわけだが、つまりあの光は、イエソドの欠片同士が引かれあう光だったということになる。

「〔我らはこの光の差す方向に聖剣があるとししか知らぬ……この宝石が、どこかに繋がっているとしても、接続先など知りません〕」

「……それは、俺の名に誓っても、そう言えるか？」

サタンの確認に疑問の表情を浮かべながらも、チリアットはハッキリと答えた。

「（魔王サタン様の御名に誓い申し上げて、嘘偽りはございませぬ）」

顔を伏せて苦悶の表情を浮かべるチリアットを見下ろすサタンの顔は、在外に優しかった。

「よし……とここで、お前たちが出てきたゲート、どこに繋がっている？ 相互通行はできるのか？」

「（ゲート……は……）」

「いや、俺達はお前らを帰らせたいんだけど、手ぶらで帰ったお前らが任務達成できなくて処罰とかされても後味悪いからさ」

「（は、その、あの……）」

突然調子が変わったサタンに目を瞬かせるチリアット。

「安心しろよ、魔王はお前たち全員罪に問うつもりはないってさ。まあそっちの勇者に食って掛かって怪我した奴らは、高い授業料だったと思って治療に専念するんだね」

酷薄な笑みを浮かべるルシフェルに、チリアットは諦め顔で頷いた。

「魔界に帰りたいなら、帰るつもりがあるならば戻ることを止めはせん。カミィオ、割って出た主戦派連中が帰ってきてても、決して迫害するな。後のことは頼んだぞ」

「御意に」

カミーオが跪いて了承の意を示す。

「さて、チリアットよ。これからお前ら全員、お前らが帰るべき場所に返す。ちよつとスッ飛ばらしいが、まあ我慢しろ。後からカミーオもついてゆく」

「(スッと……?)」

「それから、魔界に帰ったら皆に伝えろ。俺は、魔王サタンは生きている、と」

「ちよ、何を言つて……きやつー」

チリアットを使つて魔界の士気を高めるつもりかと抗議しようとしたエミリアは、突然サタンに肩を抱きすくめられて甲高い声を上げた。

破邪の衣越しにサタンの堅い手が触れて、思わず凝固し鳥肌が立ってしまった。

そんなエミリアには構わず、サタンは海鳴りのような音で、轟然と命じた。

「そして聖剣の一振り、既に我が手の内にありとな。サタンは異世界で、再び魔界に安寧をもたらすために力を蓄えていると触れ回れ。それを以つて魔界の民の動搖を鎮めよ。チリアット、貴様をカミーオの補佐に任ずる。俺が帰るまで、よく魔界をまとめ、皆を導け！」

魔界を統べ、全ての悪魔を導く魔王サタンの号令が、霧の太平洋上に響き渡った。

その瞬間、チリアットのみならずマレブランク達、アルシエル、カミーオ、そしてルシフェルまでもが、その場に跪きサタンに敬意を表したのだ。

サタンはその様子を見渡して、満足げに頷き言つた。



「よし、んじや、お帰りの皆様こちらへどうぞー」

「くっ? ばべっく」

驚愕が霧を支配した。

サタンの目の前に跪いていたチリアットが、霧のような霧に包まれたかと思うと、どこからともなくやってきた光に照らされて、奇声を上げて消滅したのだ。

マレブランケ達がざわざわと動揺する中、

「はい後ろ詰まってるからきりきり並ぶー、大丈夫、痛くないらしいからー」

かき水で行列整理のコツをつかんだルシフェルが混乱を収めながらマレブランケを二列一直線に並べ、それを見計らったかのように、また一条の光。

霧の蔭に抱かれ、光線に呑まれたマレブランケ達は、それぞれチリアットのように奇声を上げながら、次々と消えていった。

「みんな変な声上げてっけど……まさか向こうで出た途端、光速で地面に叩きつけられてるなんてこたねえよな」

マレブランケ達が一掃された空で、サタンの少し不安げな言葉が虚空に消える。

「チリアットもあれでマレブランケの頭領格だよ。そんならいで死んだりはしないでしょ」

「や、俺でも光速はちよっと自信ねえぞ」

「無礼者のことなどどうでもよろしい……。今はあの巨大なゲートを封鎖しなくては……」

相変わらず悪魔形態では、必要なこと以外あまり喋らないアルシエルが先駆けて、マレブランケ達が現れた巨大なゲートに向かって飛んでゆく。

カミーオがそれに続き、ルシフェルも慌ててそれに倣い、そして、

「……いつまで肩抱いてるのよ殺すわよ!!」

怒り任せの聖法気の爆発が起こり、エミリアが怒り心頭に発した顔でルシフェルを追う。

一番最後に鼻の頭を真っ赤にして涙目になっているサタンがふらふらと全員の後を追った。

「……一体どんな規模のゲートなの。誰がこんなこと……」

接近して、改めてその規模の巨大さにエミリアは震え上がる。

マレブランケの大集団。しかも頭領格のチリアットと千のマレブランケ部隊を通過させてなお、その形状を維持しているゲートなど聞いたこともない。

マレブランケ達が『出てきた』ゲートなので、こちらからは入れないが、相互通行が可能ならばサタンとエミリアが全力の状態でも通過できそうなほど許容値が高い。

ゲートの隙間からは尋常ならざる魔力が漏れ出てきており、このあたりにマレブランケ達が悪魔型を維持できた理由がありそうだ。

「魔力由来のゲートであることは間違いないが……さりとてパーバリッティアなるマレブラン

ケ、頭領格とはいえマラコダの配下だ。それがここまで巨大なゲートを開けるものか？」

「パーバリツティア一人とは限らないじゃん。オルバも一緒なんでしょ？ あいつもゲート術には長けてるみたいだから、協力して開いたとか……」

「バカを言うでないルシフェル。この形の歪さ、マレブランケ共を通してなお開いたままなのだぞ。人間一人、悪魔一人でそんなことができるものか」

「や、だからなんでお前僕だけ呼び捨て……」

「でも、全盛期の魔王だったならこれくらいできるんじゃないの？ 大天使のサリエルだって放り込めるゲートを作れるんだし……」

三人の悪魔の相談に、エミリアはさも当然のような顔で意見を出す。

「そのサタンは今そこにいるんだけど？」

「あ、そっか」

悪魔と勇者が揃って頭を捻って考え込んでいる様がおかしくて、サタンは少し微笑んだ。

「……何がおかしいのよ。気持ち悪い顔してこっち見ないで。今度こそ斬るわよ」

「ああ、悪い悪い、そういうことじゃねえ」

サタンは普段通りの全く人間臭い仕草で手をばたばたと振る。

「分からねエかお前ら。一つだけあるだろ。どんなゲートでも、好き勝手に開ける方法が」

「……？」

アルシエルとルシフェルとエミリアが同時に首を傾げるので、またサタンは笑ってしまふ。

「なあカミーオ」

「は」

サタンは傍らに控えていたカミーオに尋ねる。

「昔っから、俺達ってどういうわけか、こうなるんだよな」

「左様にございますな。勇者ですら、その例外ではなかった、ということですか」

「……何ぶつぶつ言ってるか知らないけど、今物凄くあなた達を斬りたいわ」

「エミリア、今はそれどころではない。貴様も力を貸せ。裂け目を封じる」

抑揚の無い声でアルシエルがエミリアを諫め、次元の断裂に向かって手をかざす。

「……今回本当色々貸しよ。まったく……」

エミリアは、アルシエルの隣に並んで、進化聖剣・片翼を裂け目に向けた。

「僕は知らないからね。精算はサタン宛てでよろしく」

ルシフェルは責任逃れをしながら、エミリアとは反対側のアルシエルの隣に並ぶ。

「貴様は常にそうだから、吾輩は貴様に敬称を使いたくないのだ」

カミーオがルシフェルに苦言を呈しながら、断裂に向かって手をかざした。

「お前ら全員一蓮托生だ。俺一人じゃどんな無茶振りされるか分かったもんじゃねえ」

サタンはそう言って、腰の宝剣を右手に構えた。

カミィオの腰に収まる程度の宝剣は、人間より遥かに巨大なサタンが持つと、まるでナイフのように見える。

だが、

「あー……懐かしい感覚だ」

宝剣の刀身が、より強く、赤く、黒く光を帯びはじめた。サタンの魔力と、宝剣の魔力が呼応しているのだ。

「俺、こんなに強かったんだなあ」

宝剣の刀身に自らの瞳を映し、サタンは誰にも聞こえない声で呟いた。

「……今から、あのゲートを保定している力を空間から切り離す。そして後は任せるわ。漏れ出でる魔力を押し戻して空間にできた傷を塞ぐのよ」

悪魔達の気の抜けた会話を聞きながら、エミリアは精神を研ぎ澄まし、次元の断裂を睨み据える。

「ゲートを保定する力を切り離すって、んなことできるのか？」

サタンの問いに、エミリアは目だけそちらに向けて答えた。

その手のうちで輝く。進化聖剣・片翼。に、瞳を輝かせて胸を張る赤子の幻が映ったように見えた。

「できるよ、って言ってるわ」

「そっか。末恐ろしいこったな」

苦笑するサタンを置いて、エミリアは飛んだ。

黒いヘドロの中に雷鳴が轟くような、禍々しいゲートに向けて一直線に流星が飛び、そして、二振り、紫電の新撃が飛んだ。

それが断裂に届いた瞬間、ゲートと通常空間の境界線が急激に揺らぎはじめる。

「今よー」

「おっしや封じろ!!」

エミリアの合図で、四人の大悪魔が一斉にゲートに魔力を撃ち込んだ。

境界が波打ち、安定していた断裂が加速度的に圧縮される。

霧笛の嘶きが巨竜の嘶きだとすれば、圧縮されるゲートから発せられる轟音はまるで神話の時代に神に打ち倒された、混沌の魔獣の断末魔のような、悪魔の王の耳にすら怖気を走らせるこの世ならざる音だった。

圧縮されてゆくゲートに、霧が殺到しはじめる。

悪魔達の力を後押しするように、巨竜が嘶いた。

そして、

「海が……風いだ」

鈴乃と千穂は、人一人いない犬吠埼で、巨竜の嘶きを聞いた。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

遠い過去に滅びた仲間を探すような、たった一人生き残ってしまった神話の世界の住人の咆哮は、犬吠の海に高く遠く響く。

「鈴乃さん、霧が！」

霧笛の音が海上の霧を打ち払うように、出現と同じように、唐突に霧は消えはじめる。

「終わったのか？」

「終わったっぽいよん」

消えかけた霧の向こうから、再び天祢の声と姿が現れたのだ。

気のいい女店主の顔を崩さない天祢は、先ほど霧の中で見せた威風など微塵も感じさせない様子で言う。

「怖い連中と小鳥さんは、元の『彼らがいるべき世界』に返した。大きな『陥穽』も、真奥君たちが塞いだつばい。ただねえ」

そして、海を振り返りながら、困ったように頬を掻いた。

「ちよつと時間かかりすぎたつぼくてね。力、使い切ったんじゃないかな。遠くてよく見えなかったけど、多分三人海に落ちた。めっちゃ沖だけど、泳げるのかな」

苦笑する天柰と、お互いの顔を、鈴乃と千穂は交互に見た。

「はあ!?」

決着がついたのは夜中なのに、水平線が明るみ初め、星の光が大きな太陽に隠されようとする頃まで、恵美も真奥も、芦屋も漆原も戻らなかった。

千穂はほとんど泣きそうな顔で暗い海の中に彼らの姿がないかどうか懸命に探し、鈴乃は恵美の聖法氣の反応が消失しないようたまたま祈るしかなかった。

犬吠埼灯台は変わらずその威容を称え、明け方の海の安全を導く閃光を投げかけている。

灯台の建つ崖の下には遊歩道があり、波打ち際のすぐそばまで行くことができるようになっている。

もう間もなく水平線から新しい太陽が顔を出すそんな時間、岬の崖下の岸に、

「遊佐さん！ 真奥さん！」

「アルシエル！ ルシフェル！ 生きているのか!?」

蒼銀の髪勇者エミリアと、真奥貞夫、芦屋四郎、漆原半蔵が全身びしょ濡れになって流れ着いたのだった。

「ぜーっ……ぜーっ、ち、千穂ちゃん、ベル……その、あの、一応、終わった……」

息も絶え絶えのエミリアは、二人が見ている前で変身が解除され、いつもの遊佐恵美の髪と瞳の色に戻り、

「ちーねーちゃー！ すずねーちゃー！」

そこにもう一人、小さな影が出現していた。

「アラス・ラムスちゃん！」

「あのねあのね、ままとびとびいびいとあるしえーるとるしふえるがねー あのね アラス・ラムスは興奮しながら言い募る。

「いっばいのこーんなのどーんでして、いっしょにおおきなぶーんで、ぎゅっなの！」

「……」

「……」

さっぱり分らない。

「でね、むあーってびかってして、びいびいかえったの！」

「びいびいかえった……カミーオさん、魔界に帰ったんですか？」

千穂が真奥に尋ねようとするが、なぜか真奥は話す気力も無いようで、力なく浅い呼吸を繰り返すのみ。

「剣と……カミーオが、魔界に帰ったと同時に霧が晴れてね」

息を整えながら、恵美がゆっくりと起き上る。

「そしたら途端にこいつら、人間に戻ったのよ。海上二百メートルくらいの所でね！」

「え」

「もう本当、録音しておきたいくらい愉快な悲鳴上げながら海に落ちてったわよ。どういう理屈か分からないけど、人間に戻るのとはともかく飛んで帰る程度の魔力は残せばいいのに」

恵美とて、そう力の余裕は無かっただろう。半天使モードの変身が解けなかったとはいえ、男三人引っ張って、銃子の荒波を泳ぐのは並大抵のことではなかったに違いない。

「……この貸しは大きいわよ。ほんともう……無計画悪魔」

「ままびしょびしょ。だいじようぶ？ かぜひかない？」

「平気よ。アラス・ラムスは？」

「だいじよぶー」

アラス・ラムスと融合してから、事実上初の聖剣を用いた戦闘になったが、アラス・ラムスの体には本人の言う通り異常は無いようだ。

「今日はいっぱいがんばったわね。後でご褒美あげるわ」

「んー」

「はいはい、お疲れさんでした」

そこに、天祢が遊歩道を上から下りてくる。拍手をしながら全員を睥睨するが、彼女が普通の人間でないことが分かったものの、敵か味方が、今もって判明しない。

恵美も、鈴乃も思わず警戒を露わに身構えるが、

「あ、おいおいなんで喧嘩腰なの。別に私はなんにもしないってば。ちゃんと話せることは話すからさ、いくら夏だからって四人共そのまんまじゃ……」

天祢を睨み上げていた恵美だったが、ついにこらえきれずに、

「ひっくしゅ!!」

盛大にくしやみを一発。

「……風邪ひくぜい?」

天祢はそう言つて、岬の上を指差す。

「とりあえず、大黒屋に戻ろっか。シャワー、熱いお湯出るようにしとくからさ。ほら、見てみなよ」

天祢は額に手を掲げながら、沖を眺めやる。

「戦いを終えるにふさわしい、いい朝じゃんー」

丁度水平線から太陽が顔を出し、それと同時に大吠埼灯台の明かりは消え、灯台上部の灯室とうしつと呼ばれる光源を置いた部屋がゆつくりと遮光幕しやくこうまくを下ろし、海の安全を守る第一等フレネル閃光レンズを覆い隠していった。

銚子の町が日本に誇る最上級の朝焼けが、戦いを終えた勇者と悪魔と人間達のもとに光の腕を伸ばした。

※

太陽が水平線から上がりきり、今日も暑い一日なりそうな予感をはらむ君ヶ浜きんがはま。

その君ヶ浜唯一の海の家大黒屋は、大混乱の翌日にも関わらず、なんと開店準備に追われていた。

天祢曰く、

「雨が降ろうが槍が降ろうが、店と客のある限り店を開けてこそ日本人」

なのだそうだ。

真奥達にしてみれば言いたいことはあるのだが、そこは雇い主の強権を発動。

あんな異次元の大立ち回りを演じた翌日で、真奥の本当の姿も見ているというのに、

「逆らったら給料払わないぞ」

の一言で悪魔三人を沈黙しんもくさせてしまった。

ということで、真奥がテーブルを拭ぬぐき、漆原が子供用プールに水を張り、芦屋は昨日の客数を見込んだ仕込みを始めているのである。

「最初に私が来たとき、千穂ちゃんも鎌月ちゃんもまー怯おそえて怯おそえて。あなた達、一体私をなんだと思って何を吹き込んだわけ？」

「や、だって、あまりに得体が知れなかったし……」

真奥は言い訳がましく言った。

鈴乃と千穂は旅館から、恵美と真奥達が飛び立つのを最初からずっと見守っていたのだ。

マレブランケの大隊が迫せまっているのに恵美が千穂を君ヶ浜に残したことを真奥は最初責めたが、

「天祢さんの力が本物なら、本当に万が一のことがあっても安全だと思った」

とは恵美の弁だ。

「これこれ、千穂ちゃんだけじゃなくて、もう一人女の子はいたんだぞ。そっちについてはどう考えておるのだね君たち」

「わ、私は別にー マレブランケ如ごときが相手なら、千穂殿を守りながらも戦えるー」

店の隅で何故かスネた態度を見させている鈴乃は、天祢に話題を振られて慌あわてて喚わめき散らす。

「や、鈴乃は普通に強いし、まあちーちゃん守ってくれててありがたいくらいしか……」

「~~~~っ!!」

「だからいけません魔王様! 現実とはかくとして一人だけカミィオ殿のことも知らず仲間外れにされていたようなものなのです、そこはきちんとケアしてっぐぶ」

芦屋が慌てたようにまた諫言するが、思いつきり丸聞こえだったためにまたも後頭部に打撃を食らい昏倒する。今度は醤油瓶だった。

「誰が仲間外れだ! そんなこと気になどしていない! 大体私が出れば悪魔の大隊の千や二千、全員海の藻屑にしてやったものを、まったく、エミリアは甘すぎる!」

憤然とした様子の鈴乃は、それでもどこかさびしげに口を尖らせて、店の隅にいる惠美を睨む。「一匹も殺さなかったらしいではないかエミリア! 一体どうしたというんだ!」

「別に、どうもしないわよ」

店の暗がりにいる惠美は、一人水着姿だった。

海に飛び込んだせいで、惠美の衣類は現在大急ぎで洗濯中なのだが、着替えを用意していなかったため、仕方なく昨夜乾かした水着を一時しのぎに着ているのだ。

「ただ……もう憎しみのまま目の前の相手を殺すのはやめにしただけ。もちろん必要が生じれば、相手の命を奪うのに躊躇うことはないって断言できるわ……でも」

惠美はちらりと、テーブルや椅子を拭く真奥を見る。

「やりあうなら、向こうに帰ってからじゃないと、フェアじゃないわ。チリアットだって、き

つと本當ならもっと強いと思うの。もちろん私だって日本じや本當に全力を出せない。殺すのは簡単だけど、ヘタに向こうの恨みを買うような戦い方はもう面倒じやない。こんな」

惠美はお手上げの形に両手を上げる。

「わけのわからない戦いを、未来に持ち越すことはないわ。最後は私達が圧倒的な力をして勝つ。そのために殺さなかったの」

「かー……朝っぱらから娘っこ共が斬った張ったの殺すの殺さないのと、大和撫子は幻か？」  
レジでつり銭を用意している天祢が世を憐むように言う。

「で……結局あの光は灯台の光で、霧やなんかも操作してたのは天祢さんなんでしょ？ あの霧は、一体なんだったの？ 最初の独眼刻印鬼とかビーストデモノイドとか……あの辺はどうなったの、死んだの？」

漆原の疑問に、天祢は全く調子を変えず、売り物のオロチミンCを飲みながら答えた。

「生命の樹の子等、生まれしセフィロトの樹の地にあれ、よ」

「は？」

なんの脈絡もなく飛び出してきた「セフィロト」の単語に、全員が色めき立つ。

「彼らは本来いるべき場所に帰っただけよ。光はその道を示すだけ。まあ、ちよーつとやり方は強引だったけど。私達の商売を邪魔させないためにも、あーゆー人らがここにおつては困るのですよ」

要領を得ない答え方をしてから、天祢は真奥を見る。

「真奥さんさ、ミキティ伯母さんと会ったことあるんでしょ？」

「え、ええ、それはもちろん……」

「何か聞いてる？ 私達のこと」

「何かって……私達って、え？ 親戚がどうこうってことじゃなくてですか？」

「……あー、ならダメだ。これ以上言えないわ、私の口からは」

天祢はレジのつり銭引き出しをしようと、苦笑して首を振る。

「一体どういうことですか？ やはりあなた方は、ただの人間ではないと？」

あらかた野菜を仕込み終わり、使い終わった包丁を砥石で研ぎながらの芦屋の間に、天祢は首を振る。

「そーだねー。まあ人間じゃないって言えばそう言えるのかもしれないけど……でも、毎年健康診断受けてるけど何も引かなかったことないしなあ。超健康体だぜ」

「いえ、あの、そういうことを伺っているのではなく……」

「別にいいじゃん、生きてるんだからなんでもさ」

そう言うとも、天祢は恵美に参み寄る。

「……あの？」

「よく寝てるね」

恵美の目を見つめたまま、天祢は恵美の額ひたいに手を当てる。

恵美と見つめ合いながら、寝てるも何もあるまい。

天祢はもしかしたら分かつているのかもしれない。恵美の中に、アラス・ラムスがいることを。「この子を悲しませないで、大切にやってね。もしかしたら、物凄ものすごく遠い遠い、私の親戚かもしれないんだから」

「へ？」

その言葉の意味を理解する前に、もう天祢は恵美の額から手を離し背を向けていた。

「さって、そろそろ朝の準備終わった？」

天祢は真奥と芦屋と漆原うしはらに声をかける。

「あ、何か丁度いい感じですか？」

そこに、千穂ちほが裏手から、恵美の服を抱かかえて戻ってきた。

「今日も暑くなりそうですね。ほんのちよつと干しておいただけなのに、もう乾いています。はい、遊佐さん」

「あ、ありがと千穂ちゃん」

恵美は天祢から視線を外せないまま千穂から洗濯物を受け取る。

「おし、いいタイミングだね。では諸君」

天祢はばんばんと手を叩たたき、全員の注目を集める。

「短い間だったけどありがとう。もう、皆にはここでは働いてもらえないんだ」  
そして、そんなことを言い出した。

「……………」

真奥と芦屋と漆原が、間の抜けた声を出す。

「後のことはまあ私がなんとかすつから心配しないで。あ、真奥君と鎌月ちゃん、ミキティ伯母さんが急ピッチで工事してくれたらしいから、アパートもう直ってるってよ」

「な、何言ってるんですか？ わ、訳分らないんですけど」

ようやく天祢の言葉を呑み込んだ真奥は、朝の陽気に顔を青くしてしまう。

「話さなかったっけ？ モウレンヤツサの話」

「モウレンヤツサ？」

そう言えば皆で花火をした夜に、天祢からそんな話を聞かされた気がする。

モウレンヤツサ。銃子に伝わる、船舶電。

「あれ、本当の話なの。細かいところは色々違うんだけどね」

「へ？」

「いやー、ミキティ伯母さん推薦だから、なあんか特別な事情があるんだろーとは思ったけど、ちょっと君たち、お客さんに刺激が強すぎるんだわ。特に真奥君と芦屋君はね。この浜のエネルギーバランス崩しかねない」

「……あ、あの、天祢さん、お話の途中、すいません。あの」

そこに、なぜか真奥達と同じくらい顔を青くしている千穂が、天祢の話に割って入ってきた。恵美が座っているのとは反対側の店の隅を指差して、体を震わせている。

「あそこ……子供みたいな影が、座ってませんか？」

「……あちゃー」

天祢だけがそれを見て、天を仰ぐ。

真奥も芦屋も漆原も、恵美も鈴乃も、誰一人そこにそんな影があることに気づかなかった。

千穂に指差された影は、自分が注目を浴びていることに気づいたのかふっと顔を上げる。

「つつつつ……！」

恵美が声なき声を上げて、水着姿のまま椅子から飛び上がった。

顔が無かった。というよりそれは、完全に影そのものだった。

真つ暗な影が人間の子供の形を取り、全員が凝固している前を浜目がけて走り去る。

「ま、ま、ま、まお、まお、さま……」

芦屋が指差した先を見て、また全員の顔が引きつる。

海が、浜が、ざわめいていた。

海水浴客、ではない。

たった今、店から走り出ていった何者かと同じような、無数の人型の影。

夏の朝陽に照らされた、明るい暑い君ヶ浜には、いつの間にか無数の影だけが、集結していた。そのすべては人間の形をしている。中には浮き輪やビーチボールらしきものを持っている影もある。食べ物や飲み物を持っているらしい影もある。

だが、そこにいたのは影だけの大集団だった。

「あま、あままま天祢さんこれは一体!?」

全く唐突に現れた異様な光景に、誰もがどうしていいか分からずパニックに陥っていた。

一体この無数の影法師たちはなんなのか。害意は無いようだが、どう考えたって昨日まで普通に來ていた人間の海水浴客ではない。

「まー、君達にもこの状況の責任はあるわけでね」

天祢一人なんの動揺も無く、なんでもないことのように手を振る。

「どどどどういうわけですか!?」

顔を蒼白にして立ちすくんでしまっている千穂を背後にかばいながら真奥は絶叫する。

「『魔力』と『聖法氣』。それがなんなのか、君達は考えたことがあるかい?」

「な、何を……」

「ご来光には特別な力があるって言うじゃん? 水死した怨霊のモウレンヤツサなんていやしないのさ。ここは一個の魂が、心を洗いにくる地球でも数少ない聖地。ま、七月半ばから八月半ばまでの期間限定だけど、彼らはここで心に安らぎを取り戻すの。私と、私の親父は死者の

魂を守るために戦う、この土地の番人みたいなものかな。でも……」

天祢は少しだけ、厳しい視線を真奥に向けた。

「君達の『魔力』や『聖法気』は、破綻しかけた世界でしか生じ得ない。特に昨日、あんなに巨大な魔力を沖でふりまかれたせいで、完璧にバランスが取れていたはずの聖域にゆがみが生じた。そのせいで彼らは、一時取り戻せるはずの『人間』の形を失いかけてる。だから、君達にはここから出ていってもらわなきゃならない」

「破綻しかけた世界？ な、なんの話だ？」

鈴乃の問いに、天祢は思わせぶりな笑みを浮かべる。

「地球にだって、あなた達の知らない力や不思議が、沢山あるのよ。ずーっとずーっと遠い昔

……そう、神様が生まれるよりもずっと昔からね」

明らかに煙に巻こうとする回答だが、天祢は鈴乃たちに疑問を挟む隙を与えなかった。

「ま、そういうことだから、ごめんね。ちゃんと大入り込みでバイト代は出すから。一応お金のことはサービス込みでしっかりするようしつけられてっからさ、そこは安心して」

そう言つて指を鳴らした。その時、

ぶおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおおん……………。

ぶおおおおおおおおおおおおおおおおんん……………。

霧笛が鳴った。

その音と共にどこからともなく、忍者の煙幕もかくやという勢いで霧が浜中にたちこめた。浜風と砂煙すらともなつて、ほとんど目を開けていられない中、真奥は天祢の声を聞く。

「私は、地球の『ピナー』の娘」

正面に立っていたはずなのに、風と霧で反射して、最早どこから天祢の声がしているのか分からない。

「あんなたちの世界の『ダート』を探して、世界のあるべき姿を取り戻しな。ミキティ伯母さんは、きっとそれ待ってる」

それが、最後だった。

霧笛がやんだ次の瞬間、爆風と共に霧が崩散らされる。

そして、開けた視界から、君ヶ浜の海水浴場も、異形の生き物たちも、海の家大黒屋も、忽然と消えていた。

今まで広く明るい砂浜だったところには、護岸のために水際ぎりぎりまでコンクリートで固められた遊歩道が出現し、海中には無数のテトラポッド。それは大黒屋にやってきた初日、千穂が波間に見たものと同じ。岩礁だらけの浅瀬が広がり、とても海水浴場として使える浜ではない。

真奥と芦屋と漆原、恵美と千穂と鈴乃、そして真奥達の荷物だけが、草がまばらに生えた遊歩道にぼつねんと取り残されている。

「な、な、な」

真奥はわななく。

「なんなんだこりやああ!?」

真奥の絶叫を、君ヶ浜に吹く風が、遠く沖まで運び散らす。

それに応えたわけでもないだろうが、上空からひらひらと、赤い紙のようなものが真奥達の足元に落ちてきた。数は丁度六枚。

「ま、真奥さん、これ」

千穂がその赤い紙の表を真奥に見せる。

「大入り袋……たあ？」

※

準備を入れてもたった二日と半日のバイトで、一人五万円は景気のいい大入りだったと言わざるを得ない。

千穂と恵美が一万、鈴乃が二万入れられていたことを考えると、初日の儲けの大半は吐き出

してしまっていることになる。

魔界の王でも理由が分からない怪奇現象全てを考えた上で、明日からの大黒屋（オウゴンヤ）の行く末が純粹に心配だ。

「こ、これは……油断したところで木の葉に変わったたりしないだろうな」

無数の影法師の大集合を見た後では、鈴乃（スズノ）がそう疑いたくなるのも仕方ないことだろう。全員が、守銭奴（しうせんぬ）のように一枚一枚のお札を熨めつ（おひめ）眇めつ（みよめ）してから、誰ともなく口にした。

「……爆ろう」

視線を遮るものが無くなってしまったので、惠美（めぐみ）はやむなく水着の上から乾いた服を着た。犬吠埼（いぬばたけ）の旅館も、灯台（とうだい）も、この二日見ていた姿と何も変わらない。だが、道行く人々にここに海水浴場が無かったかと聞えば、きっとそろって首を横に振るだろう。

大家がかつて、思わせぶりな態度を見せた後に行方（ゆくゝ）をくらまし、肝心なことがうやむやになっているように、今ここで大黒屋や天祢（あまね）の痕跡（あと）を探しても、きっと無駄なのだろう。

念のためにとかけてみた天祢の携帯電話は、電波の届かない場所にいるか電源が入っていないという音声ガイドが流れるのみだった。

「魔王様、あの、荷物のところにこんなものが」

真奥（まおく）は芦屋（あしや）が差し出してきた大きな紙に目をやる。

「食えないというか、どこまで真面目（まじめ）なのか分からねエよなあ……ほんと」

それは天祿の手書きの、鏡子市の観光見どころガイドだった。

※

三百三十度までが、海。

そして、鏡子市全てを一望できるその高さ。

「何これ、普通に空飛べばいいじゃんあだっ」

風情のない文句を垂れる漆原を黙らせた真奥は、展望台の中央に設えられた、階段状の台の上に飛び乗った。

「……広いなあ、おい」

三百六十度の大パノラマで、太平洋と鏡子市を一望できるその光景に、真奥は深呼吸をするように空を仰いだ。

地球の丸く見える丘展望館。

展望台というよりビルの屋上という風情ではあるが、犬吠駅から丘を登り、周囲でも一際高い丘の上に建てられたそこは、鏡子でも指折りの観光スポットだった。

本当は鏡子電鉄に乗ってきつさと帰るつもりのもりの真奥達だったが、犬吠駅にたどり着くと丁度一本、電車が行ってしまった後だった。

次の電車まで折悪しく三十分以上あるタイミングで、ただ待ちぼうけしているのもつまらないということ、寄り道程度に立ち寄ったのだが、これが思ったよりも良い眺めなのだ。

日差しは強いが、その分雲一つ無い快晴で、銚子市の隅から隅まで見渡せる。

そばにいるときには大きいと感じた大吠埼灯台が、ここから見ると非常に小さい。

「魔王様、銚子市の面積如きで何を仰います。いずれは、エンテ・イスラの覇権を握らねばならぬのです。エミリアに器の小ささを誤解されてしまいますよ」

「でもなあ芦屋、俺達は、今んとこ、誰かの力を借りなきゃその銚子市だって守れなかったかもしれないんだぜ」

「それは……そうかもしれません」

「ま、それ以前にお前や漆原、マラコーダやアドラメレク、カミーオの力が無きや、魔界だっておぼつかなかったわけだけども。そんなお前らだって最初は俺の敵だった。敵だった奴が味方になって俺の覇業を支えてくれてる」

真裏は芦屋の肩に手を置いた。

「それなら人間だって、そうなると思わね？」

「……なるほど、そうかもしれませんね」

「なんだよ、もっと驚くと思ったのに」

「慣れておりますから。魔王様の突飛な行動には」

芦屋の澄ました反応に、真奥は口を尖らせる。

「だってよ、もったいねえじゃん、あんなんで電気作ろうとしたりさ」

屏風ヶ浦に並び立つ、巨大な風車を指し示し、

「魔力もねえのに、魔王城よりも高いスカイツリーみたいな建てたりさ」

「魔王様、地図によるとあれは銚子ポートタワーです。魔王城は、あれよりもっと高いです」

「そうかと思えば銚子電鉄みたいに、一見古くて不便なものを生かして新しい文化作ったりさ、こんな連中滅ぼしていい訳がない。これを全部ひっくり返して、支配したいと思わないか？」

「理想を語るのは結構ですが、まずは恒常的に魔力を行使できるようにしてからでないと」  
子供の様に目を輝かせる真奥に芦屋が苦笑すると、恵美がふと尋ねてくる。

「そう言えば、あなた達どうやって元の姿に戻るだけの魔力を手に入れたの？」

今回特別、犬吠周辺で大勢の人間から負の力を得られるような事件や事故は無かったはずだが……。

「ああ、カミーオが持ってきた、剣あつたろ。あれな、お前が砕いた、俺の角だ」

「……は？」

恵美は思わず口を開けてしまう。

「オルバが持ってきたもんなんだとよ。俺の角の破片を集めて鍛えた剣だったんだが、結局誰も使える人間がいなし、カミーオとの交渉材料程度に持ってきたんじゃないかってことらし

い。それよりも問題はこっちでさ」

真奥はズボンのポケットから何かを取り出すと、惠美に向かつて放って寄越した。小さな、ビー玉ほどの大きさのそれは、陽光を反射して紫色に光っていた。

「こ、これって……!?」

「あの寶石じやらじやらの鞘の中に紛れてた。カミーオが言ってたろ。オルバが聖剣を求める手がかりになると言って残したもののつてのは、多分それのことだ」

「そ、その鞘って誰が……」

「俺の角使った剣を、オルバが抜き身で持ってきたとは思えねエ。特に出所聞いたわけじゃないが、それもオルバが持ってきたんだろうな。まあ……そうなると、オルバの後ろにいる奴がどんな野郎かつても、大体想像はつくわな」

「そう言えば……内部調査で、確かにオルバ様が貴様の角の破片を大量に所持していたが……それをどうやって剣などに打ち直すのだ?」

「そんなこと俺が知るかよ」

オルバが真奥の角を調べていた痕跡をたどって日本にやってきた鈴乃にしてみれば、看過しがたい事態だろう。

何せオルバは未だ、エンテ・イスラ西大陸における大法神教会の權威なのだから。

一体何が彼をそこまでの行動に駆り立ててるのか、今もってさっぱり分からなかった。

「多分、そのイエソドの欠片が俺の魔力を抑え込むのに使われたんじゃないか？ 剣になって俺の角の魔力をダダ漏れさせない安全弁になってたってわけだ。カミィオや独眼刺印鬼なんかが悪魔型のままだったタネってことなんだろうな。ま、それならそれで、聖剣を血眼になって探してるくせして欠片の一つを簡単に放り出す意味は分からないわけだが」

恵美は手の中の紫色の宝石、イエソドの欠片を凝視する。

「とりあえず、俺が持ってたってどうしようもない。アラス・ラムスにやれよ。またお前の力になるかもしれねえだろ？」

「あ、ありがと……って、そうじゃなくて！」

思わず素の返事を返した恵美は、首を振って言う。

「これで私の力がまた増幅するとか考えないの？ アラス・ラムスと融合しただけで、私天使に勝てるようになってるのよ？」

「じゃあいらねえのか？」

真奥は面白くなさそうに鼻を鳴らす。

「お前な、ぶっ壊れた片方の角に残ってた魔力だけで、四人変身させた俺の魔力ナメてんじゃないぞ。本来の力を取り戻したら、そんなお前含めて、全部俺が支配してやっから覚悟しとけ」  
「なっ!!」

真奥の言葉を耳ざとく拾ったのは千穂だった。

「真奥さん！ 今のは魔王が世界を征服してやるって意味ですよ、そうですね？」

千穂が言うのと、とことん「世界征服」の重みは質量を失い、風に流されていってしまう。  
恵美は恵美で、

「な、な、な、何を言ってるのあなたは！」

と顔を真っ赤にして狼狽えている。

「今からでも遅くない。天祿殿を探しに行つて、魔王共を魔界に強制送還させて、さっさと討ち滅ぼしに行こう。そうしよう、うん、そうするべきだ」

鈴乃は一人、暗い顔つきでぶつぶつと呪詛のような声を吐く。

「魔王様、人の目があります。自重なさってください」

「真奥、聞いてて色々と恥ずかしい。暑いしこれ以上日焼けしたくないから下降しようよ」  
聞きようによつては色々と危険な意味を含む真奥の言葉に若屋は狼狽え、漆原は興味なさそうに、だが自分には火の粉がかからないように一歩引いた場所からヤジを飛ばす。

「こん、こんつ……こんな屈辱は初めてだわ！」

恵美は顔を怒りで真っ赤に染めながら、今にも真奥に掴みかからんばかりだ。

思い余つて聖剣を振るわなければよいが。

大人げない人間と悪魔の残念な言い争いは、雲一つ無い夏の空に吸い込まれ、そして消えていった。



## 終章

エンテ・イスラ中央大陸の復興政府が置かれ、各国から派遣された五大陸連合騎士団が駐留しているイスラ・ケントウルムの北方の大都市ノザ・クオータス。

早朝のノザ・クオータス行政府に入ったその一報は、各大陸同士で本格的に政争や利権争いを始めるほどに平和になった各国重鎮や騎士団司令官達を、混乱の巷に叩き落とした。

東大陸全土を統べる大帝國エフサハーンが、北西南の各大陸の騎士団宛てに、帝國首領たる統一蒼帝の名で一方的に宣戦を布告。

中央大陸を武力制圧する宣言を発したのだ。

東大陸全土を統一するエフサハーンは、全世界の国家の中では群を抜いた規模の国土面積と人口を誇るが、元は東大陸の中の一国家が周辺を併呑して拡大した国家であり、内紛の火種が絶えず内政も安定していない。

南北大陸との国境にある洋上で海軍同士の小競り合いをしょっちゅう起こしては引き下がるということを繰り返していたため、エフサハーンの宣戦布告ほど信憑性の無い外交活動も無いとされていた。

だが、エフサハーンが北、中央、南の各大陸に属する国家との国境線に展開した部隊の中に、悪魔の姿が混じっているとの報告が連合騎士団の間を駆け巡ったのである。

結果、東大陸の騎士団が丸々本国に召還されてしまったことが決定打となり、五大大陸連合騎士団は事実上崩壊。母国の防備に当てるべく、ほとんどの騎士団が各大陸へと戻ってしまった。空白地帯となつてろくな戦力も無い中央大陸は、現在風前の灯と化している。

統一蒼帝の宣戦文書は非情を極めた。

和睦や和平の申し出は一切認めず、大エフサハーン帝国に恭順を誓うか、あるものを統一蒼帝に献上することでのみ、中央大陸の主権維持を認める旨を発表したのだ。

その「あるもの」が、エフサハーンを迎え撃つ四大陸の結束を難しくしていた。

魔王軍に征服された恐怖を忘れられない北大陸と南大陸の対東大陸服従派は、西大陸に向かつて、その「あるもの」を占有していた責任を追及しはじめた。

その西大陸も、大陸最大の影響力を持つ教会勢力と神聖セント・アイレ帝国との不和から統一見解を出すことができず、エンテ・イスラの平和はわずか二年弱で終わろうとしていた。

エフサハーンが要求する「あるもの」。

それは、進化聖剣・片翼であつた。

## 作者、あとがく — AND YOU —

小学生の頃、家族旅行で言った御宿の海岸で、花火で遊んでいた若者たちの打ち上げ花火の  
一発が強い浜風<sup>なみかぜ</sup>に煽<sup>ふ</sup>られて私の頭に着弾し、大火傷<sup>たいやけど</sup>を負ったことがありました。

旅館のおばさんが適切な応急処置をしてくださったおかげで痕<sup>あと</sup>は残りませんでした。その後しばらくゲームで炎系の魔法を使えませんでした。こうして書くとき大したことないように見えますが、子供心に結構トラウマでした。被弾したとき、しばらくハゲでしたし。

花火はきちんと後片付けをして、ルールを守って楽しく遊んでくださいな。

今回の魔王と勇者達が「働く」舞台となる土地でお話を作ることは、『はたらく魔王さま!』構想当初からの目標の一つでした。

この土地には二つの奇跡が実在します。

まず一つ、離島や高い山を除くと本州で最も早く日の出のご来光を見ることができるといふ、自然の奇跡。

実際に、千葉最東端の大吠埼<sup>おほいはいさき</sup>から見る朝陽は、筆舌に尽くしがたい美しさです。何故<sup>なぜ</sup>こんな美しい営みが自然にあるのだろうか、その不思議を思わずにはいられません。

そしてもう一つは、たった一枚の煎餅<sup>せんぺい</sup>の下に、天の時、地の利、人の和が集まり地域と産業

を救った、人間社会の奇跡。

慈善や補助に甘えるのではなく、正面からお金の問題に立ち向かい、たゆまぬ努力と研鑽と魅力で遂にはネットとリアルを人の情で結びつけ、安定運行の維持を守った銚子電鉄の物語は、人が働き経済効果を生み出すことの、一つの理想系の体現だと作者は思うのです。

そんな土地で働けば、うちの魔王達も得るものがあるのではないかと作者は老妻心ながら思っているのですが、当の魔王や勇者たちは多分そんなこと微塵も考えずに、今まで縁の無かった土地や戦場で、必死に頑張って、明日を生きたためにドタバタしています。そんなお話です。今回は漆原の暴言と、本人は決して悪気はありませんが、思い余って言ってしまった芦屋の一言について、銚子電鉄様とアポロ計画関係者各位に、悪魔大元帥達に成り代わり深くお詫びいたします。

また、現実の君ヶ浜しおさい公園は、波と潮流の関係で遊泳禁止の措置が取られております。海の家はありませんし、海水浴もできませんのでご承知おきください。

本書にて『はたらく魔王さま!』は、めでたく一周年を迎えることとなりました。担当編集A氏、イラストレーター029さん、AMW関係各位や校閲様印刷様流通様書店様、何より本書をお手に取ってくださる読者の皆様に全身全霊の感謝を捧げつつ、今回のあとがきを締めくくらせていただきます。



●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま!」 (電撃文庫)

「はたらく魔王さま! 2」 (同)

「はたらく魔王さま! 3」 (同)

本書に対するご意見、感想をお寄せください。



あて先

〒102-8584 東京都千代田区富士見1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和ヶ原聡司先生」係

「029 先生」係





電撃文庫

# はたらく魔王さま!4

和ヶ原聡司

発行 二〇一二年二月十日 初版発行

発行所 高野 潔

株式会社アスキー・メディアワークス

〒一〇二八五八四 東京都千代田区富士見一八十九

電話〇三五一二六八三九九（編集）

http://www.akb.jp/

発売元

株式会社角川グループパブリッシング

〒一〇二八一七七 東京都千代田区富士見二一三三

電話〇三一一三三八八六〇五（営業）

監者

株式会社 株式会社 株式会社

製本

本書のコピー、スクリーン、電子データ化等の無断複製は、著作権法上での

例外を除き、禁止されています。なお、代行業務等に依頼して本書のスクリーン、

電子データ化等を行うことは、私的利用の目的であっても認められておらず、

著作権法に違反します。

本書の電子データ化は、権利者の許可を得た上で、行われるものとします。

但し、本書が本書を輸入されている場合は、お取り扱いさせていただきます。

本文部はカバーに表記してあります。